

平成24年度

研修集録

第 27 号

秋田市立秋田商業高等学校

発刊にあたって



校長 進 藤 隆

大辞林には研修の意味を次のように書いてある。「学問・技能などをみがき修得すること。特に、職務に対する理解を深め、習熟するために学習すること」

高校教師である私たちには、後半部分がより切実である。私たちには担当する免許教科に対して応分の責任がある。そして私たちは、個性豊かで一人として同じ者がいない生徒を相手にしている。生徒とのつきあいや生徒觀察を通して学習することは多い。私自身学習したことで次のようなことがあった。一つ目。Y高校に勤務していたとき、生徒会を担当した時期がある。K君は生徒会長と剣道部の主将を掛け持ちしていた。試合を見に行ったことがある。彼は小手や胴を打ち込む技術も持っていたが、本番では面にこだわり続けていた。ベスト4をかけた試合だったはずだが、その時も面にこだわり敗れた。後日生徒会室で、面だけではないだろうと話したら「審判は弱小校に厳しく、よりはっきりした勝ち方でなければ旗を上げてくれないので。」ときりかえされた。二つ目。O高校で、担任だった私はクラス全体の試験結果を公開すると言い切った。その日の学級日誌に日誌当番のSさんが「学級の成績を上げようとするためにそうするのだろうが、される側の生徒の気持ちはみんな違うことをわかっていない。」と書いてあった。翌朝撤回した。

「研修」という言葉が自省することの延長上にある言葉だと考えれば、教師の研修機会は身近に数多くある。

物理学者の顔と随筆家の顔を持つ寺田寅彦は「人の言葉ー自分の言葉」の中で、本居宣長の『玉かつま』を紹介しながら次のように書いている。

「おおかた古（いにしえ）を考うる事、さらに一人二人の力もてことごとく明らかに尽くすべくもあらず。またよき人の説ならんからに多くの中には誤りもなどかなからん。必ずわろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古の心ことごとく明らかになり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、思ひのほかにまた人の異なるよき考え方いで来るわざなり。あまたの手を経るまにまに、さきざきの考え方の上をなおよく考えきわむるからに、次々にくわしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて必ずなずみ守るべきにもあらず。よきあしきをいわず、ひたぶるに古きを守るは、学問の道には、いかいなきわざなり。」

この初めの「古（いにしえ）を考うる事」というのを「物理学上のいかなる問題にても」と改めて、もう一ぺんはじめから読み返してみるとおもしろい。この宣長の言葉をかみしめる事をすべての科学の研究者にすすめたい。—以下省略—

寺田寅彦は、置き換え手法で科学の研究者に対して、あるべき研究者の生活姿勢を求めている。この部分を教師に置き換えれば研修の大切さが私たちにより迫ってくるように思う。

目 次

◎巻頭言「発刊にあたって」

校 長 進 藤 隆

I 平成24年度地球温暖化防止活動環境大臣表彰

◇「平成24年度地球温暖化防止活動環境大臣表彰受賞について」

ユネスコスクール班 大 堤 直 人 3

◇E S Dの実践を連携から考える

ユネスコスクール班 太 田 直 8

II 研究発表

◇平成24年度東北六県商業教育研究大会

「発想力を養うプログラミング教育について」 商業科 小 西 一 幸 21

◇平成24年度秋田県教育研究発表会

「秋商ビジネス実践の取組」 商業科 保 坂 徹 26

櫻 庭 咲 子

III 指導主事訪問（研究授業）

◇指導主事訪問における研究授業の学習指導案と反省・課題

教 務 部 33

英 語 科 34

商 業 科 38

研 修 部 43

IV 校外研修

◇情報教育校内研修推進者養成研修講座に参加して 商業科 小 玉 美保子 44

◇児童生徒、保護者会が変わるエンカウンター

保健・教育相談部 山 本 正 敏 46

V 校内研修

◇「ドコモ『ケータイ安全教室』」 研 修 部 48

◇「キャリア教育を推進する理由」 研 修 部 53

◇「緊急時の救急対応について」 研 修 部 58

VI 研究授業

◇勝平中学校との学校間連携の実施について 研 修 部 59

VII 授業公開週間の実施について

研 修 部 68

VIII 報告

◇秋商キャリア教育の計画と実践 商業科 保 坂 徹 72

◇ビジネス実践「A K I S H O P」 商業科 櫻 庭 咲 子 74

◇ビジネス実践「キッズビジネスタウン」 商業科 石 田 雄 哉 77

◇秋田市学校保健大会に参加して 保健・教育相談部 須 藤 あさ子 80

◇図書館活性化のための試み 図書・視聴覚部 那 須 淳 子 82

◇高等学校教職10年経験者研修報告 理 科 藤 中 由 美 85

◎編集後記

研 修 部

平成24年度 地球温暖化防止活動環境大臣表彰受賞について

ユネスコスクール班担当教員
大 堤 直 人

この環境省主催の表彰に応募した理由はいくつかあるが、その理由の一つとして、「普段の活動がよく見てこない」と指摘されることもある本校ユネスコスクール班の取り組みについて、校内外の方々に広く知っていただきたいという気持ちがあった。応募の直接のきっかけは、秋田県地球温暖化防止活動推進センターから公募の案内を送っていただいたことである。ここ数年連携していた大仙市立大曲南中学校が前年度に受賞していたことも励みとなった。

今年度、同表彰の「環境教育・普及啓発部門」には全国から69件の応募があり、10のN P O法人や学校、個人が受賞した。表彰式が平成24年12月12日に東京で行われ、ユネスコスクール班を代表して進藤隆校長が長浜環境大臣（当時）から表彰状を授与された。

ユネスコスクール班は「ビジネス実践」の校内組織の一つであり、今年度は高校2・3年生20名、教員3名から構成されている。従来の国際理解教育の試みに加えて、平成22年度からは環境教育にかかる取り組みも行っており、今回はそのような取り組み、特に「小中学生・市民対象の講座実施と書籍の出版による啓発活動」

が評価された。

以下は、この表彰の申請用紙に記載した内容である。

1. 応募活動の要旨

本校ユネスコスクール班による環境教育にかかる普及啓発活動は平成22年4月から始まり、現在も継続して行われています。温暖化防止のための植物の活用や資源の再利用の試みとして様々な活動を行ってきましたが、最も特徴的なことは、秋田県の「環境の達人」地域派遣事業による環境講座などを受講した後、高校生自らが講師となって、小中学生や一般市民対象の温暖化問題にかかる講座やワークショップを継続的に実施していることです。

また、平成24年2月には、このような活動の内容をまとめた『高校生のための地球環境問題入門——子どもたちの未来のために』（アルテ刊）を出版しました。国連環境計画（U N E P）が発行した『第4次地球環境概況』の一部を翻訳し「地球環境問題の概要」として紹介しているほか、温暖化防止のための国連機構や環境保護活動家の取り組み、「地球憲章」、生徒の意見



表彰状の授与（KKRホテル東京）



小学生対象の環境講座（秋田県中央シルバーエリア）

などを収録しています。700部が市販され、多数の公立図書館に設置されており、温暖化防止のための波及効果の大きい啓発活動になっていると言えます。

2. 活動の概要

①目的

秋田商業高校ユネスコスクール班は、外部講師による講座や海外へのスタディツアードを通じて環境問題について学び、そのようにして学んだことを小中学生対象の環境講座や一般市民対象の活動報告会などを通して地域に還元し、こうした環境にかかわる啓発活動を通して、地球温暖化をはじめとする地球環境問題の解決に実際に寄与することを目的として活動しています。

この目的を達成するために、温暖化防止のための提言を盛り込んだ『高校生のための地球環境問題入門』を発行しました。これは「地球温暖化についての教育資料の開発」に該当するものだと思われます。ゴルバチョフ元ソ連大統領やアーヴィン・ラズロ氏らの意見を紹介しながら、小手先ではない抜本的な変革の必要性について説明し、そうした変革のために必要とされるもの、変革の担い手についても記述しています。

本校の活動はこのように、炭素排出量を実際に削減する装置等の開発といったハード面の取り組みというよりは、温暖化防止についての理解を促進し、人々を温暖化防止のための活動に駆り立てるようとするソフト面の取り組みである



中学生対象の国際理解・環境講座（本校）

と言えます。

②内容

環境教育を開始した平成22年度には、「総合的な学習の時間」での取り組みの一環として、校舎脇での緑のカーテンの作成、校庭へのヒマワリの植栽、全校生徒への家庭でのヒマワリ植栽の呼びかけ、黒板から出たチョークの粉や短くなつた使用済みチョークからチョークを再生させる取り組みなどを行いました。平成23年度からは、「総合的な学習の時間」の発表の場で、秋田杉の廃材から持ち歩き用の箸を作るコーナーや、ポリプロピレン製の結束バンドから鉛筆立てや籠を作るコーナーを設置し、来場者の環境意識を高める試みも行っています。この発表の場には毎年、数百名の来場者があります。また、箸を作るコーナーでは地域の専門家、結束バンドを活用するコーナーでは地域の企業の協力を得るなど、地域との連携も意識的に行ってています。



リサイクルチョークの製作

また、平成22年度以降、環境問題にかかわる秋田県内のNGOであるRASIC Aと連携し、環境講座の講師を派遣していただいております。また、同NGOが主催するネパールへのスタディツアードには、平成22年8月に2年生1人、平成24年1月に3年生3人、平成24年8月に3年生2人を参加させていただきました。夜間照明がない児童保護施設にソーラーランタンを届けたほか、現地の学生を対象とした環境ワークショップを実践したり、田舎の村の暮らしを体験して

開発による生活様式の変化や地球環境の変化等の情報を得たりすることができました。平成25年1月にも、同じN G O主催のネパール・スタディツアへの生徒派遣を予定しています。なお、このN G Oの代表者である菊地格夫氏は、秋田市地球温暖化防止活動推進センターの事務局次長（当時）でもあります。

このようにして温暖化をはじめとする環境問題について学んだ生徒たちは、これまで小中学生や市民を対象に多数の環境問題に関するワークショップや活動報告を行ってきました。2010年度には、40名ほどの中学生を対象とした出前講座を3回、2010年度には、中学生対象の講座だけでなく、小学生約15名とその保護者を対象とした環境講座「遊んで学べる地球温暖化問題」、外国人留学生約20名を対象とした「自分環境と世界の関係」と題するワークショップ、数十名の市民を対象とする活動報告なども行いました。今年度も、大仙市立大曲南中学校の3年生42名を対象とした環境ワークショップを7月に実施したほか、ネパールから帰国した生徒を中心に、エコロジーについて学んだことを地域に積極的に還元していく予定です。

平成24年2月には『高校生のための地球環境問題入門』を発行し、同年4月には、この本の紹介も兼ねたネパール・スタディツアに関するリーフレットを発行しました。このリーフレットは、地元N G Oと連携した本校の国際協力や環境問題に関する取り組みを広く知ってもらうのに役立っています。2000部を発行して、約800



中学生対象の環境ワークショップ（大曲南中学校）

名の全校生徒・職員に配布したほか、校外の様々な場所で配布しています。

3. 当該活動の実施期間

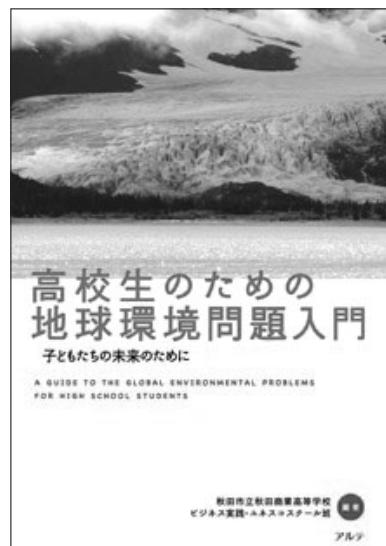
自 平成22年4月1日～
至 平成24年9月14日（通算期間；2年8月）

4. 活動の効果・社会への波及効果・活動の持続性

本校ユネスコスクール班は過去数年にわたって、温暖化防止のための活動のほか、アフリカに関する国際協力活動、東日本大震災にかかるボランティア活動などにも積極的に取り組み、書籍も『高校生のための地球環境問題入門』を含めて4冊発行してきたため、本校のこうした活動は、地元の新聞やJ I C A（独立行政法人国際協力機構）のジャーナル誌等に度々取り上げられ、秋田県内だけでなく全国的にも、国際協力や環境教育、E S D（持続可能な開発のための教育）の関係者にある程度知られています。

このように知名度が高まった契機は、書籍の発行でした。『高校生のための地球環境問題入門』は1000部印刷されましたが、そのうち300部が教育・報道関係者に贈呈され、700部がオンライン書店や全国のジュンク堂書店などで販売されています。この本の出版と流通により、本校の温暖化防止のための活動は、地域を超えて国内に知られることになり、地球環境問題やエネルギー問題の解決に向けた提言を全国に発信するようになりました。

なお、本校ユネスコスクール班は、国際理解教育を中心とし



た取り組みを平成19年度～21年度の3年間、環境教育を中心とした取り組みを平成22年度から2年余り行っています。

5. 活動の今後の計画

小中学生や一般市民対象の環境問題にかかわる講座やワークショップは、今後も継続的に実施していく予定です。ネパールで地球温暖化の影響を見聞してきた2人の生徒は、市民対象の数回の活動報告会で発表を行うほか、今年度中に温暖化防止のために小中学生を啓発するワークショップを複数回行うことを計画しています。

今年度の「総合的な学習の時間」の発表の場でも、ネパール・スタディツアーに関する活動報告や、温暖化に関するワークショップを実施するほか、昨年度に引き続き、秋田杉の廃材を活用した持ち運びできる箸作り、結束用のバンドを活用した籠作りの体験コーナーを設け、本校生徒や一般市民に資源の再利用について考えてもらうこととしています。

また、平成25年2月には、『ユネスコスクールによるESDの実践——教育の新たな可能性を探る』という本をアルテより発行する予定です。この本の中には、環境教育の専門家（日本環境教育学会の会長や国立教育政策研究所のESD担当者）を含む十数名の大学関係者による原稿を掲載することになっています。この本を読んだ各地の教員が環境教育やESDについての理解を深め、日本における環境教育あるいはESDの深化と発展につながることを期待して



秋田杉廃材を利用した箸作り体験コーナー

います。この本は、『高校生のための地球環境問題入門』と同様に1000部印刷され、300部が教育・報道関係者に贈呈、700部が市販されることになっています。

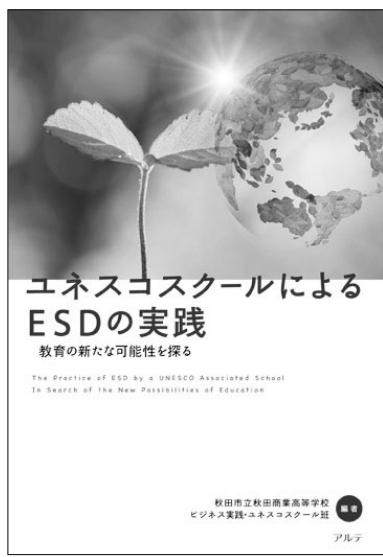
6. 本表彰の公募を知った媒体

秋田県地球温暖化防止活動推進センターからの紹介

付記

多くの企業で環境保護の取り組みが行われている今日、ユネスコスクール班の生徒たちが卒業後に入社してから、環境問題について学んだことを何らかの形で活かしてくれることを願っている。

なお、ユネスコスクール班は平成24年度、「経済活動から世界との関係を考える」をテーマとして、環境問題にかかわる取り組みのほか、「貿易ゲーム」などビジネスに



関係する様々な学習活動を展開したこと記しておきたい。

また、『ユネスコスクールによるESDの実践』の贈呈計画は、定価の引き上げ（1600円→2200円）に伴い、大幅に縮小された。5冊のESDシリーズの最終刊として2013年2月にアルテより刊行されたこの本の概要と目次・執筆者は以下の通りである。

『ユネスコスクールによるESDの実践』の概要

学校において今なぜ、ESD（持続発展教育）が必要なのか。環境教育、国際理解教育、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）、ユネスコスクール、ホリスティック教育、スピリチュア

リティなど、多様な観点からE S Dの魅力に迫るとともに、E S Dをとりかかりとして教育の新たな可能性を探る。

編者（ビジネス実践・ユネスコスクール班）について

総合的な学習の時間における校内組織の一つ。2007年に国際協力課として発足後、『高校生のための国際協力入門』（2008年）を編集、2009年以降はユネスコスクール班として、『高校生のための国際連合入門』（2009年）、『高校生のためのアフリカ理解入門』（2010年）、『高校生のための地球環境問題入門』（2012年）を編集した（いずれもアルテ刊）。

主としてユネスコスクール班の活動実績により、秋田商業高校は2011年に、N P O 法人日本持続発展教育（E S D）推進フォーラム主催第2回E S D大賞において高等学校賞を受賞している。

『ユネスコスクールによるE S Dの実践』の目次

第一章 E S Dとは何か

I 日本からのE S Dの提案

阿部 治

（立教大学社会学部教授／E S D研究所長）

II 国際理解教育と持続発展教育（E S D）

市瀬智紀

（宮城教育大学附属国際理解教育研究センター教授）

III 環境教育とE S D

佐藤真久（東京都市大学環境学部准教授）

第二章 ユネスコスクールによるE S Dの推進

I ユネスコの起源とその理念

岩間 浩（岩間教育文化科学研究所主宰）

II ユネスコにおけるE S Dの国際的取組と展望

佐藤真久（東京都市大学環境学部准教授）

III 民間ユネスコ活動とE S D

寺尾明人

（日本ユネスコ協会連盟事務局次長兼教育文化部長）

IV E S D推進のためのユネスコスクールの役割

米田伸次

（元帝塚山学院大学国際理解研究所所長）

第三章 学校におけるE S Dの実践

I E S Dの視点に立った学習指導

五島政一

（国立教育政策研究所総括研究官）

II 学校における持続可能な発展のための教育の推進

多田孝志（日白大学人間学部教授）

III 為せばなる

太田 直

（秋田商業高校ユネスコスクール班担当教員）

第四章 ホリスティック教育とE S D

I ホリスティック・アプローチとは何か

中川吉晴（同志社大学社会学部教授）

II E S Dにおけるホリスティックなアプローチの可能性

成田喜一郎

（東京学芸大学大学院教育学研究科教授）

III サステイナビリティと教育

吉田敦彦

（大阪府立大学大学院人間社会学研究科教授）

第五章 教育におけるスピリチュアリティ

I クリシュナムルティの教育思想

金田卓也（大妻女子大学家政学部教授）

II アリス・ベイリーが伝えた情報とその教育思想

神尾 学

（ホリスティック・リーディング研究所代表）

III スピリチュアリティとE S D

大堤直人

（秋田商業高校ユネスコスクール班担当教員）

ＥＳＤの実践を連携から考える ～商業教育と国際理解～

ユネスコスクール班担当教員
太田直

はじめに

「総合的な学習の時間」について年々多様な立場からの議論が重ねられる中、本校は独自の学習活動を確立してきた。現在では「AKISHOP」「キッズビジネスタウン」という本校を代表とする活動があり、あらゆる場面で生徒の活躍を目にすることができる。本ユネスコスクール班においてもこれまで7年間、多くの協力を得ながら現在に至り、活動基盤と名称の変更を繰り返しながら、今年度は「ESD（持続発展教育）」というテーマに取り組んだ。以下、2013年2月に本班が出版した『ユネスコスクールによるESDの実践』における一部文章に加筆・修正を加えてものを示す。

2009年2月にユネスコスクール¹に加盟してから4年目となる。これまで生徒と様々な活動をすることができた。本校では「総合的な学習の時間」での学習活動となり、これまで多くの生徒が関わりそして、現在も各地で思い思いの活動を繰り広げている。7年前、ふと思いついたことで始まった国際協力活動。単に自分の経験を生徒に話しあえることから始まった、いわば自己満足の授業であり、まさかこのようなことに発展するなど予想しなかった。「国際理解」という窓を通して様々な事を見、たくさんの人と出会い、刺激を受け、次なるステップへと繋げていく……こんな感覚だろうか。

本班の授業では1年ごとにテーマを変え、こ

れまで「地球環境問題」「アフリカ理解」「国連」などに取り組んできた。形は変わっても国際理解というスタンスは変えずに取り組んできた。今まで本校に関わって下さった方々には感謝の一念であり、それぞれのエピソードには語り尽くせないドラマがある。時には手を携えて喜び、時には熱い議論を交わし、私にとっては喜怒哀楽そのものである。近年は「ESD（持続発展教育）」という壮大なテーマに取り組んでいるが、基本的なスタンスは何ら変わっていない。本稿では「連携」をキーワードとして、私たちがこれまでに実践してきた学習活動の内容を紹介する。ユネスコスクールに加盟して日々努力を重ねられている方々や、これから何かを始めたいと考えられている方々へのヒントになればと思っている。

「ビジネス実践」という本校のかたち ～システム構築の重要性～

本校では総合的な学習の時間を「ビジネス実践」と呼ぶ。商業に関わる経済の仕組み、流通システムなどを肌で感じる学習活動である。生徒会を中心に組織化され、2・3年生は「班」に振り分けられる。秋田の食材を使用して惣菜を考案したり、お菓子を考案したり、県内の魅力を校外にアピールしたり、生徒らが社会の一員として、経済活動を学校で実践しようというのである。もちろん企業交渉も生徒らが行い、全体運営は生徒会が中心となって動くことになる。その組織の中に「ユネスコスクール班」と呼ばれる私たちの活動拠点がある。2・3年生の希望者が集められ学習活動がスタートするといった具合だ。そんな中、私たちユネスコスクー

1 ユネスコスクールは、1953年、ASPnet(Associated Schools Project Network)として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体。

ル班では、国際理解を土台として世界の諸問題に目を向けた学習活動を展開している。

対して、1年生は「ビジネス実践基礎講座」とした時間が割り当てられ、翌年から始まる「ビジネス実践」に備え1年間、経済活動に関する事柄を学びつつ、それぞれの思いを暖めることになる。このような取り組みは開始当時、秋田県内でも珍しい取り組みだった。今では他校でも似たような取り組みがされるようになり「〇〇高校オリジナル△△」という商品がテレビに紹介され、専門高校ならではの取り組みが目につくようになった。このような本校独特的組織があったからこそ、私たちもユネスコスクール班として思い通りの活動ができているのだ。

実際、特色ある学校づくりを目指す先生方からは「学校で取り組むにはなかなか難しい」「時間確保が難しい」などの声を聞く。こうした学校全体を巻き込んだ組織を作ることができれば、特色ある活動につながっていくのではないだろうか。組織作りやシステム構築は学校全體がスムーズに動き出すきっかけになる。そんな中、最大の難点となるのが教員の転勤だ。せっかくの活動が軌道に乗っても人事異動によって次年度からの活動が立ち往生してしまうことも少なくない。国際理解などの取り組みをされている先生方のほとんどは、自身の経験から、異国の地で感じたことを生徒らに還元したいという思いをモチベーションとして授業に臨み、また、どのような先生にも、少なからず「この今までいいのか」という危機感めいたものも同居している。自分が異国で感じたその思いを伝え、生徒にも視野を広げ自分を見つめてもらいたい、何かにチャレンジして欲しいなどの思いを持っている。やはり教師の「熱意」によるところが大きいと言える。このように教師の経験が諸活動に反映されるため、どうしても、その年度によって学習活動や活動基盤にムラが出るのは仕方ない。しかし、本校のような「ビジネス実践」というシステムを作ってしまえば、諸問題は解消され、たとえ担当の教師が転勤してもムラが

最小限に止められる。「商業高校は人づくり」と言われる一方で、「商業教育はシステムづくり」という観点も含まれそうだ。

「連携」を模索する

～「落とし所」を探る活動～

学校という組織の中で、本校では「ビジネス実践」というシステムがあり、その中で私たちは活動している。しかし、このような大きいシステムを構築するのも学校の理解がなければ実現が難しい。見方を変えれば「この厳しい時代にのんびり国際理解なんて…」という意見があつて然りだ。さらに「そんな暇があったら、進路実現のための学習を…」という教師間の意見もあるかもしれない。実際本校でもこうした壁にあたることがしばしばある。また、学校によって置かれている立場や役割もそれぞれだ。「今さら大きな学校変革をするには…」というのが大方の考えだろう。このように、大きなシステムを作ることが困難であれば、誰かの助けを借りる「連携」も方法のひとつである。これも、ひとつの活動を持続させるための「システム」といっていい。大きなシステムと違い、動きやすいのが利点であり、融通が利くのも連携の良さだ。連携は、双方の思いが一致すれば実現可能である。互いに補完できる分野を模索していくば連携は可能だ。そして「落とし所を探る」という視点も連携には必要な要素である。落とし所を探っていきながら話し合いを進めていくと「こんなこともできる」「あんなこともできる」というアイディアも出てくる。違った立場の意見も聞きながら精査していくと、ひとつの形が自然と見えていくものだ。このような話し合いの場に生徒を参加させるのもいい方法だろう。柔軟な生徒の発想と大人の考えを組み合わせることで連携は形作られる。もともと学校は意外に狭い世界でできている。その環境を打破する役割も連携の強みだ。以下本校がこれまで実践してきた連携の具体的なかたちを示していただきたい。

連携①

JICA東北との連携

～裾野を広げる「出会い」～

2007年4月から2010年3月までの3年間、本校ユネスコスクール班は「JICA（国際協力機構）東北支部との連携」による授業を実施した。JICA東北との連携は魅力だった。国際協力の現場を仕事としている人間の集まりだからだ。きっと、私たちの想像を超える世界があるだろうと、大きな期待を寄せた。結果、期待以上の3年間であり、本班が最も成長した時期だと言える。この連携を支えてくれたのは、理解を示してくれた当時のJICA東北支部長はじめ、関係してくださった方々である。言い尽くせない感謝の極みである。そして、私たちの原動力になってくれた「JICAデスク」の存在が大きい。

「JICAデスク」はJICAの抱える国内拠点が管轄する都道府県に設置されている。このJICAデスクに相談してみるのもいい。きっと親身になってアドバイスをしてくれるはずだ。私たち教師にはない視点を持っている方々に触れるることは極めて重要である。年齢は重ねていくのに、関わっていく児童生徒の年齢が変わらないのが職種の特性とも言える。ともすれば、固定観念の中で生徒と関わることになってしまうのではないか。誰かに「教わる」姿勢も教師には必要だと感じている。

JICAデスクは、国内で実施しているプログラムやイベントの情報提供の他、出前授業の



JICA国際協力出前講座の様子

実施など、可能な限りの手助けをしてくれる。

JICA東北という大きな組織と連携をし、私たちの成長を加速させた要因は、裾野を広げる「出会い」だ。この連携を通じて関わった多くの関係者のほとんどが青年海外協力隊（JOCV）として現地での活動経験がある方々である。彼らがどのような動機で国際協力活動をしてきたかは別にして、共通しているのは人間力の高さである。驚嘆しきりの強いエネルギーの持ち主ばかりである。

日本の生活がベースにある私たちに対し、非日常である異国の生活をしてきたのだからエネルギーであることは言うまでもない。このような人間力は海外に渡航経験が多い少ないという程度問題ではなく、たとえ海外旅行に多く出かけたとしても、やはり「旅人」である。旅人には限界があり、その国の姿を見ることは結局のところ困難だ。なぜならば、どちらかというと意識は自分本位であり、どこに行くにしても自分が中心になる訳だから、例外があるにせよ、比較的能動的要素が高い。つまり、基本的には旅を楽しみたいと思うのが本音である。そういう意味において私は、旅人がその国本来の姿に接するというのは難しいと考えている。

しかし、彼らは「住人」としてその国に定住し、現地の人間と膝を突き合わせた生活をし、喜びを分かち合い、時には持ち合っている文化の相違が原因となる衝突があったに違いない。そうした中で培った「住人」としての生活スキルなるものは私たちとは違う感覚を持っている。現地の良し悪しを知っている彼らの声は、途上国の現実をその人なりに伝えてくれる。住人となることで初めて協力する気持ちを持てるのかもしれない。旅人は魅力を伝え、住人は現実を伝えるとも言える。私自身、このような感覚になれたのもたくさんの「出会い」からだということを付け加えておきたい。本校で実施しているスタディツアーや現地を訪れる生徒らも、きっと帰国後、旅人としての感覚を持ちつつ「住人」への憧れも同時に抱いていることだろ

う。

このように「出会い」が強烈な人間力によって拍車がかかり、次から次へとやってくる。これが、裾野を広げる出会いの源だ。JICAの主催する各種プログラムに参加してみると、国際協力・国際理解というテーマに興味関心ある先生方は実に多い。こうした強大な引力に引き付けられた教師間の出会いと同時に、JICAに携わる方々とも交流が生まれる。このような場に参加することは、もはや教師個人が持つ人的財産の域を超えていく。スケールの大きなJICA東北支部との連携がその後、本校が高等学校として主催する全国初のアフリカ大陸へのスタディツア（ウガンダ共和国・2010年1月実施）へつながっていく。

連携②

小中学校との連携

～「教える」「教わる」の関係～

連携を模索していく上で、学校種間での連携も策の一つである。しかし、学校行事など、互いの都合が前提で、早い時期での日程調整が必要になる。特に校種が違うということは、抱える学校事情も違うため実際は難しいことの方が多い。実施できたとしても年に数回の交流が実情だ。したがって、融通の利く連携とは言えないが、校種を越えた活動だからこそ得られる魅力がある。本校では生徒が小中学生に対し授業を行うが、連携する学校が複数校あれば、生徒に体験させられる授業時数の確保は可能である。こうした難しい連携であっても高校生が実際に児童生徒に教えることは私たちが考えているより良い刺激になっているようだ。

教えるといつても単なる交流会になっては互いのためにはならない。こちら側は国際理解や国際協力、地球環境問題など普段授業で実施している内容に关心を持ってもらえるよう努める。児童生徒にとっても高校生に教わるという体験は記憶に残るだろう。教師側から「しっかりと聞いてもらえるかどうかが教える側の評価基準だ」



出前授業では予想外の展開になることも

などと生徒にあらかじめ伝えておくと「よしやってやる！」という気持ちになり意欲的に取り組むかもしれない。教える内容は、授業で実施していることを小中学生用にアレンジしていくことになるが、分かりやすく伝えるために厚紙に書いたり、表現を変えたり工夫を凝らしていく。中学生になるとより真剣に考えさせる内容にし、必要なときは教師の視点を加えるなど、生徒とともに教材をつくっていくことになる。1回目よりは2回目、2回目よりは3回目、と同じ内容であれば上達がよく分かる。「教える」という行為が本人にとって一番身につく学習であることを実感していくのだ。

実践する授業内容はワークショップ形式のものが特によい。開発教育におけるテキストも多数あり、参考にするのも方法の一つだ。ワークショップ形式の授業形態は、核となる授業者（ファシリテーター）を中心に、他の生徒も授業に関わっていけるのが利点である。明るく活発でリーダーシップのある生徒が授業者に選ばれるのが現実だが、ワークショップでは複数のグループで学習することが多いため、サポートする人間の役割が大きい。また、授業内容をあらかじめ把握しておかなければ円滑な授業ができないため、サポーターの役割はそのグループの成否を握っていると言ってもいい。さらに授業全体の進行を妨げないよう各者連携を意識しなければならない。見ている私たちをハラハラさせることもあるが、たいていの場合は安穏たる心境で授業を享受している感覺だ。「この生

徒にこんな一面があったとは」と思うこともしばしば。その生徒の意外性に気付くと同時に、成長を感じる瞬間もある。思い切って生徒に任せることが重要だと考えている。

ワークショップ形式を選択する理由は、次への意欲というべき、授業に挑戦するエンジンのかかりが極めて早いからである。1回目の授業が終わると訪問先からの帰路、こういう言葉が飛びぶ。

「もう一回授業がしたい」

「次はこうしたい」

こうした言葉は次なるステップであり、アレンジ力構築のチャンスだ。連携を進めるにあたって最低2回以上の授業を予定したい。小中学生にもいい刺激になり、高校生が目標となればいい効果が生まれる。また、ワークショップは授業者（ファシリテーター）の力とサポーターの協力で成り立っているので、一度に多くの生徒が授業実践に関わることができる。このように、同じ内容でも、違う内容でも、数回実施していくことで自分たちの「ネタ」となり、たとえ実施する学校が変わっても「教える」ことに余計な抵抗を感じなくなるだけでなく、自信を持てるようになる。「ネタ」という言葉は響きが悪いが、ネタ力の構築はアレンジ力に通ずる。その学校独自の「ネタ」は大きな強みとなる。

本班では、実際の授業も生徒が実施する（もちろん多くの場合は教員だが）。あらかじめ内容はだいたい伝え、テーマに沿って授業を実践してもらう。校外での活動をしている生徒にとっては、それほど難しくは考えていないようだが、今後は、授業を担当するグループに新たなメンバーを投入し、全校生徒への発表の場を設けるなどのハードルを少しずつ高めていきたいと思っている。

生徒等が「教える」立場を多少なりとも経験することで「教わる意識」に変化をもたらしてくれることに期待を寄せる一方「教える」責任感も持ち合わせなければならないことを指導している。このような活動も互いを惹きつける何

かになるかも知れない。そのような所に可能性を感じているのだが……。

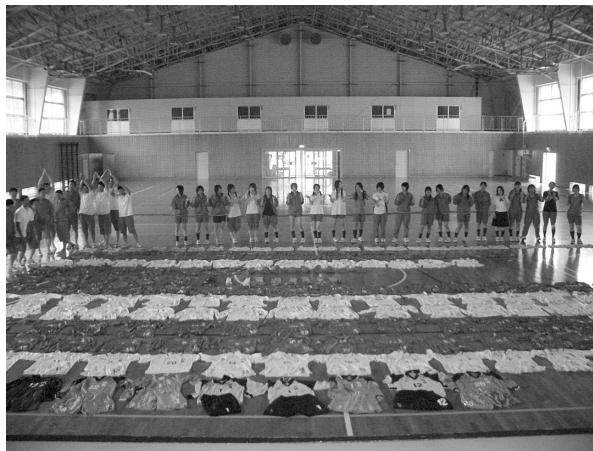
連携③

大学生との連携

～イベントに参加して気づかされたこと～

国際理解という枠組みがE S D（持続発展教育）のすべてを網羅する万能薬だとは思っていない。偶然にも本校では、たくさんの協力のもとで国際理解を通じて一定の活動が持続できている。戦略的に活動し、前途の見通しを立てるという余裕はあるでない。どちらかと言えば「次は何をしようか」という問い合わせの中から今までの活動が生まれてきた。結構のんびりしている部分もあり、いつもどこかで「何とかなるさ」という楽観的な部分があるのも事実だ。ある程度の方向は決めつつ、ある程度の余裕と許容は必要だと考えている。

2007年5月、秋田市内の大学を中心とした学生で組織される国際協力団体が秋田とアフリカをつなげることを目的とした「A・Aフェスタ（あきた・アフリカフェスタ）」を同7月に実施することを知り、その中の企画として、青年海外協力隊でアフリカ・マラウイ共和国で理数科教師として当時活動していた県出身者の任地へスポーツ用具を提供するというものがあった。早速参加を決めた生徒らは校内から募集活動を実施する。運動部の活動が盛んな本校においてのべ400点を超えるスポーツ用品の提供ができた。ちょっとしたきっかけだったが、このことを通して大学生との連携が生まれた。本校に来校してもらい、授業のアシスタントをし、学生団体の活動を生徒らにアナウンスする場を設けるなど、高校生と学生との接点が見出されていった。このような大学生が主体となるプログラムやイベントでは、勉強会も定期的に開催されており、生徒が参加する機会を多く得た。学生との国際協力を通じた交流は、生徒には大きな刺激だったに違いない。このような点は、小中学校との連携活動には求められない大学生特有の



運動部の協力により集まった物品

活気を肌で感じる良い機会になる。

高校生と大学生の大きな違いは「行動力」だ。これに尽きる。こうした行動力の上に高校生がうまく乗ることができれば、互いによい刺激になる。このイベントは形を変えながら、現在も夏の秋田で開かれる国際協力の催しとなっている。

「A・Aフェスタ」が終了して数ヵ月後、本校にマラウイ共和国から大量の写真データとお礼の映像などが届いた。そこに写っているのは本校サッカーチームのユニホームを着たマラウイの学生たちだった。写真を見るや「お～」という歓声があがる。見慣れたユニホームを身にまとう学生は皆、肌の違う異国の若者なのだ。自分たちが想像してもしきれない、言葉でしか聞いたことがない世界を身近に感じた瞬間だった。ユニホームを1枚1枚たたみ、履き古したシューズは洗い直し、少し空気の抜けたボールは箱に収まる程度まで小さくし、自分の思いを乗せた物品たちは今異國の地で大活躍している。生徒たちの思いが現地に届き、憧れを強く持ったに違いない。褐色の大地を縦横無尽に駆けるユニホームの胸には「秋商」の文字がはっきりと映っていた。この経験以降、学習のテーマが「アフリカ理解」へと変わり国際協力というものが具体化することになった。

この反響は大きいものだった。何よりも、物品を提供してくれた部活動の生徒たちからの反響が大きかった。自分が使用していたものが、

思いもよらない、しかもアフリカにある名前も聞いたことがない「マラウイ」という国で役立っているからだ。廊下に張り出した写真の前で足を止め、指をさし、つぶやいていく生徒もいる。本校の教員たちも見てくれた。私たちにとってこの上ない喜びだった。大学生との連携はこの後も続き、本校がユネスコスクールに加盟するまでの間、多くの時間を大学生らと共にした。時には生徒の悩みを受けとめ、自分の体験をもとに相談にのる大学生の姿を見ると、たのもしい限りだった。

さらにこの数ヶ月後、本校にマラウイからの帰国隊員が物品提供のお礼として来校し、現地の活動内容を聞くことになった。現地へのドネーション（寄付行為）が「果たして本来の自立支援になるかどうかは今も疑問が残る」とのことだった。ドネーションへの期待感が現地の人間の自立心を妨げているのならば、ドネーションという協力は、意味をなさないのではないか、という意味であろう。諸手をあげて喜んでいた私たちにとって、深く考えるきっかけになった。果たして協力とは何を意味するのか。私たちが目指すべきところはどこか。

ここまでいくつかの「連携」例を示してきた。お互いの補完材料があればどのような形態であれ連携は成功するはずだ。「生徒のため」と肩に力を入れるより「自分も楽しめたらしい」という楽観的な気持ちで捉えた方が道は開けてくるのではなかろうか。教師自身が「楽しむ」姿勢の方が生徒には伝わりやすい。本班は現在



ユニホームの胸に光る「秋商」の文字

「N G O連携」として、今までの「出会い」から秋田市内のN G Oとの連携授業を実施している。今年で2年目となり、実際に現地へ赴き、年に2回ネパール共和国で国際協力活動をしている。N G Oとの連携により、今まで現地に赴き「感じる」というスタディツアーガ、決まった場所で「国際協力を実践する」方向に変わった。高校生らしい視点で現地と向き合うことで活動領域が広がったと言える。今後継続的に実施し、草の根的活動に成長することを願っている。

連携にあたって考えていること

①「年間計画は方向性だけにとどめ最小限にする」

教員にとって年間計画は必須である。本校が実践しているのは「ビジネス実践」と称する本校独自のシステムに則った学習活動で総合的な学習の時間を活用して実施していることはすでに述べた。授業である以上、年間授業計画は必要だが、この年間計画を最小限にとどめたい。年間計画を立てれば、連携にあたり互いの役割が明確になり、円滑に学習活動が行える。しかし、連携の良さは他者の介入である。連携先の得意分野を最大限活かすためにはある程度の主導権を渡してもいいと思っている。肩肘の張ったスタンスはどうしても「何がなんでも」という力感があり、生徒にとっては窮屈に思えてしまうのではないかと思っている。これまで述べてきた通り「自分も楽しむ」という心の余裕は必要である。また、主導権をこちら側で握ってしまうことは変化があまりないとも言える。一定の予測の元で展開される授業というよりは、総合的に学習を進めるにあたりフットワークの良いスタンスという感覚だ。連携を最大限活かしていく方法だと思う。総合的な学習の時間が持つ本来の目的も、生徒が問題意識を持ち、解決の方向に向かっていく姿勢が求められているのだから多少の変化はむしろあったほうが「生きる力」の醸成へつながるのではないか。

②「青写真を描く」

これはある程度の着地点を決める事だ。しかもできるだけ「できないだろうと思われていること」がいい。一見、一点目に矛盾しているようだが、自分自身の立ち位置を決めるものなので心の拠り所のような感覚だ。「こうできたならいいな」というモチベーションを高める気持ちで、ある意味一番楽しい作業である。漠然として、とりとめもない事だが、考えているときはしっかり連携先を見据えているはずだ。これは、「思い」をしっかりと持つことに繋がる。この青写真が大きなものほどスケールが大きな活動になるに違いない。年間計画を最小限にとどめるとしたのも、自由な発想を排除してしまう恐れがあるからで、しっかりとした計画の中では、どうしても意識が「思い」と直結しにくいように思われる。ちなみに私の「青写真」は「生徒とアフリカ大陸に行く」だった。運良くその思いは多くの方々の協力のもと実現するのだが、実のところ私は同行（引率）していない。「何がなんでも」という気持ちではなかったため元々執着心がないのだ。そういうスタディツアーも次なるステップが待っていた。それは「伝えていく」ということだ。経験を言葉にして、多くの方々に伝える作業である。そのような伝える機会をいただきつつ、また新たな「出会い」が待っている。現在もスタディツアーやを実施しているが、この経験を伝えていくということも大切な役割である。このことを定着させることが現在の目標である。



毎年全員で巨大モザイク画制作に取り組む

実感すること

(アフリカスタディツアーウガンダ共和国 -2010年1月実施)

今まで多くの方々との「出会い」により本校ユネスコスクール班は支えられてきた。本校が初めて行ったスタディツアーオンに触れておきたい。JICA東北支部との連携時に実施した事業でJICA東北の協力のもと実施した。2010年1月出発で、3年生2名、2年生2名、引率教員2名、随行員JICA秋田デスク、大学生1名の計8名での実施だった。私は個人的に、参加する生徒に渡航前、渡航後に「ウガンダへの想い」と題して作文をさせた。作文としては少々パブリックな要素が欠けていたが、本音を正直な気持ちで、同行できなかった悔めな私に伝えたいのだろうと文章に向き合った。言うまでもなく、渡航後の作文はどの生徒も心に響く内容だった。漠然とした思いが、具体的な経験を通してそれぞれの「想い」へと変わっていく様は読んでいてどれも伝わるものだった。異国での体験は生徒に変化をもたらす。私は、それが「実感」を伴う体験だからだと推察しているが、よく耳にする「意識を高く持つ」という意味は、体験に裏打ちされたものであり、「実感」は「意識」のライン設定を明確にするものだ。

こうした「実感」から生ずる「想い」を表現した3年生の作文を紹介する。

「ウガンダへの想い」

ウガンダに行って思ったことが沢山あります。何から書けばいいか良く分かりません。思いついたことズバズバ書いていきます。拙い文となります。頑張って読んでください。

私がまだ進路が決まってない時、担任の先生に「進路とスタディツアードっちが大事なの」と叱られました。私は珍しく本音と建て前っていうやつを使い分け、即答。「はい、進路です」。心の中はもちろんスタディツアーデいっぱいでした。心配してくださる先生がいるのに、本当に自分は嫌な奴だと思います

が、やっぱりどれぐらい早く進路を決めるよりスタディツアーオンでの経験は自分にとって重要だったと思います。何がどんな風に影響を与えたのか、

まだ良く分かりません。でもとりあえず、私の背中にそれは表れている気がします。結構猫背気味だったのですが、今はピンと背筋が伸びます。何を意味の分からぬことを……と思うかもしれません、確かに私はそう感じるのです。クラスの友達にも言われますし。とにかく私は、得体の知れないヤル気に満ちています。



お互いの国をイメージした絵の交換

その要因の一つは多分、ウガンダは、自分が幼い頃夢見ていた世界だったからです。ウガンダに行くと皆、手を振ってくれたり、気軽に握手したり、彼らの笑顔は人を疑うことを知らないようなキラキラの笑顔でした。日本にはなかなか少ないように思います。ウガンダでも携帯電話やパソコンが普及し始めていますが、人との濃い関係というか、直接的な関係というのは衰えていないと思います。日本はそういう面で寂しいです。私は小学生の時からそういうことを感じていて「みんなもっと仲良くなれたらいいのに」と漠然と考えていました。ウガンダで過ごしている時、そんな自分の小学校時代を思い出して、日本よりは不便だけど理想の社会がこんなところにあったのかと感動しました。この理想を忘れていたのはあきらめていたからだと思います。

でもウガンダでそれを見つけて、あきらめるのはまだ早い！勇気がでたんだと思います。

あともう二つ。一つは、エイズだとか貧困だとか負のイメージばかりのアフリカの一つの国であるウガンダに行ってみて。絶対、日本と比べたら不便な生活だけど、笑ってる！みんな楽しそうに生きてる。下手したら便利な生活してる日本より幸せそうに生きてるんじゃないか！って思うぐらい素敵な笑顔でした。二つ目は、良い仲間ができたことについて。グッチと館ちゃんとミツコ（本校生徒）。ミツコとは気が付けば2年間も同じクラスなのに全く関わりもなく、2年生なんて仲良くできるか想像もつかなくて手探り状態だったけど、いつの間にかこんなに仲良くなつて、兄弟みたいだなあって思う程です。多分、このメンバーとは卒業してからも集まつたりして長く関わっていくと思います。またこの4人でアフリカとか行けたらすごいなあ。

以前から抱いていた思いが、成長するにつれ薄れていき、現実に直面していくたびに思いは別のかたちになって自分自身に迫る。いつしか「現実に生きる」ことが社会から執拗に迫られることになる。しかし、途上国の現状を目の当たりにしたこの生徒は自分が考えていた理想を「あきらめていた」ことによる喪失だと気が付き、改めて自分の将来を見据える原動力になった。この「実感」が現在の活力に繋げていったのだ。

スタディツアー後、この生徒は「ウガンダのようにみんなが笑顔になって来店できるカフェを作りたい」と調理師になるために進学をする。現在秋田市内で調理師として活躍中である。

スタディツアーは無事に終わり、彼らの卒業後、3年生となった当時2年生だった2名は、ユネスコスクール班の一員としてクラスを引っ張った。あるイベントに参加するための準備をしていたときのこと。スタディツアーの話題となりこの作文を見せた。すると溢れんばかりの

涙を溜めながら作文を見つめ、遂にはボロボロと涙をこぼして泣いてしまった。

スタディツアーに参加した生徒は一様に何かを感じて帰国する。このモチベーションは、数ヶ月続く。語学や大学生主催の勉強会に参加するなど行動が明らかに活発になる。しかし、数ヶ月後、燃えさかった炎が急に消沈してしまうのだ（もちろん、そうではない生徒もいる）。このモチベーションを持続発展させることも現在の課題であり、スタディツアーをご褒美やお祭りのような感覚で捉えさせたくない。

「落とし所に迫る観点」を持つ

～商業教育と国際理解との接点～

私たちユネスコスクール班の教員はしばしばこんな質問をされる。「商業教育と国際理解とどんな関係があるのですか」。ある教育研究発表会の質疑応答でも同様の質問があった。確かに言われる通りである。ここで接点を模索していくのも教員の役割だ。あらゆる所に顕在、潜在する問題をどのように現状と結び付けていくかという課題は、私たちが常に意識して取り組まなければならないものである。連携同様「落とし所を探る」努力を惜しんではいけない。私はこの接点を「見え隠れする世界の現状」と「私たちの環境と生活観」とをつなぎ合わせていくことだと考えている。

戦後、高度経済成長という波に乗った日本は近代化の道を進んだ。換言すれば「効率化」の道をひた走ってきたことである。効率性を生むことにより、物は大量にしかも安価に提供され、一方では効率化を図ることで「便利」を追求する社会へと変化してきた。このような時代の流れにおいて、今後更に加速し、やがては現在私たちがしていることでさえも不便に感じてしまう世の中がやってくるのではないかと思ってしまう。実際、私たちが幼少時代に空想していた便利機器が現実のものとなり、何の疑いもなく向き合っていることを考えると、やがて近い将来、私たちの空想に耐えられない便利機器が登

場する可能性が高い。

便利であればその分、今までの進歩の証となり、効率性を高め能率を上げるのは確かにいいことだ。しかし、そのような時代の流れに対する身の処し方（どのように向き合っていくか）を考えていくことも重要ではないかという問題提起である。教育の現場にいる私たちにとって、ともすれば「便利」であることが「当たり前」になる前に、不便であった以前を振り返ることや、無駄であることに対しても有意味に変えられるかも知れないという熱意を持って生徒と向き合うことも大切なではないか。ある書籍で、ワインの製法が変革されていく中「古いことが最も新しい」とあるワイン農家が述べていた。急速に変化していく時代の流れに疑問を感じての一言だったのであろう。ふと立ち止まって考える時代に突入したとも考えられる。進み行く時代の影には、複雑化した社会が隠れていると同時に柔軟な思考も必要とされている。商業教育との接点はこのような、現代における私たちの環境と生活観との間にあると考えている。

科学技術の発展は国境を越え、大量生産社会を加速させている。国と国との関係の上に成り立っている今日の日本経済は自国だけで自立するのが難しい状態になってしまった。善し悪しの観点ではなく、生活の基盤となる「衣食住」のどれにも多くの国が関わっている。秋田では商店街という懐かしい響きは過去のものとなり、週末になると大型ショッピングセンターに人は押し寄せる。同じものを求め行列を作る光景は、私たちから「らしさ」を奪い、「つながり」と称した「相づち」を共有する。「つぶやき」は世界各地に広がり、アクセスの多さを競う「記録の世界」に私たちは身を投じている。街に乱立する建物はどれも「画一的」でどこを歩いても常に同じ風景だ。

とあるスーパーでの出来事。1人で買い物に来た4才ぐらいの女の子。もじもじしている様子を見るときっと初めての買い物かも知れない。小さな手よりも大きなお菓子は「ドキドキ」と

いう言葉がよく似合う。反対の手に100円玉をぎゅっと握ってレジに並んでいた。私は彼女の後ろに並び、彼女が放つその緊張感を楽しみながら、無事に買い物が終わるか心配になりつつ見守っていた。彼女の番になり、上目遣いで店員を見る。すると店員は、開口一番、

「お買い物袋はお持ちでしょうか？」

呆気にとられる女の子は、マニュアル通りの対応を振り切りお菓子を差し出す。その後何事もなく会計は終了。女の子の手にはお菓子の入ったレジ袋がしっかりと握られていた。

こんな世界は日常ではないかも知れないが、一昔前の商店街だったら「〇〇円だけど、いくら持っているの？ 買い物なんて偉いね」という会話がされていたはずである。つながりの薄い社会は、その街「らしさ」を奪い「画一的」で「大量生産」された物たちで溢れる日常となってしまったのかもしれない。毎年スタディツアーニーに参加する生徒は帰国後、人との近い距離感をもって開発途上国の印象を語ってくれる。現地の環境や生活観は私たちにないものを鮮明にしてくれているようだ。

商業教育という日常生活と密接に関わっていく指導をしていく私たちは、世界との関わり方を意識して生徒に向き合う必要がある。「利益、損失」「高い、安い」という物差しで測るだけでなく、その裏に隠されている現実や生活観を意識することが、商業教育の根幹である「人づくり」の原点に依拠することではないだろうか。大きな利益を上げる会社の掲げる理念や形態を尊重するだけではなく、利益をあげる背景にはしわ寄せがあるかも知れない、富に笑う影には貧しさに泣く現状があるかも知れない、という見えない現実の追求も大切ではないか。このことは、世の中に潜在する事柄を「今の私たち」に繋げていく作業であり「落とし所」を探っていく発想になる。複雑化する社会と向き合うことは、あらゆる可能性を見出し、現状と重ね合わせて「今の自分」に焦点を合わせていく。世界を切り取って、そこから見え隠れする現状を、

私たちの環境や生活観につなぎ合わせていく。そこに商業教育と国際理解の接点を見出したいのだ。

足元を見つめなおす

本班がこれまで最も大切にしてきたのは「足元を見つめなおす」という観点だ。国際理解を進めていくことは、他者との関わりを模索していくことだ。しかし、私たちは私たちの文化があり、基本的理念も同時に存在する。自分たちの考えを他者に押し付けるのではなく、寄り添っていくような立ち位置である。科学技術の発展により多くの国との関係を持つことが日常となった今、国境を越えた付き合いが必要になっていることは周知の事実である。とりわけ高校生を含めた子どもたちが今後、このような感覚を強く意識し生活していかなければならない。しかし、世界に多くの国がある中で、一部の国や地域だけを切り取って「自分たちには何ができるのか」という付き合い方には疑問を感じている。例えば、人間の生き死についても私たち日本人が考えているより開発途上国と呼ばれる国々の人間がもつ死生観の方がはるかにシビアである。そのような現実を通して「自分たちには何ができるのか」よりも「自分は今何をすべきか」という自分に対する極めて厳しい見方をしていくことが重要だと考えている。とりわけ、高校生にとって自分の将来がすぐそこに迫っている。まだ見ぬ自分の将来像をどのように見出していくかに期待している。「足元を見つめなおす」という観点は「自分の今いるその周辺を大切にしよう」という見方である。人それぞれ自分周辺という環境を持ち、自分周辺にどのような関わりがあり、どう向き合っていくかは人それぞれだ。

形に残る支援は結果として見栄えのいいものだが、私たち教育に携わる人間は、生徒らの数年後、数十年後を見据えた関わり方をしていくのが本来の在り方であり、理想である。「現実はそんなに甘くない」とのご指摘は甘んじて受

けるが、人とのつながりを意識した職業である教師が、一人の人生を左右する存在になり得るもの、万が一にもうねぼれぬことのないよう、生徒と接していきたい。

「そうよう蒼蠅きび、驥尾付して千里を致す」

生徒らが、千里をも行く名馬の如く、自分自身と将来を見据え、私は蠅はえのようについて行くぐらいがちょうどいい。

ユネスコスクール班これまでの歩み

年度	名 称	活 動 内 容	主な出来事
H18	国際交流課	<ul style="list-style-type: none"> ・移民の歴史についての学習 ・ブラジル-セルジッペ州日伯文化協会を通じて文通交流を試みる 	<ul style="list-style-type: none"> ・山田耕平氏来校・講演
H19	地域貢献部 国際協力課	<p>【JICA東北連携1年目】</p> <p>テーマ：世界の現状と国際協力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・JICA東北実体験プログラム参加（仙台市） ・あきた-アフリカフェスタ参加（校内の運動部の協力のもと運動用具を回収しマラウイ共和国に送付） ・アフリカ学習会参加・発表 <p>【内容】「貧困と教育の因果関係」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・石田ゆうすけ氏（作家）来校 ・講演
H20	地域貢献部 国際協力課	<p>【JICA東北連携2年目】</p> <p>テーマ：世界の現状と国際協力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ学習会参加・発表 <p>【内容】「サハラ以南のHIV/AIDS問題」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきた-アフリカフェスタ参加 ・AICO5周年記念イベント参加・発表 <p>【内容】「アフリカ理解を通して」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第19回馬場賞受賞 ・ユネスコスクールに加盟 ・本課の活動全体を「A-style」と命名 ・書籍『高校生のための国際協力入門』出版
H21	ユネスコスクール班	<p>【JICA東北連携3年目】</p> <p>テーマ：国際連合について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生による出前授業（秋田市立港北小） ・日本リジョンユースフォーラム参加（福島県8月） ・国際フェスティバルin大仙参加 ・JICA東北実体験プログラム参加 ・高校生国際協力「冬の集い」参加・発表（札幌市3月） 	<ul style="list-style-type: none"> ・高橋智史氏（フォトジャーナリスト）来校・講演 ・グローバル教育コンクール2009優秀賞受賞 ・第11回拓殖大学国際協力・国際理解賞コンクール優秀賞受賞 ・A-styleアフリカ・スタディツアーアー実施（生徒4名） ・JICA専門家によるヒアリング調査 ・書籍『高校生のための国際連合入門』出版

H22	ユネスコスクール班	<p>【N G O連携1年目】</p> <p>テーマ：アフリカ理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気候チャンピオン」プロジェクト採択 <p>※地球環境問題に関する特定の学習に取り組む</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際フェスティバル in 大仙参加 ・高校生による出前授業（大仙市立大曲南中学校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールスタディツアー実施（生徒1名） ・グローバル教育コンクール2010佳作 ・第12回拓殖大学国際協力・国際理解賞コンクール佳作 ・ユネスコスクール研修会参加・発表 ・書籍『高校生のためのアフリカ理解入門』出版
H23	ユネスコスクール班	<p>【N G O連携2年目】</p> <p>テーマ：地球環境問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A-style災害派遣プログラム実施 <p>※本校生徒による被災地支援活動（5月～10月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生による出前授業（大仙市立大曲南中学校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールスタディツアー実施（生徒3名） ・第2回E S D大賞 高等学校賞受賞 ・書籍『高校生のための地球環境問題入門』出版
H24	ユネスコスクール班	<p>【N G O連携3年目】</p> <p>テーマ：経済活動と国際理解～グローバルビジネスを模索する～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校生による出前授業（大仙市立大曲南中学校） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネパールスタディツアー実施（生徒4名） ・地球温暖化防止活動環境大臣表彰受賞 ・書籍『ユネスコスクールによるE S Dの実践』出版

発想力を養うプログラミング教育について

秋田市立秋田商業高等学校

教諭 小西一幸

1. はじめに

近年スマートフォンやタブレット端末の普及により、「アプリ」として高校生がプログラムに触れる機会が増えてきています。中には自ら進んでアプリ開発をする生徒もいる中、本校のプログラミング学習は資格取得に向けた「問題を解くための学習」に多くの時間を費やしているのが現状です。資格取得の意義は大きいもののプログラムを作る実習を通して、様々な問題解決のために思考することの大切さを教えることはできないものなのかと考え、5ヶ年計画を立てました。私が取り組んでいる内容は、決して珍しい取り組みではなく、すでに実践されている先生方もたくさんいると思います。ただ、商業科のプログラミングとして、そして生徒が学ぶべきプログラミングとは何かを模索し、決して特別な科目ではなく、現時点では商業科唯一の「ものづくり」の科目であることを証明するべく取り組んでいる内容でもあります。

2. 本校の現状

1年生は全員共通の科目を学習し、2年次より会計、流通経済、情報の3コースのうち一つのコースを選択し、3年次も継続して学習することとなります。情報に関する科目は、「情報処理」「ビジネス情報」「情報処理応用」「プログラミング」「文書デザイン」「パソコン応用」です。「プログラミング」は情報コースの選択科目として設定されており、選択者は毎年10名前後です。選択者の多くは本校コンピュータ部に所属しており、授業と部活動を連動させて情報処理技術者試験（ITパスポート・基本情報技術者）に挑戦しています。

平成23年度までは、2年生でCOBOL言語にて学習を進め、3年生でC言語やJavaへと発展させています。

私は、平成21年度からプログラミングの担当者として授業を進めていましたが、COBOL言語を取り扱っていることが果たして適切なのだろうかという疑問がありました。決してCOBOL言語が全く適さないということではなく、実際はプログラミングの授業で扱う言語は何でもよい。しかし、何でもよいながらも商業科のプログラミングが長きにわたりCOBOL言語に固定化されているのは現代の情報産業の状況に合っていないのではないかと感じています。基幹システムでは今でも扱われている言語でも、生徒がその基幹システムに触ることはなく、ましてそれを改変するということはありません。生徒の興味・関心をかき立てるためには、言語は生徒にとって身近だと感じるものがよいのではないかと思うようになりました。

COBOLでの作例

```
IDENTIFICATION DIVISION.  
PROGRAM-ID. Example001.  
ENVIRONMENT DIVISION.  
DATA DIVISION.  
PROCEDURE DIVISION.  
P1.  
    DISPLAY "Hello World!"  
STOP RUN.
```

Javaでの作例

```
class Example001 {  
    public static void main(String [] args)  
        System.out.println ("Hello World!");  
}
```

【※どちらのソースもディスプレイ上に "Hello World!"と表示するもの】

本校の「情報処理」「プログラミング」は、検定試験に重点を置いて進めています。問題演習が主な学習内容で、「何かを工夫する」であるとか「新しい考えを付け足す」といったことは教えきれていません。これでは「問題に解答できる生徒」を育てることはできても「問題を解決できる生徒」は育たないと感じています。

3. 研究のテーマ

理想とするプログラミング教育を目指し模索していた中で「発想力」というキーワードにたどり着きました。もちろんその他にもキーワードとなりえるものがたくさんあると思いますが、私はこの「発想力」を中心として知識や技能を身に付けさせることが現状のプログラミング教育を打破するものと捉えました。

「発想力」とは「新しい考え方や思いつきを得る力」です。商業科目の多くの科目で物事をどのように把握して、どのような概念で理解するのかを養っています。その力を「プログラム」という形で自分の考えを表現することができるものが「プログラミング」であると思います。一度完成したプログラムを改変したり機能を付け加えたりと新しい発想を加えることができるのもプログラミングの醍醐味です。

以上のこと踏まえてプログラミング教育を見直す手立てとして考えたのが次の三つです。

- ①1年生から商業科目内で継続的に問題解決の手法を使い、発想力の素地を作る。
- ②5ヶ年計画でプログラミング教育の内容を再構築する。
- ③生徒の生活体験に合った取り組みやすいプログラム言語を学ばせる。

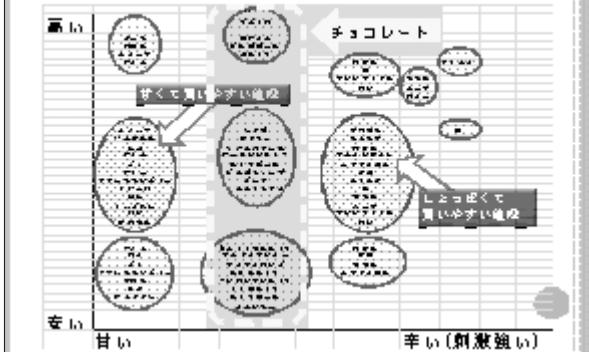
これらのこと実践することで「発想力を養うプログラミング教育」ができるのではないかと考えました。

①の実践では、発想力を養うための素地を作

ることを、各商業科目で系統的問題解決の手法を入れて試みることにしました。

1年生の「ビジネス基礎」で消費者ニーズを把握するために付せん紙によるKJ法を使ってみました。同じく1年生の総合的な学習の時間「ビジネス基礎講座」でグループディスカッションとポジショニング分析を試みました。

味覚と価格のポジショニング分析



【ポジショニング分析】



【グループディスカッションの様子】

情報コースの2・3年生の「情報処理応用」や「課題研究」では、話の内容を文字と時間の推移で表し、論述が視覚的にわかるようになるファシリテーショングラフィック法を適時使ってみました。

これらの問題解決の手法を繰り返し行うことでの物事を多面的に捉えること、事象についての課題や問題点、その解決の方向性などが頭の中で浮かぶようになってきたようです。これはグループで話し合いをさせるときなどに、広がりのある発言が出てくることから感じられました。

②の実践では、プログラミングの主担当者となった平成21年度からの5ヶ年計画としてプログラミング言語の精選を行い、平成24年度は4年目の取り組みとなります。これまで情報コースの一部の生徒だけが学ぶものだったものを、情報コース全員が学ぶ学習として確立することです。これは情報コースのねらいである「将来の企業の情報管理に携わる人材の育成」を達成するためには、アプリケーションの操作だけでなく、言語の知識と技術を身に付けることも必要と考えたからです。また、従来のプログラミングを見直し、取り扱う言語を精選し、生徒が身近に感じるプログラミング言語を選択し、本校のプログラミング教育の再構築を図り、プログラミングをものづくり科目として位置づける計画としました。来年度でこの計画は一つの区切りを迎え、本校情報コースの柱としての意味を持つことになると考えます。

③の実践として、今まで2年次で取り扱っていたCOBOL言語を今年度から廃止し、Excel VBAを採用したことです。本校の現状でも述べたように、プログラミングはある目的を達成するための手順を考え、プログラミング言語によって具現化することを目的としています。したがって、授業で取り扱う言語は何でもよい。しかし、生徒の生活環境からかけ離れた言語をわざわざ使う必要がないと考え、実状にあった言語を選択することで、そこに発想力を養うポイントがあると考えました。また導入コストのかからない言語であることの魅力でありMicrosoft Excelに標準で組み込まれている開発ツールということで、ワークシート上で操作したり利用したりすることですぐに馴染みの画面上で処理結果を見ることができることも興味・関心を引き付けるポイントだと考えたからです。

3年生で学習するJavaも開発ツールやコンパイラを無料でダウンロードできる上、携帯のアプリや近年ではスマートフォンアプリを作成するためのベースとなっている言語です。本校の

生徒のスマートフォン利用者は年々増加しています。そのため、Javaでプログラミングを習うとスマートフォンアプリが作れるということで興味・関心を引き出すことができると考えました。

4. ものづくりとしてのプログラミング

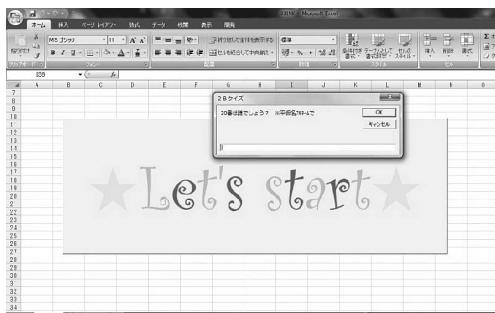
「プログラミング」は現行の学習指導要領では商業科で唯一自らの手で「モノづくり」を学ぶ科目です。プログラム完成までのプロセスは次の手順で行われます。

- ①問題分析
- ②フローチャート作成
- ③コーディング
- ④プログラミング
- ⑤コンパイル
- ⑥テストラン・デバッグ
- ⑦プログラム運用

この流れの中の「問題分析」から「フローチャート作成」までの部分が発想力を必要とする部分であり、養われる部分です。

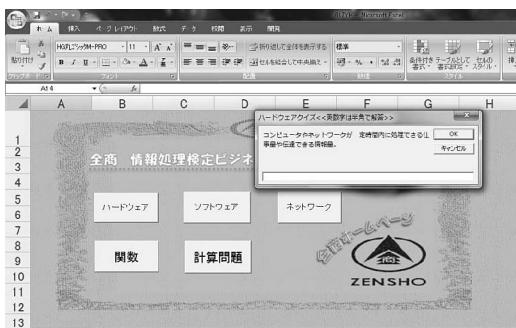
自ら考えたこと（問題分析）を図式化（流れ図）してプログラムの形を作ります。そのプログラムをコンピュータに実行させ、その結果を見て自分の考えが具現化しているのかを確かめることになります。このプロセスはコンピュータが実行するかどうかの部分を別のものに置き換えることで様々なものに応用できます。作るもののがコンピュータプログラムなのか、商品や工業製品などの形あるものなのかを問わず、プロセスを重視することで「モノづくり」を通して「発想力を養う」ことができ、商業教育にとって大切な考え方だと思います。

次に示すのは今年度の2年生がテキストの例題から何ができるかを考えて考案したプログラムの画面です。基になっているのは都道府県の県庁所在地を当てるというプログラムです。



【クラスメイトの名前を当てるクイズ】

女子生徒が考案した出席番号が表示されてその番号の生徒をフルネーム（ひらがな）で答えるというクイズです。このクイズはクラス内で最も評価の高かったプログラムとなりました。

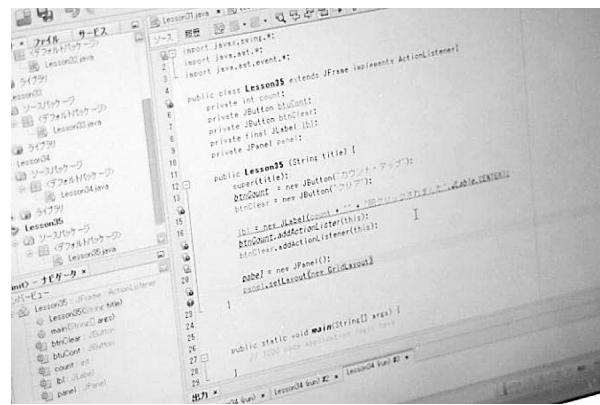


【全商情報処理検定1級対策】

作成した男子生徒がプログラミングに高い興味・関心を示す生徒であったこともあり、見た目にもこだわったプログラムとなっていました。

以上のことから、生徒の生活に身近なプログラミング言語を使用する実践は、すべての生徒が意欲的に取り組んだと言えます。クイズを作るという身近で取り組みやすい課題であったので、自分の考えをプログラムにするという作業は、自分だけのオリジナル作品を作る喜びを得ることができたと思います。この楽しさの中に次への発想の力が潜んでいると感じました。

次は3年生のJavaでの実習風景です。12名のプログラミング選択者での授業であり、前述にある学習意識の高い生徒たちです。



【開発ツールを用いたデバッグ作業】



【発想が発想を呼ぶ】

Javaを教え始めたのは平成22年度からです。その当時は2年生で学んだCOBOLからJavaに慣れさせることに重点を置いていましたが、年々 COBOLからJavaに切り替えた途端に生徒の反応が良くなっていることに気付きました。

その要因は生徒の思いつきやひらめきがオブジェクト単位で考えることができます。また、オブジェクト単位で考えることは全体をいくつかの部分に切り分けて考えることで、個々のオブジェクトの役割と関わりを理解し、自動的にそれらを組み合わせるという思考につながります。そのため思考の順序性をはっきりと意識するようになります。このことはその後のデバッグ作業においても効果がありました。

デバッグ作業時は、専用の開発ツールを使用しているためエラー解決のヒントが表示されます。生徒はヒントが表示されるとそれがどのオブジェクトに関することなのかを考え始めます。そして、そのオブジェクトの動作やどのように

他のオブジェクトに影響を及ぼすかなどといったことも考えるようになっていました。課題には、それぞれの生徒の発想が込められています。さらに教え合うことを積極的に行ったことで、結果的に生徒同士がお互いの発言からヒントをもらい自分の作品にそのひらめきを取り入れる様子が見られました。

5. おわりに

従来の技術者を育てるという学習を捨てることもできませんが、商業科のプログラミングとして確立していくためには、原点に戻って商業を学ぶ生徒が目的達成に向けて物事を順序立てて考えることを身に付けさせが必要です。検定試験や国家試験の合格だけで技術者として定義してはなりません。まずは技術者としての心構えや考え方を身に付けさせ、その証明としての検定・資格という学習体系を確立する必要性があります。

プログラムを作るということは、専門性が極めて高いという固定観念がありましたが、実際それは職業として考えた場合で、学習という観点からすると、商業科の「プログラミング」は発想力を養う科目に他なりません。他の科目との関連性を深めることによって、有形・無形に関わらず「価値を生み出す」科目としての役割があります。「逆転の発想」「発想転換」という言葉があるように、ビジネス成功の陰には「発想力」が関係しています。新学習指導要領を前にプログラミングという科目から商業科目相互連携を視野に入れた取り組みの現在の状況を分析しました。

まだまだ課題となるべきことがたくさんあることは十分に承知の上で今回執筆をさせていただきました。商業科を学ぶ生徒並びに商業科を教える教員が「価値を生み出すことができる教科」として再認識し、商業科の発展につなげていくためのひとつのきっかけになれば幸いと考えています。

秋商ビジネス実践の取組

秋田市立秋田商業高等学校

保坂 徹・桜庭 咲子

はじめに

本校では平成14年度から商業高校の学習の特徴を生かして、総合的な学習の時間で全校生徒が「ビジネス実践」を行ってきました。このビジネス実践がなぜ行われるようになったのか、どのような実践なのか、この実践を通してどのような力がついているのかなどについて報告をしたいと思います。

1 商業高校の課題

学習内容について、商業は他の専門高校に比べて見えにくいと言われています。

農業や工業は、学習の成果が農産物や工業製品などの具体的な形になって見えます。商業の学習の成果は、生徒たちの姿で学校外の人たちに伝わります。農業教育や工業教育は「ものづくり教育」、商業教育は「人づくり教育」などとも表現されています。

この見えづらい商業の学習を広く学校外の方々に目に見える機会を作ること。そして地域の方々を自分たちの学習の要素として取り入れ、一緒に活動していかなければいけないのではないかと考えるようになりました。

また生徒については、体験的な学習することが少なく、商業の知識や技術は、検定試験の成果で身に付いているという感じがあります。生徒の学習と体験活動、そして地域の方々との協同活動、その発表の場を街中にするという方向を模索しました。

この当時、全国的にも商業高校は同じような課題を抱え、先進的な学校は実践に取り組んでいました。高知商業は学校自体を模擬株式会社としてラオスに学校を建てようというスローガ

ンのもと街に出て販売イベントを開く活動をしています。

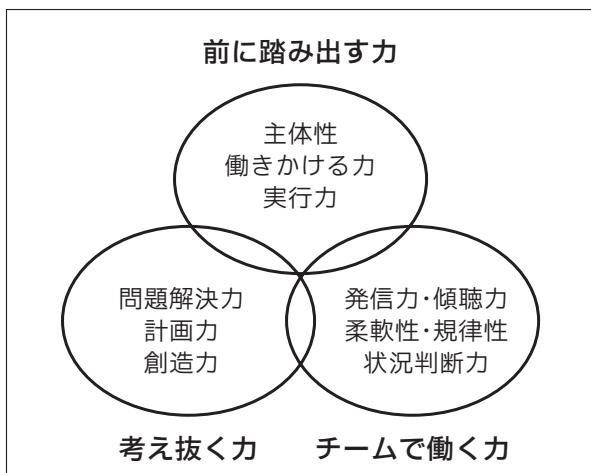
2 仮説

地域の方々に商業の学習内容を広く知つもらうため、商業の学習発表の場を作る。このことが地域の発展や活性化につながるのではないか。

取り組みの手段として、学校全体を会社組織と見なして、全職員・生徒で三年間を通じ継続して行うことや、外部企業の方々に協力してもらいたい実践的な活動をすることで、社会人としての基礎力を養えるのではないかと考えました。

社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」、「考え方力」、「チームで働く力」の三つの能力から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が提唱しています。

社会人基礎力とは



③ ビジネス実践の実際

①ビジネス実践の変遷

平成14年度から学校全体で商品開発をして、秋田市の通町商店街でのイベントを開催することで商業の学習発表と町の活性化を実現させようと取り組みました。

その後、秋商のショップという意味でAKI SHOP（アキショップ）と名前を付け、会場を駅前周辺やアルヴェなどに変えながら、商品開発をすることをメインに活動をするようになりました。

AKI SHOPの活動が知られはじめると、もの売りのイベントと誤解をされるようになってきた反省を受け、自分たちの商業の学習を小学生に金融教育を通して実践するキッズビジネスタウンの活動や地域経済や環境問題を考え、持続発展教育を実践するユネスコスクールへと多様な方向性を出しながら継続してきています。

②活動の内容

年度初めにビジネス実践推進委員会が10人ほどの教員で組織され、AKI SHOP部、キッズビジネ스타ウン部、ユネスコスクール部の年間の計画を立てます。

5月下旬に全校生徒と教員に対して、今年度の活動内容とねらいなどを説明し、どの部で活動したいのかの希望を取ります。

2・3年生の約480人が、AKI SHOP（約410人）、キッズビジネ스타ウン（約40人）、ユネスコスクール（約30人）に分かれます。1年生は、商業科目のビジネス基礎の内容を基本にしたビジネス実践基礎講座として活動をしていき、11月のキッズビジネ스타ウン当日は、各店舗の従業員となります。

[AKI SHOP]

① AKI SHOPの組織と目的

AKI SHOPは、生徒会が本部となり約15班の惣菜や菓子などの商品開発する班や地域の魅力を再発見し観光プランなどを考える班など

から構成する組織となります。

商品開発などを通して、自分たちの考えをまとめ、外部の方々にそのことを伝え、現実するための壁をいくつも乗り越えながら11月のAKI SHOPでの販売を成功させるために仲間とともに活動していきます。

②開発商品の企画

商品開発をする各班に集まってきた約30人の生徒たちは、どのような商品を開発していくかを本部から手順資料をもとに話し合っていきます。話し合いは、昨年度の経験を生かして3年生がリーダーシップをとって進められます。



大まかな商品の方向性が出てきたところで市場調査を実施します。インターネットで既存の資料を調べたり、実際にアンケート用紙を作って聞き取り調査を実施したりします。これらの結果をまとめて、商品企画書を作成します。

③外部企業を招いた企画検討会

開発する商品ごとに商品加工や菓子店などの外部企業に来校していただき、企画検討会を行います。この企画検討会は、自分たちの考え方を具体的に商品化することの高いハードルを体験する場面です。



生徒たちは企画書をもとにしたプレゼンテーションを作り、自分たちの考えを企業の方々に伝えます。企画発表後、個別に外部の方々から評価をもらい、改善点などを指摘され、開発を引き受けてもらえる場合は今後の段取りなどを打ち合わせしていくことになります。

- ・少し堅めのパン生地に、やわらかいもちを巻いて手で持ちながら食べる商品を開発したいと考えた班は、パン生地の強度の問題を指摘されました。
- ・イチゴや梨などのフルーツを使ったケーキを考案した班は、フルーツの採れる時期や原価が高く、予定販売価格では利益がないなどと指摘されました。

④企業との交渉

企業に商品開発を引き受けてもらえた後、企業訪問をしたり、電話やFAXなどで打ち合わせをしながら、何回か試作品を作ることになります。

その後、販売価格の設定や販売個数、商品の引き取り方法や時間など様々な販売に向けた打ち合わせをします。

⑤販売実習

AKISHOP当日は、各店舗に商品が並べられ、来店された方々へ商品を販売します。どのようにして作ったのかや商品の特徴などを聞かれます。開発しながら培った知識と笑顔での対応となります。

販売終了後は、会計処理を行い、本部へ会計報告書（損益計算書と貸借対照表、領収証など）を作成し、全校生徒を集めた最終報告会で発表します。



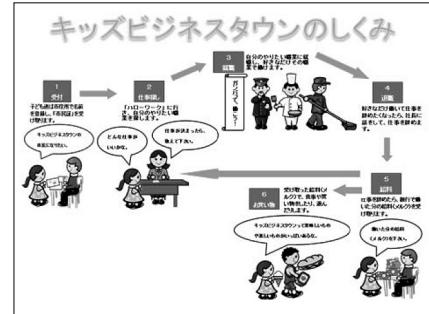
[キッズビジネスタウン]

①キッズビジネ스타ウンの目的

キッズビジネスタウンは、小学生以下の子どもたちが市民となり「みなで働き、学び、遊ぶことで、ともに協力しながら街を運営し、社会を学ぶ」教育プログラムです。

キッズビジネスタウンに参加した小学生は、

模擬的に設定された街で、市民となり、ハローワークで仕事を探します。その後、模擬販売店などで働いて給料をもらい、その給料で買い物をする体験します。



②基礎学習と店舗設計

キッズビジネスタウンでの活動を希望した約40人の生徒たちが、社会と経済の仕組みを学習します。

自分たちが開設する店舗をKJ法を使って整理し、他の店舗とのバランスを見ながら模擬社会での店舗設計をします。開設する店舗などは次のようなものがあります。

公共機関	消防、病院、銀行など
飲食店	カフェ、ラーメン屋など
サービス業	新聞社、写真館など
製造業	アロマ工房、ハンコ工房など

③連携企業の決定

担当する店舗が決定した後、販売する商品やサービスを考えます。実際に外部の企業に出かけて仕事についてのインタビューをしたり、商品の作成方法を学びに行ったりします。

④小学生への求人票準備と1年生の指導

各店舗の社長は、仕事内容を詳細にした求人票を作成します。同時に、当日の仕事内容をイメージしながら、小学生の仕事内容を具現化し、物品の準備などをしていきます。

また、2・3年生の経営する店舗には、1年生が6人程度手伝いとして働くことになります。この1年生の仕事の手順などを考え指導します。

⑤当日の様子と生徒の感想

はじめは生徒たちも不慣れな感じで、仕事の手順なども確立されていない様子でしたが、時間が経過し、接客を繰り返すうちに徐々に自信をもって取り組むようになりました。各店舗の大まかな様子は次の通りです。

- ・消防署…晴れていれば外で放水作業などができたが、今回は雨であったので防護服着用と消防車での記念撮影となった。



- ・飲食店…昼ごろをピークにして、目が回るような忙しさだった。

閉店時間前に売り切れになる店舗も多かった。

- ・サービス業…写真館やスポーツクラブなどのサービス業はお客様が来ないことに悩んでいた。お客様が来なくなるようなサービスを考えなければいけないと感じた。

- ・工房…コンスタントに就業希望者が来てくれた。セレクトショップでは売れ残りもあったので、小学生向けの商品を絞り込む必要があると感じた。

⑥参加した小学生と保護者の感想

参加した小学生からは大変好評で「高校生が優しかった」「仕事が楽しかった」といった感想が多くありました。

保護者からは、「サービスの不十分さ」などを指摘する感想がありました。キッズビジネススタンプを実施して5年目となり、質の高さを求められる時期になったきたと感じます。



[ユネスコスクール]

①ユネスコスクールの目的

ユネスコスクール班は、外部講師による講座や海外へのスタディツアーワークを通して環境問題に

ついて学びます。この学んだことを小中学生対象の環境講座や一般市民対象の活動報告会などを通して地域に還元します。このような環境にかかる開発活動を通して、地球温暖化をはじめとする地球環境問題の解決に実際に寄与することを目的として活動しています。

本校の活動は、炭素排出量を実際に削減する装置等の開発といったハード面の取り組みというよりは、温暖化防止についての理解を促進し、人々を温暖化防止のための活動に駆り立てるようとするソフト面の取り組みであると言えます。

②平成22年度からの活動内容

i 環境教育とAKI SHOPでの発表

環境教育を開始した平成22年度には、校舎脇での緑のカーテンの作成、校庭へのヒマワリの植栽、全校生徒への家庭でのヒマワリ植栽の呼びかけ、黒板から出たチョークの粉や短くなつた使用済みチョークからチョークを再生させる取り組みなどを行いました。



平成23年度からは、秋田杉の廃材から持ち歩き用の箸を作ったり、ポリプロピレン製の結束バンドから鉛筆立てや籠を作る取り組みをしました。

これらの活動をAKI SHOP当日に、ユネスコスクールのブースを設置し、来場者の方々に発表しています。

ii 外部団体との協同活動と海外ツアー

平成22年度以降、環境問題にかかる秋田県内のNGOであるRASICと連携し、環境講座の講師を派遣していただいております。同NGOが主催するネパールへのスタディツアーワークには、平成22年8月に2年生1人、平成24年1月に3年生3人、平成24年8月に3年生2人を参加させていただきました。

夜間照明がない児童保護施設にソーラーラン

タンを届けたほか、現地の学生を対象とした環境ワークショップを実践したり、田舎の村の暮らしを体験して開発による生活様式の変化や地球環境の変化等の情報を得たりすることができました。



iii 小中学生などとのワークショップ

このようにして温暖化をはじめとする環境問題について学んだ生徒たちは、これまで小中学生や市民を対象に多数の環境問題に関するワークショップや活動報告を行ってきました。

年	対象	内 容
22	中学生	出前講座3回
23	小学生 中学生 保護者	環境講座「遊んで学べる地球 温暖化問題」
	留学生	ワークショップ 「自分環境と世界の関係」
	市 民	活動報告
24	大曲南	ワークショップ 「環境について」
	市 民	ネパールスタディツアーで学 んだこと

これからもネパールから帰国した生徒を中心に、エコロジーについて学んだことを地域に積極的に還元していく予定です。

また、『高校生のための地球環境問題入門』を発行し、この本の紹介も兼ねたネパール・スタディツアーに関するリーフレットを発行しました。このリーフレットは、地元N G Oと連携した本校の国際協力や環境問題に関する取り組みを広く知つてもらうのに役立っています。2000部を発行して、



約800名の全校生徒・職員に配布したほか、校外の様々な場所で配布しています。

4 検証

①社会人基礎力の育成

これらの活動を通して、生徒たちに社会人基礎力が付いているかを10月初旬と11月下旬にアンケート調査しました。(集計数264)

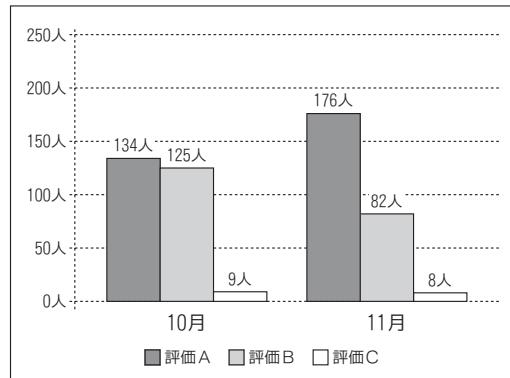
10月初旬は、それぞれの活動の途中であり、多くの課題に直面している時期です。11月初旬にはA K I S H O P やキッズビジネスカウンタを開催しています。その後、各班で反省や振り返りができるのが11月下旬となります。

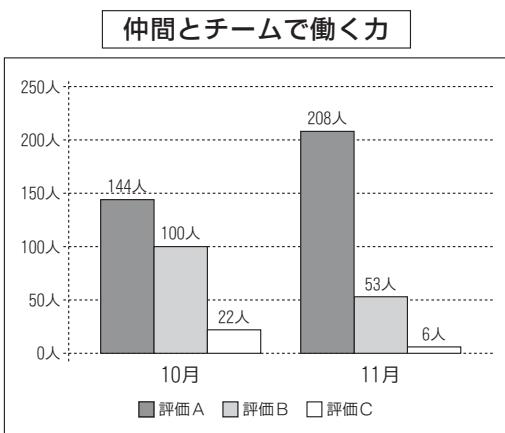
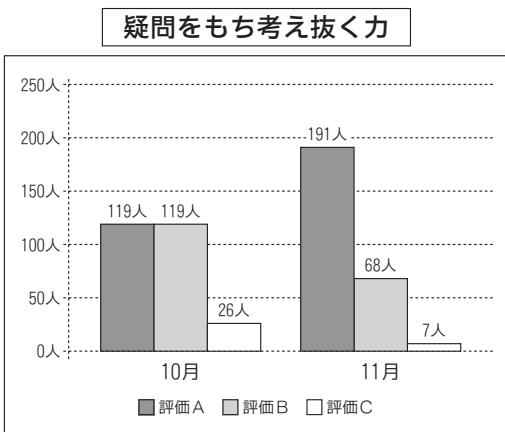
調査は「前に踏み出す力」「考え方」「チームで働く力」の三つの項目を評価A(力が付いた)、評価B(まあまあ)、評価C(まだまだ)の3段階で行いました。

各項目とも10月で評価B・Cにした生徒が、11月には評価Aに評価を変えています。経験を積み、成功体験をすることで自信につき好評価になったのではないかと思います。

項目	評価	10月	11月
前に踏み出す力	評価A	119人	191人
	評価B	119人	68人
	評価C	26人	7人
考え方	評価A	134人	176人
	評価B	125人	82人
	評価C	9人	8人
チームで働く力	評価A	144人	208人
	評価B	100人	53人
	評価C	22人	6人

前に踏み出す力





②担当教員と生徒の評価

11月下旬にビジネス実践の反省と改善点を調べました。

各班の担当になって1年間活動してきた教員と生徒からは、次のような点が指摘されています。

(教員)

- ・素晴らしい実践だが、前年踏襲の面が多い
- ・どのような力が付いているか不明確
- ・班活動で時間をもて余している生徒がいる
- ・AKI SHOPの目的がモノ売りイベント化している
- ・キッズ担当の生徒は大きな成長が見られた

(生徒)

- ・毎週の活動に、忙しい時と暇な時がある
- ・3年生にまかせっきりの部分が多くあった
- ・企業交渉の結果が伝わりづらい
- ・セリオンではあまり来場者が期待できない
- ・参加した小学生の対応が楽しかった

教員は、ビジネス実践の目的の明確化や担当する係の平準化、生徒指導での困難点を指摘する傾向が多いようです。

生徒は、毎時間の活動内容が思ったように進まない不満感や、AKI SHOPの開催場所と来場者に関するものが多くありました。

③AKI SHOPへの評価

i マスメディア

AKI SHOPでの販売当日の生徒の接客や商品開発を通して身に付けたものが大きいと新聞でも評価されています。

テレビやラジオでも取材を受けたり、出演をして広報活動もしています。このような広報活動ができるることは、地域の方々に好意的に受け入れられるとともに、高校生への期待が大きいだと感じています。



意的を受け入れられるとともに、高校生への期待が大きいだと感じています。

ii 協力企業からの評価

AKI SHOPの商品開発に協力していただいた企業約20社に感想を聞きました。

今後も協力いただける… 6社

高校生の発想が面白い… 3社

マンネリ化している… 1社

年によって学校の対応が違う… 2社

要望が多く対応が難しい… 2社

協力は来年度になって考える… 4社

地域経済の活性化ということも、このAKI SHOPの大きなテーマの一つです。企業側の立場に立って高校生が何ができるのかという視点をもう少し大切にすべきだと思います。

④キッズビジネスタウンの評価

キッズビジネスタウンについては、学校とし

て連携をした勝平小学校と出戸小学校から評価してもらいました。

事前と事後の打ち合わせを丁寧に行うことで、前年度の課題であった仕事探し時の混雑や開始時の買い物客の少なさの解消などが図られてよかったですと言われました。

また、働いた後に高校生の社長からの勤務評価を取り入れたことで高校生と小学生のコミュニケーションが取りやすくなったりなどよい評価がありました。

改善してほしい点としては、小学生は働いた給料をすぐに使おうとせず、貯めておいて当日の後半に使う傾向にあります。そのため、午前中にモノが売れないという現象がおきています。お金の流れを平準化する模擬社会の仕組みを考えてほしいと要望がありました。

⑤ユネスコスクールの評価

ユネスコスクールについては、「小中学生・市民対象の講座実施と書籍の出版による啓発活動」が評価され、平成24年度地球温暖化防止活動環境大臣表彰（環境教育・普及啓発部門）を



受賞しました。同表彰の「環境教育・普及啓発部門」には69件の応募があり、10のN P O法人や学校、個人が選ばれています。

5 課題とまとめ

平成14年度から商業高校の課題を克服し、生徒たちに社会人基礎力を付けるための活動も今年で11年目を迎えました。学校全体を会社組織にして、全教員・生徒で活動を続けられてきたことは、全国的に珍しい取り組みです。これは学校としての協力体制を整えたことと、この実践を大切にしていきたいという全員の熱い思いがあるからだと考えます。

しかし、今後の継続に当たってはこのビジネ

ス実践の意義と目的、そしてどのような方法でそれを実現していくのかを改めて見直し、目的が手段化しない（ものをたくさん売ったりすることが目的でなく、社会人基礎力を付けることが目的など）ようにすることが大切だと思います。

アンケート調査からは、生徒の社会人基礎力は高まっていることがわかるのですが、日々の生活の中でそのことを感じる場面は数少ないようになります。実感が伴う実践が一つの目指す方向ではないかと思います。

その一つとして、平成23年度から取り組んでいる「秋商キャリア教育」との関連づけと目的の明確化です。

秋商キャリア教育は、3年間商業高校の特色ある授業を受け、地域の人たちに支えられながら各自の自己実現を目指していくことを構造化して作りました。

この中でビジネス実践は、学校の授業の実践、いくつものハードルを仲間とともに越えていく場という重要な要素になっています。

これからも今までの成果を適切に評価し、学校外の人たち、担当する教員や生徒の意見を真摯に受け止め、時代の変化に対応した商業高校として、地域社会と企業、子どもたちに必要とされる教育を実践していきたいと思います。

平成24年度 指導主事（英語・商業）訪問における 研究授業の学習指導案と反省・課題

教務部

平成24年12月3日（月）

日 程

- | | |
|------------------|--|
| 1. 学校経営説明 | 11時00分～11時50分 |
| 2. 授業参観 | 4校時 12時00分～12時50分（商業科）
5校時 13時30分～14時20分（英語科） |
| 3. 各科協議（英語科・商業科） | 14時30分～15時20分 |
| 4. 全体協議： | 15時40分～16時40分 |

訪問指導主事

秋田市教育委員会学校教育課	主席主査（指導主事）	谷村 格 先生
秋田市教育委員会学校教育課	主査（指導主事）	伊藤さつき 先生
秋田市教育委員会学校教育課	主査（指導主事）	長谷山庫之 先生
秋田県教育庁高校教育課	指導主事（商業科）	佐藤 貢 先生
秋田県教育庁高校教育課	指導主事（英語科）	下橋 実 先生

Teaching Plan for English II

School: Akita Commercial SHS

Instructors: Asako Suto

Joylene Medom

Date: December 3rd, 2012

Class: 2-C (6 boys and 15 girls)

1. Textbook: VISTA English Series II Step One New Edition (Sanseido)

2. Allotments:

1st period: Introduction of the theme of the debate

Writing their opinions about the theme

2nd period (Today): Presentation of each group

3. Aims of today's lesson:

- To have the students present their own opinions in a clear and persuasive way.
- To have the students listen to the opinions of the opponent teams attentively.
- To have the students counter their opponents' ideas.

4. Teaching Procedure:

Procedure (Time)	Activities		Skills	Evaluations
	Teacher(JTE and ALT)	Students(Ss)		
Greeting (1min.)	-greet Ss	-greet T	SL	-if Ss greet cheerfully
Warm up (3 min.)	-have the students decide the order of presentation	-decide the order of presentation in each group	SL	
Preparing for the debate (7 min.)	-have Ss practice reading their own opinions aloud and prepare for the debate	-practice reading their opinions aloud and check the pronunciations	SR	If Ss try to prepare for the debate
Debate and Judging (25 min.)	-have Ss present their opinions one by one -encourage Ss to ask questions or counter the opponents' opinions	-Ss of the two teams present their opinions about the theme one by one and ask questions or counter the opponents' opinions	SLW	-if Ss try to have others understand their opinions -if Ss try to ask Qs or counter
	-have Ss of the other two teams judge the presentation -give bonus points for Qs and counter arguments	-listen to the other teams' presentation and judge	LW	-if Ss try to understand the opinions presented
Announcement of the result of judging (7 min.)	-collect the results of judging from each group -announce the result of judging of Ss and Ts	-listen to the announcement of ALT	L	-if Ss listen to the announcement carefully
Comments and greeting (7 min.)	-Alt and Jte make some comments about the presentation -have Ss listen to Alt and Jte -greet Ss	-listen to Ts' comments -greet Ts	LS	-if Ss greet cheerfully

L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

Teaching Plan for English II

School: Akita Commercial SHS

Instructor: Junko Toda

Date: December 3, 2012

Class: 3-F (11 boys and 28 girls)

1. Textbook: EXCEED English Series II New Edition (Sanseido)

2. Allotments:

1st and 2nd periods: section 1

3rd and 4th periods: section 2

5th and 6th periods: section 3

7th period: section 4

8th period: section 4 reading activities and summarizing(Today's lesson)

9th and 10th period: section 5

11th period: grammar and comprehension exercises

3. Aims of today's lesson:

(1) To have the students read and translate the passage correctly

(2) To have the students make a summary of the passage and understand the topic of it

4. Teaching Procedure:

Procedure (Time)	Activities		Skills	Evaluations
	Teacher(JTE)	Students(Ss)		
Greeting (1 min.)	-greets Ss	-greet T		
Warm up (6 min.)	-has Ss practice the expressions of section 4	-review the expressions of Section 4	LS	
Listening (2 min.)	-plays the CD of section4	-listen to the CD	L	
Reviewing (6 min.)	-asks Ss questions about this section	-answer the questions	LS	
Reading Activity (18 min.)	1) has Ss listen and repeat section 4 2) reads Japanese and has Ss read English phrases aloud 3) has Ss read the passage aloud twice 4) has Ss do the sight translation in pairs	1) repeat after T and practice reading 2) read English phrases after listening to T read Japanese 3) practice reading separately 4) one S reads it in English and the other S translates it into Japanese in pairs	LSR	-if Ss read the passage correctly and fluently -if Ss cooperate in pairs and share the translation
Writing (10 min.)	-has Ss answer the questions about this section	-write down the answers to the questions	RW	-if Ss can answer the questions correctly
Summarizing (7 min.)	-has Ss fill in the blanks and makes the summary of the passage -has Ss read the summary aloud	-complete the summary by filling in the blanks -try to memorize the summary with the help of key phrases	RW S	-if Ss understand the topic of the passage

L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

〈英語科教科協議会〉

平成24年12月3日（月）

記録者：菅生あずさ

1 5校時授業者から

（須藤）：

2年生流通経済コースの生徒への授業であった。2単位しかないので、準備時間の確保が難しかった。生徒には「英語はcommunication tool（意志伝達手段）だから、英語を使って話す活動をする」ということを年度当初に伝えてあり、これまでに2度ディベートを行ってきたクラスであった。

本日の授業では、教師からの助けを多く出してしまったと感じている。生徒同士のインタラクション（interaction：対話）が必要だと感じた。

（戸田）：

3年生情報コースの生徒であり、学力がしっかりしている生徒と英語が苦手な生徒が混在しているクラスである。creativeな活動まで行えないのが課題である。

2 意見交換

（1）須藤先生の授業について

- ・challenging（苦労はするがやりがいのある）な活動である。「他の人の話を聞いて、自分の意見を言う」というのは、生徒が一番弱いところだと思う。
- ・生徒が楽しげで“やらされている感”がなかった。
- ・男子生徒がクラスの雰囲気を良くしていた。
- ・生徒に教え合う雰囲気があって良い授業であった。

（2）戸田先生の授業について

- ・reading（音読）を多く取り入れており、最後にsummary（まとめ）という流れが良い。
- ・黒板の端に活動の流れが書かれているので、生徒には分かり易い。
- ・サイトトランスレーション（Sight Translation

：同時通訳）させる英文は、抜粋したもの を読ませても良いのではないか。

- ・readingの活動は生徒に英語をたくさん使わせる活動なので良いと思う。

3 指導主事助言

（下橋先生）：

戸田先生の授業は、英語で指示を出しているのがよかったです。ペア・ワークで話し合わせたり、意見を言わせたりするとinteractive（対話式）な学び合いに繋がる。また、まとめの活動として絵や写真を見せることも有効である。

須藤先生の授業は、これまででもディベートを行ってきたということであるが、ディベートを通して「他の生徒の話を聞き、自分の意見をまとめて表現する力を養う」ということを目的と捉えた。この活動を繰り返し行い、いずれは「即興で話す」ことを目標にしてほしい。

ALTの配置はcommunication activity（コミュニケーション活動）のためなので、活用して欲しい。また、語学は習得と活用が目的であるため、学んだことは生徒に使わせなければならない。

（伊藤先生）：

戸田先生の授業では、授業の流れを黒板に書いてあるのが良い。新出単語の発音や意味の確認から、本文内容の確認という流れは中学校と似ているので、生徒にとって取り組みやすいと感じた。interactionを増やすには、教師とのQ&Aを入れるなどして増やしていくのも方法の一つである。

chunk reading（意味のまとまりごとの音読）もペア・ワークによって、生徒の責任感が増し、check機能が働くので良い。

須藤先生の授業は、生徒が元気に取り組む様子から自己表現が楽しい活動であることが分かった。繰り返していくことで、さらに生徒が動けるようになると思う。評価としてvolume（声の大きさ）、confidence（自信の有無・態度）、

memorization（暗記できているか）が挙げられていたが、これにcontents（内容）を入れた方が良い。他の人の真似でない内容であることやある程度の分量があることなどを目標にさせるべきである。また、教師が「こういうことを今反論したね」というような助け船を出すことで盛り上がることもある。グループの点数発表の時は、最後に生徒自身が「なぜ自分たちのグループは点数が低かったか」を自己評価していたので、こうした言動が見られれば、生徒はもっと良くなろうとするはずである。

商業科『会計』学習指導案

指導者氏名 石田 雄哉

1. 日 時 平成24年12月3日（月）4校時

2. クラス・使用教室 2年A組 17名（日商簿記1級コース）・2A教室

3. 単元名 テーマ7 有形固定資産

4. 単元目標

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
有形固定資産の性質や処理方法の違いについて、掘り下げて考えさせる。	有形固定資産の性質や市場の変化によって、会計処理がどのように変化するかを判断できる力を養う。	会計処理に従って、仕訳、勘定記入、B/S・P/Lの作成まで、一連の処理を行う力を養う。	有形固定資産の性質を理解し、それにふさわしい処理が何かを理解させる。

5. 単元と生徒

- ・教材観 有形固定資産の性質を理解させ、その性質や市場の変化によって行うべき適切な会計処理（減価償却や減損処理、資産除去債務の処理など）を判断し、仕訳から勘定記入、決算書の作成に至る一連の処理を行うことができるこことをねらいとする。
- ・生徒観 2年生6月時点で日商2級に合格した生徒で、簿記会計に関する理解度は高い。授業態度は真面目であるが、意見表明や発表にはあまり積極的でない生徒が多い。
- ・指導観 日商1級の内容を広く学習し、これまでの会計・原価計算の根幹にある考え方を理解できるよう指導している。また、1級となると社会的知識も必要となるため、社会的事象と結びつけて指導するよう意識している。機械的に問題を解くだけではなく、処理の考え方や、解答する過程などの思考について積極的に発問し、答えさせるよう指導している。

6. 使用教材 TAC出版 合格テキスト日商簿記1級

7. 指導計画 テーマ7 有形固定資産

1. 有形固定資産とは：1時間
2. 減価償却（耐用年数変更、グルーピング）：2時間
3. 有形固定資産の売却、除却、買い換え、臨時損失：2時間
4. 圧縮記帳：1時間
5. 減損会計：2時間（本時 2／2時間）
6. 資産除去債務：2時間
7. 取得原価と費用配分：1時間

8. 評価基準

関心・意欲・態度(A)	思考・判断(B)	技能・表現(C)	知識・理解(D)
	減損の認識について判断ができるか。必要な会計処理を考えているか。	適切な会計処理に従って、簿記の一連の取引を処理できるか。	減損について理解し、処理方法を理解しているか。

9. 本時の目標

減損会計に従い、減損の兆候を判断し、適切な会計処理にしたがって仕訳、勘定記入、貸借対照表への記載、損益計算書への記載までの一連の処理を行うことができる。

10. 本時の計画

	学習内容	指導上の留意点	評価について
導入 5分	・本時の学習を確認する。	・減損の認識、減損損失の測定方法を確認する。	
展開 40分	<ul style="list-style-type: none"> ・貸借対照表における表示形式「直接控除形式」、「独立間接控除形式」、「合算間接控除形式」を学ぶ。 【10分】 ・減損処理後の減価償却について、定額法・定率法の確認を行う。 【5分】 ・一連の問題演習（例題7ー9）で、処理を実際に行う。 ①減損の認識 ②減損損失の測定 ③貸借対照表での表示 ④減価償却 【15分】 ・共用資産の処理について学ぶ。 (研究の例) 【10分】 	<ul style="list-style-type: none"> ・それを並記し、違いに気づかせる。 ・「定額法」、「定率法」を簡単に復習する。 ・いったん区切って、未償却残高に対して処理することを強調する。 ・しっかり問題文を読み、判断を行うように指示する。 ・減損の認識方法には違いがないことを指導し、共用とはどんな状況かを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問題文を読み、減損の認識、処理方法を正しく判断できるか。（B） ・手順に従った会計処理を実施できるか。（C） ・応用して処理方法を判断できるか。（B）
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・一連の流れを再確認する。 ①減損とは何か ②どういう状況で減損がでるか ③貸借対照表の表示について ④共用資産について 	・減損とは何か、その処理方法は何かを発問によって確認する。	・減損とその処理方法について理解しているか。（D）

商業科『パソコン応用（学校設定科目）』学習指導案

指導者氏名 米澤 雅史・長谷川 大
倉光 徹・菅原 健太

1. 日 時 平成24年12月3日（月）4校時

2. クラス・使用教室 3年E F組 66名（情報コース）・総合情報処理室

3. 単元名 テーマ 模擬株式取引におけるポートフォリオの重要性

4. 本時の目標

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
前日と比較した、株価の変動と社会・経済現象とのリンクを調査できる力を養う。	日々のニュースや話題から未来予想図を想像し、実現可能な企業に投資ができるかを考える。	株価チャートの作成や投資銘柄の基礎情報の調査、投資銘柄の選択理由を図やグラフを利用して表現できる力を養う。	現在存在している事象や製品・技術から新たな技術や製品を考え出す力を養う。

5. 本時の計画

	学習内容	指導上の留意点	評価について
5分	・本時のテーマを提示する		
展開40分	・投資銘柄の株価チェック（5分） ・本日のニュースチェック（5分） ・個人のレポート完成度の確認 ・グループ学習（30分）	・投資銘柄の動向を確認し、各班で表形式で記入できるよう指示をする。 ・株価の変動に影響がありそうな個人担当業界のニュースをチェックし、株価への影響を考察する。 ・個人が作成する担当銘柄の企業基礎情報の作成の完成度の確認。 ・グループで作成するレポートの構成を話し合い、テーマ設定やその選択理由などを文章化できるようグループ内で話し合い、それぞれの担当者が作成の手順などを確認、実施する。	・株価の変動を見ることよりも変化の理由を考えているか。 ・新製品のチェックや、他の業界のニュースも確認しているか。 ・班内で共通した認識でレポート作成が行われているか。 ・班全体でどの方向に向かい、各業界がどんな役割をし、レポートを完成していくのかを理解できているか。
5分	・グループ学習の成果を確認する	・班長が班員の成果を確認し、次回の作業内容を確認できたかを班内で確認する。	・自分たちで本時の課題を確認、次回に必要な事項を確認しているか、実現できるかを評価する。

商業科「プログラミング」学習指導案

日 時：平成24年12月3日（月）4校時

クラス：3年F組（12名）

教 室：会計実務室

指導者：小西 一幸

1. 単元名 Androidアプリ制作入門

2. 単元の目標

- (1) Androidアプリの仕組みに興味をもつ。
- (2) アプリ内のアルゴリズムを考えることができるようになる。

3. 単元と生徒

(1) 単元観

スマートフォンやタブレット端末の普及により、すべての世代でICT機器に触れる機会が多くなっている。それに伴って、「アプリ」という形でサービスが配布されており、そこにビジネスチャンスが感じられる。ここではプログラミングを専門技術として捉えず、ビジネスモデルを生み出す方法の一つとして生徒に学習させる。

(2) 生徒観

2年生から情報コースを選択した生徒のうち、特にプログラミングに興味をもち、科目選択した生徒12名である。学習意欲は極めて高く、少人数で構成されていることもあり活発な意見交換が交わされることが多い。ある生徒の発想が他の生徒の発想を促すことがあり、お互いを刺激し合って学習に向かっている生徒たちである。

(3) 指導観

アプリ制作はアイデアがあつて初めて成立する。生徒の発想力を引き出すこと、及び生徒の生み出す力を大切にし、単にプログラムソースを入力するだけでなく、プログラムが完成するまでの過程や背景を考えることができようになる指導を心がけている。

4. 単元の指導と評価の計画（計画時数全8時間）

計画	学習内容	評価			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	レイアウトファイルの作成（2時間）	◎		○	
2	<u>テキストボックスやボタンの配置（本時）</u>	○	◎		
3	ボタンへのイベント処理（3時間）			○	◎

【テキストボックスやボタンの配置 計画時数3時間】

①XML記述について ②オブジェクトのレイアウト ③Frame Layout構成（本時）

5. 本時の計画

(1) 本時のねらい 有効なアプリ画面配置を考えさせる。

(2) 本時の評価 ①アプリを使用者（ユーザー）の立場に立って考えている。（思考・判断）
②アプリを考案することに意欲的である。（関心・意欲・態度）

(3) 本時の計画

	学習内容	指導上の留意点	評価について
導入 5分	○プロジェクトを開く	○全員のプロジェクトの確認 ○本時の概要説明	
展開 35分	○「〇〇易い画面」を考える 発問① みんなにとっての「〇〇易い」は何か? ○各自のテーマに基づいた画面設計をスケッチする。 活動② テーマに基づいてみんなに紹介しよう。	○タブレットなどの実機を提示や実際に触れさせる ○用紙を配布し使い方を説明	○各自が答えている (観察) ① → 【C生徒】発言を促す ○テーマに基づいた画面設計ができている (観察・提出) ② → 【C生徒】助言する
まとめ 10分	○他の生徒の画面設計を評価する	○評価方法を提示	
	○自分の画面設計を評価	○マイナス面のみ評価（指示）	

指導主事学校訪問全体協議会

平成24年12月3日（月）

商業科協議会報告

商業科では以下の三つの研究授業を行い、いずれも新しい教材を使っての授業改善を目指した。

- 1) 2年会計コース
「日商1級 有形固定資産」
- 2) 3年情報コース
「パソコン応用」
株式価格の上下の裏にあるもの
- 3) 3年情報コース
プログラミング特化コース
「Androidアプリ制作入門」

〈指導助言として〉

- ・会計コースの授業では検定取得を目標としているかもしれないが、社会的事象と関連づけながら指導していた。
- ・パソコン応用ではレポート作成を通して社会の動きと結びつけていた。
- ・プログラミングでは授業者が生徒の考えをうまく引き出していた。一人一人が取り組んだことを全体のものとしていた。

英語科協議会報告

2CはALTと一緒にディベートを行った。ディベートは今年度、今回で3回目になる。3Fでは普段の授業に近いものを公開し指導をいただきたいと考えた。

- 1) 2年C組 発展コース
Debate Time
- 2) 3年F組
Exceed English Seires II New Edition
Lesson 9 Media Literacy Section 4

〈指導助言として〉

- ・2Cはchallengingな授業であった。生徒の発

表する力、聞く力の育成を目指したもので、生徒が楽しそうに活動していて良かった。自己表現活動であるので楽しそうにしていたのだと思う。

- ・聞いているグループが発表しているグループを評価するのだが、ディベートの内容を評価のポイントに入れた方が良かった。
- ・3Fの授業はほとんど英語でなされていたが、生徒はよく理解していた。
- ・授業の流れを黒板に書くなど、中学校と同じ配慮がされていて、生徒の側に立った授業で良かった。

研修部より

授業改善に向けた本校の取り組みとして、9月に本校では初めてとなる授業公開週間を実施した。11月に勝平中学校で国語、数学、英語、社会の出前授業を行った。校内研修として、キャリア教育講演会を7月に実施した。他校の実践例など、アドバイスをお願いします。

〈佐藤貢指導主事より〉

授業改善は①ねらいを明確に②生徒を引きつける展開③適切な評価の、3点に留意して、組織で取り組むことが肝要。

授業公開は年に1、2回、今後も継続してほしい。この部分に工夫を凝らしたという提案型の授業をやってほしい。

将来につながる指導をお願いしたい。

〈下橋指導主事より〉

時代の激しい変化に対応できる力を養ってほしい。社会で求められるコミュニケーション能力を伸ばす指導をお願いしたい。

〈谷村格指導主事より〉

生徒が自分の未来に夢を描きにくい時代。変化に対応する力と態度、先を見て今を生きる能力を育てる授業をしてほしい。

情報教育校内研修推進者養成研修講座に参加して

商業科 小 玉 美保子

1. 日 時 … 平成24年5月23日（水）10：00～16：15

2. 場 所 … 秋田県総合教育センター

3. 講座の目標 … 情報モラル指導やICTを活用した指導についての指導力向上を図り、情報教育校内研修推進者としての指導力を養う。

4. 研修内容

(1) 〈講義〉児童・生徒とケイタイの現状と課題

- ・インターネットやケイタイ及びスマートフォンを利用した犯罪やトラブルが頻発しており、児童生徒が加害者にも被害者にもなりうる。教師は現状把握や対処法を知る必要がある。
- ・高校での携帯電話所持率は98%であるが、フィルタリング率は高校で減少傾向にある。買うときにはフィルタリングをしているが、その後パスワードで解除している場合があるからである。
- ・インターネットやメールでトラブルにあったことがあっても、保護者に報告していないというデータがでている。トラブルにあっている児童生徒は、女子が圧倒的に高くなっている。
- ・警視庁の発表では、出会い系サイトでの児童生徒の被害は減少しているが、非出会い系サイトでの被害が増加している。
- ・あきたスクールサイトウォッチャ事業（事業内容：学校裏サイト等の検索・削除依頼・情報提供受付）から、サイトの削除依頼の成功率は85%である。記載されている内容は、フルネームや顔写真が載っているもの、児童生徒に対する誹謗中傷である。時間帯は夜が多いが、授業中の時間帯・深夜にも行われている。授業中に行われていることにも大いに注目してほしい。
- ・携帯電話からスマートフォンへ企業も移行する傾向にあるが、スマートフォンにはフィルタリングが効かない状況である。プロバイダにはフィルタリングによる接続制限が可能だが、Wifi経由で接続することができ、Wifiは自由につなぐことができ制限がない。
- ・SNS（コミュニティーサイト）、無料ゲームではユーザ登録が必要であり、ゲームをするだけなのにコミュニティーサイトへつながるので注意が必要である。

(2) 〈講義・演習・協議〉学校における情報モラル指導

- ・新学習指導要領では、指導計画の作成や教育課程の実施における配慮事項「言語活動の充実」と並んで「情報教育の充実」を明記している。
- ・平成24年度学校教育の指針本年度の重点でも、情報モラル教育の推進を掲げ、学校全体で推進するための校内体制づくりが求められている。
- ・情報モラル指導計画のポイントとして、①情報モラル教育の内容把握②生徒の実態把握③指導の重点項目の明確化④教育課程への位置づけがあるが、③④をこれから充実させなければならない内容である。

(3) 〈講義・演習〉教科指導におけるICT活用 (講師) 玉川大学教職大学院 教授 堀田 龍也

- ・ICT活用の目的は、授業が改善されること、それによって児童生徒がよりよく理解し学力が身につくことである。画面の解像度やソフトウェアの機能、金額、高度な技術ではない。
- ・ICT活用は、先生が生徒に対して、学力を身に付けさせるためのものであり、黒板と同じように普通教室に配置すべきである。また、常設がポイントである。
- ・データからも実物投影機を活用した授業が、活用していない授業よりも児童生徒の理解度が高い。
- ・黒板を使ったこれまでの授業に「ICTを付け足す」程度で良いのである。ICT活用によって効率的に教えることができる。効率的に教え、誰でも使えるものとして、実物投影機がよい。
- ・小学校中学校での実物投影機の普及は進んでいるが、高校では遅れている。すべての教室に設置するように進めていく必要がある。
- ・授業が分からなくなる児童生徒は、『ここを見てください』のこここの部分がどこを差しているか分からないのである。それを改善するのも実物投影機の良さである。また、教材の準備に時間が掛からないことも普及してきた要因である。児童生徒のノート・教科書もその場で写すことができる。
- ・ベテランの先生が実物投影機を使用することによって、より一層授業に深みが出る。研修等では高度な使い方ではなく、基本操作で十分である。

5. おわりに

今まで研修等で認識していたICTの活用概念が崩された。高度なことを教えるのではなく、ICTによって効率的・効果的に教え、生徒の理解度を高める。これまでにも、パソコンやプロジェクトを教室に持参し授業を行ったことはあるが、準備に時間が掛かり、毎時間のように活用することが困難となり、そのうち持参しなくなる。このような状況も、堀田先生は指摘していた。それを改善するためにも実物投影機の良さを伝え、校内研修等で実物投影機の実用性・使い方を伝えていく必要がある。一人の先生だけが良さを分かっても普及には至らない。学校全体として生徒の理解度を高めるための一つの方法として、実物投影機の活用が学校全体を変えていくのではないか。それは、先生方が『生徒に分かりやすく説明したい』『生徒に理解してもらいたい』『学力を身に付けてほしい』という思いは、みんなが共通して願っていることだからである。



実物投影機を活用した「理科総合B」の授業

校 外 研 修

「児童生徒、保護者会が変わるエンカウンター」 ～話して聞いて、笑顔あふれる雰囲気づくり～

保健・教育相談部 山 本 正 敏

I 日 時 平成24年8月17日（金）

10：00～16：00

II 場 所 秋田県総合教育センター

III 講義・演習内容

1 現代社会の保護者（大人）

- (1)モラル低下・個人主義の親
- (2)学校や教師への尊敬が欠如した親
- (3)権利意識の強い親
- (4)ストレスのはけ口を求める親

2 現代の学校事情

- (1)「教育改革」の推進
- (2)教職員の不祥事
- (3)問題への対応不足

3 保護者との適切な関係作りをするために

- (1)協同作業のパートナー
- (2)保護者の思いをアセスメント
- (3)日常における信頼関係の構築

4 積極的・開発的な保護者対応

構成的グループエンカウンター（SGE）
の活用

- (1)保護者が教師と共に育つ
- (2)自己開示できる教師に
- (3)SGEを生かした保護者会

5 学校生活の中のエンカウンター

- (1)HR活動・学校行事
- (2)SGEの原理

①「構成的」

- ア. 時間的 イ. 内容的
- ウ. グループサイズ エ. ルール

②「グループ」=集団

- ア. 他者との比較から、新しい気づき
(洞察)を得る。
- イ. 觀察学習（模倣）ができる。
- ウ. 他人の目を通して自分についての

フィードバックがある。

エ. 人間関係におけるスキル訓練ができる。

③「エンカウンター」=出会うこと

ア. 物理的な出会い

=他の人と初めての出会い。知人の
中の知らなかった面との出会い。

イ. 心理的な出会い

=未知なる自分との出会い。他の人
と共に新しい体験をし、新しい気
づきがある。

6 SGEの進め方

(1)手順

- ①インストラクション（導入）
- ②エクササイズ（課題）
- ③シェアリング（わかつちあい）
- ④介入（インターベンション）

(2)ルール

「自己開示」「守秘義務」「今、この自
分になりきる」「多くの人とエンカウンター
する」「他人の行動を変えようとしない」
「パスする自由」などの基本的なルールに
よって進められる。

7 まとめ

東京都杉並区立天沼中学校校長である藤川
章先生による講座であった。藤川先生は、日
本教育カウンセリング学会の常任理事も務め
ており、講義はもとより体験に基づくたくさ
んの演習を紹介・実践していただいた。

学校における生徒・保護者・教師の3者間
における6通りの人間関係を構築するためには、表面的な社交辞令ではなく、自己開示が
絶対に必要である。また、SGEは「自己開
示に始まり自己開示に終わる」ということを

強調して話されていました。自分に関する事実・価値観・感情をしっかりと相手に伝えることが重要であるということであった。

高めあう、支え合う、信頼しあう、認め合う、という段階を踏んで、初めて「理解し合う」ことができる。そのきっかけとしてSGEは効果的であり、保護者のように定期的にコミュニケーションをとることができない相手であれば、その効果はさらに期待できる。コミュニケーションを構築することで、様々な問題を未然に防ぐことにつながったり、問題解決にそれほど苦労することがなくなるということであった。

今回の演習では、講師の先生がリーダーとなり、絶妙な演技力で実践方法を示して頂いたおかげで、演習はスムーズに進んでいた。学校で取り入れるとなれば、課題は考えられるが、一定の効果はあるものと考えられる。

【参考文献】

- 『エンカウンターで学級が変わる』
國分康孝（図書文化）
- 『構成的グループエンカウンター辞典』
國分康孝（図書文化）
- 『保護者との対応』『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書10』（図書文化）
- 『エンカウンターで保護者会が変わる』
國分康孝・藤川章他（図書文化）
- 『イチャモン研究会 学校と保護者のいい関係づくりへ』
小野田正利（ミネルヴェ書房）

平成24年度第1回校内職員研修会（概要）

ドコモ「ケータイ安全教室」 ～子どもをトラブルから守るために～

講師：NTTドコモ「ケータイ安全教室」
インストラクター 鈴木 真理子 氏

日時：平成24年5月21日（月）

14:00～15:00

場所：秋田商業高校会議室

目的：「子どもを守る」という観点から「子どもとネット社会」の現状を理解し、指導者としてどのように指導すべきかを考える。

導をしていくことが大切。

○新聞記事より～小中生が不正アクセス ネットゲームなりすまし容疑

第1章 子どもたちとケータイ

① 広がるケータイの機能

○通話・メール・カメラ・電子マネー・ワンセグ・GPS機能等ますます高機能化し、子どもたちにとっても身近な存在となっている。

② 子どもたちのスキにつけこむ悪質な手口

○メールやサイトを通じて、子どもたちの好奇心につけこんでくる悪徳業者や悪意をもつた大人などもいる。

○家族間で使用のルールを決め、同時にケータイを安全に使うためのサービスや機能など、子どもを守る対策を考える。

③ 被害者にも加害者にもなる可能性がある

○ネットで悪口を書かれるなど子どもが被害にあう危険についてはもちろんだが、同時に誹謗中傷の書き込みや、チェーンメールの転送、違法ダウンロードによる著作権違法など、子ども自身が加害者になるケースも懸念される。

④ 子どもとケータイの実態

○インターネットをいつ、どこで、どのように利用しているのか子どもとしっかり話し合うことで、その実態を把握し、適切な指

第2章 メールがきっかけで起こるトラブル

① 迷惑メールとは

○受け取る側の同意なしで一方的に送られるもの。さまざまなタイプがあるが、これらの手口は、近年、悪質巧妙化している。

② メールによるトラブル①

○架空請求詐欺メール
○ワンクリック詐欺誘引メール
○フィッシング詐欺誘引メール
○出会い系サイト誘引メール
○販売系メール

③ 迷惑メールが届いてしまったら

○まず、迷惑メールが届いたらすぐ削除させる。また、迷ったときには「すぐ家族に相談する」というルールを作る。

④ メールによるトラブル②

○チェーンメール（テレビ番組を装うメール・不幸や恐怖のメール・善意につけこむメール）
○チェーンメールは内容にかかわらず、絶対に転送させない。またURLは不用意にクリックさせない。

第3章 インターネットをサイトを通じたトラブル

① インターネットにつながる機器

○パソコン・ケータイだけでなく携帯ゲーム機、テレビなどインターネットにつながるデジタル機器が増えている。

② スマートフォンとは

○パソコン並みの機能を持たせたケータイ末端の総称。

③ 「出会い系」によるトラブル

▼サイトに潜む「出会い系」の危険

○サイトなどを通じて他人と出会い系、その後、児童売春などに発展する事件が多発している。

○近頃、「なりすまし」という巧妙な手口の詐欺が増えている。

○相手が同性や子どもだと思って会ってしまうと犯罪に巻き込まれる可能性がある。絶対に子どもを見知らぬ人と会わせない。

▼サイトを通じてトラブルにあう子どもたち

○出会い系サイトの主な被害者は18才未満の児童。

○インターネットで知り合った人とは「絶対に会ってはいけない」と、子どもへの注意を徹底する必要がある。

▼出会い系サイト規制法

○出会い系サイトに18歳未満の児童が交際を目的とした書き込みをした場合、児童も处罚の対象となる。

▼出会い系サイトの被害から身を守る方法

○3つの“NO”

サイトを見ない！

見てしまったとしても書き込まない！

万が一利用してしまっても会わない！

○出会い系サイト意外の一般サイトでの犯罪被害が大きく目立っている。

○出会い系サイトはもちろん、ゲームやSNSなどのコミュニティサイトを通して知り合った人とは会わせない。

④ 書き込みによるトラブル

○インターネットでは常に監視の目があり、問題のある書き込みが発見されれば、「警察に通報されることもある」と子どもたち



に認識させる必要がある。

▼コミュニケーションツール例

○プロフ・SNS・ブログ・掲示板

▼個人情報漏洩、肖像権侵害などのトラブル

○インターネット上で、あまり詳しく自分のことを書いてしまうと、個人が推定できる場合があるので大変危険。

○うっかり友人の個人情報や写真を載せてしまうと、個人情報の漏洩や肖像権の侵害となる。

○個人や居場所が特定できるようなことは書かせない！載せさせない！

▼ブログ、掲示板での誹謗中傷

○不用意な書き込みで人を傷つけるなど、子どもが加害者にならないよう注意を促すとともに、被害者になっていないかの配慮も必要。

▼犯行予告、いたずら書き込み

○「威力業務妨害罪」「脅迫罪」等の犯罪になる可能性がある。

○子どもは軽い気持ちで書き込んでしまうので、十分に気をつけさせる。

▼インターネットは匿名ではない

○インターネットは匿名なので、誰が書き込んだのか分からぬという認識は間違い。

○書き込んだ先のコンピュータに残る記録である「ログ」は、通常は公開されないが、警察からの要請があれば、掲示板の運営会社などは「ログ」を提出し、書き込みを行った端末（パソコンやケータイ）を特定する

ことができる。

- ▼誹謗中傷や名誉毀損に係る関係法令
- 民法 損害賠償などが生じることがある！
- 刑法 逮捕されることもある！

第4章 トラブル防御方法

① ケータイのロック機能

- 暗証番号を設定しておけば、第三者が勝手に利用できず、他人にケータイを使われたり、保存している個人情報を覗かれるリスクが少なくなる。

② メールの受信／拒否設定

- 迷惑メールをサーバでブロックする。

- ①指定受信・指定拒否
- ②なりすまし対策

③ フィルタリング（アクセス制限）サービス

- 18歳未満の児童がケータイを利用する場合、保護者はフィルタリングサービスの利用について携帯電話事業者に申し出る義務がある。

- フィルタリングの制限対象となるサイトの主なカテゴリ：不法、主張、アダルト、セキュリティ、ギャンブル、出会い系、コミュニケーション（ウェブチャット、掲示板、I T掲示板）、成人嗜好、グロテスク、オカルト

▼フィルタリングサービスの方式

- ホワイトリスト方式=健全なサイトのみをリスト化し、それ以外は見られないようにする方式。



○ブラックリスト方式=有害サイトなどをリスト化し、それらのサイトを見られないようにする方式。

④ スマートフォンを安心して利用するために

- スマートフォン情報セキュリティ3か条
①OS（基本ソフト）を更新
②ウィルス対策ソフトの利用を確認
③アプリケーションの入手に注意

⑤ トラブル制御のポイント

- 防衛①受信／拒否設定やフィルタリングサービスを利用させる。
- 防衛②トラブルが発生した場合には、すぐに相談させる。

第5章 ケータイのルールとマナー

① 公共の場でのルールとマナー

- お店などで勝手に充電することは絶対にやめさせる。これは「電気窃盗」という犯罪。
- 電車やバスではマナーモードに設定したり、優先席付近では電源を切るなど、マナーを守らせる。

- 持ち込みや使用の制限など、学校で決められたケータイルールを守らせる。

- 病院の中など使用禁止の場所では、電子機器に影響が出る場合があるので、必ず電源を切らせる。

- 歩行中や自転車に乗りながらケータイを使うと注意が散漫になりとても危険。自転車に乗りながらのケータイ使用は法律で罰せられることがある。

- 閑静な場所では通話を控え、声の大きさなど十分に気をつけさせる。

② 著作権と肖像権

- 著作権は法律で定められている。
- 本や雑誌の無断撮影はやめさせる。
- 音楽や映像の違法ダウンロードはやめさせる。
- 人の写真的無断掲載はやめさせる。

第6章 ケータイと正しくつきあうために

- ① 親子でケータイについて話し合おう
 - ケータイの必要性、利用目的
 - インターネットの利用範囲、メールの使用範囲
 - ケータイ料金の上限額
 - プロフやSNS、ブログ、掲示板への書き込み
 - 学校でのケータイに関するルール
 - 公共の場で使用するときのルールとマナー
- ② 子どものケータイのルール
 - 子どもとの「ケータイルール」の認識のズレを再確認し、改めて家庭でのルール作りについて話し合おう。
- ③ ケータイに振り回されていませんか?
 - 子どもがケータイに振り回されていないか(仲間内のルールに縛られる子ども)、依存状態になっていないか常に気にかけるとともに、ケータイを使用する時間帯や場所などのルールを話し合って決める。
- ④ 使いすぎを防ぐために
 - 家族で話し合ってルールを決めよう。(友だちと長電話、音楽をダウンロード、インターネットゲームにはまった等)
 - 使用時間を制限したり、上限額を設定する。
- ⑤ ケータイをなくしてしまったら
 - すぐに家族や携帯電話事業者などへ報告させる。
 - 遠隔ロック機能
 - ①携帯電話会社に電話し、契約者本人を確認の上、利用一時停止か、もしくは遠隔操作でケータイをロック可能
 - ②パソコンから指定サイトにログインして自分でロック可能
- ⑥ ケータイと正しくつきあうためのポイント
 - 使いすぎへの対応
 - 紛失時の対応
 - 親子での話し合い
- ⑦ ケータイで被害者・加害者にならないために

▼加害者にならないためのルール

- チェーンメールは絶対に転送させない
- インターネット上に個人情報や顔写真を公開させない
- サイトに書き込むときは相手の気持ちを考えさせる
- 犯行予告などは絶対に書き込ませない。
- 購入前の本や雑誌の記事などを撮影させない。
- 違法サイトから音楽や映像をダウンロードさせない。
- 友達や芸能人の写真などを許可なくブログなどに載せさせない。
- ▼トラブルに巻き込まれないために
- 受信／拒否設定やフィルタリング（アクセス制限）サービスなどの安心安全のための機能やサービスを活用させる。
- サイトを通じて知り合った人と会わせない。
- 出会い系サイトは、見させない！書き込ませない！そして、絶対に会わせない！
- 身に覚えのないメールは無視して絶対に返信させない、URLにアクセスさせない。
- ケータイを持つときは「責任」を持たせよう。

第7章 災害時のケータイ活用法

- ① ケータイは家族と連絡が取り合える便利なツール
 - ①GPS機能
 - ②災害用伝言板
 - ③SNSやWebメール
- 災害時に備え、家族と連絡が取り合えるよう、ケータイを活用するためのルールを家族で作っておこう。
- ② 万が一のために覚えよう
 - ①まず身の安全を確保する
 - ②自分の安否は「災害用伝言板」で伝える
 - ③不急の電話は控える
- ③ 非常時になぜ電話を控えるのか
 - 災害が発生した際には、安否確認などの電

話が殺到し、電話がつながりにくくなる。
消防・救急・警察などの災害時に優先すべき通話のため、電話は控えよう。

④ 緊急速報「エリアメール」

○携帯電話各社により、ケータイへ緊急地震速報の配信が行われている。警報音が聞こえたら安全な場所へ避難しよう。

(以下、5～7は別冊『子どもをトラブルから守るために ケータイ安全教室 保護者・教員編』を参照のこと)

⑤ NTTドコモの災害安否確認

⑥ 「災害用伝言板」「災害用音声お届けサービス」体験サービス

⑦ 災害用伝言板の利用方法

以上、各章の詳細・資料等については、別冊『子どもをトラブルから守るために ケータイ安全教室 保護者・教員編』を参照してください。

質疑応答

小玉教頭：違法ダウンロードは特定できるのか。
処罰された例はあるのか。

回答：線引きは難しいが、大量に意図的になされた場合は、警察の判断によって捜査が入ることがある。調査に入ると、ログで元をたどられ特定される。

平成24年度第2回校内職員研修会（概要）

「キャリア教育を推進する理由」

講師：上越教育大学大学院准教授
白木みどり氏

日時：平成24年7月11日（水）

15:00～16:50

場所：秋田商業高校会議室

キャリア教育の専門家として全国各地で講演活動を行っている上越教育大学大学院准教授白木みどり先生を講師に迎え、「キャリア教育を推進する理由」をテーマに講演していただいた。

キャリア教育とは何か、今なぜキャリア教育が必要とされているのか、学校として何をすればいいのかなど、綿密なデータ分析に基づきつつ、グローバルな視点からキャリア教育の必要性が語られた。

参加者（58名）

本校職員46名の他、市教委1名、保護者4名、勝平小学校2名、勝平中学校1名、及び、「商業科教員指導力向上研修会」の商業科教員4名。



キャリア教育の理論と実践 その意義と可能性

▼「人はなぜ働くか」

子どもたちはこの間に対して経済的な視点で収束してしまいがちである。一つの商品も様々

な人の手によって消費者に送り届けられている。様々な人の手によって社会が成り立っている。しかし豊かな現代に生きている子どもたちはその実感がなく、それを考える機会を持っていない。

▼「生きる力」…「知・徳・体のバランスの取れた力」

前回の学習指導要領改訂で言及されたが、具体的な実践に関しては曖昧だった。「生きる力」をはぐくむ教育は全人的な教育であり、道徳教育の4つの柱にマッチする視点である。これらの子どもたちは、他者・自然・社会との関わりが不可欠。

▼「生きづらいと感じている若者たち」

青年期後期は社会批判の思考が発達していく時期。若者たちは常に社会を敏感に感じ取り、そこに何かしらの不満を持つ。物質的に恵まれている現代、心理的に安定していない若者が増えてきている。

○核家族、少子化の中の孤立化

○社会関係資本の格差による不安や浮遊感

○価値の多様化による自己の基準となる価値観形成の困難さ

→現在高校においても道徳教育が重視されてきている。小中学校でも「心の教育」の重要性が叫ばれてきた。今、道徳の授業は道徳的価値に対して子どもたちが議論をする時間。多様な価値に出会う時間。多様な価値に出会う時、自己の価値観の

基準を再構築していく。様々な価値に対する思考経験の有無は子どもたちの成長に大きな関わりがある

- 現実社会についての知識と体験の不足
- 知識基盤社会におけるソフトパワー、イノベーション創出等の需要の高度化
- 選択肢と選択時期の柔軟化と長期化の容認に伴うモラトリアム傾向
- 産業構造の急速な変化及び職業の多様化と雇用の流動化 等

▼高学歴化

近年4年制大学への進学率が上昇しているが、その一方で若年層失業率は高く経緯し、早期離職率は上昇している。一つのことにつき腰を据えて取り組めない、人間関係を上手く作れない、という2つの要因が大きいと考えられる。高学歴者の間では就職難が進んでいる一方で、労働力不足となっている職種もあり、それを埋めているのは外国人労働力である。

同時に引きこもりやニートといった問題は国の存亡に関わる危機的状況である。

▼PISAの調査結果から

日本は学力上位国でありながら、自信・興味・将来把握指標が全て最低値。入試が勉強の目的となってきた。日本の子どもたちは自己評価基準が高い、厳しいともいえる。また価値観の問題として、責任を負うことはできるだけ避けたい、努力や試練が必要なことはやりたくないという傾向もうかがえる

▼「教育基本法」(平成18年12月改訂)

- 第二条 二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自立の精神を養うとともに、職業および生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと
- 三 …主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと

詳細に示された二条の中でも、キャリア教育に深く関わる部分が上記の部分であり、教育の

指針が具体的に示されたと言える。

今回注目されるのは「個人の価値の尊重」が明記されている点で、社会の成熟を示している。同時に「社会」という言葉も非常に重視されている。個人の能力を伸ばしつつ、社会形成にその力を発揮していくことが大切にされている。

▼教育振興基本計画（閣議決定）（平成20年7月）

この中でキャリア教育が重視され、翌年に出た高等学校学習指導要領で初めてキャリア教育という言葉が登場する

その1 「社会全体での教育の向上」…地域社会の力を借りて子どもたちを育てていく

その2 「個性を尊重しつつ能力を伸ばし、個人として、社会の一員として生きる基盤を育てる」

教育的課題解決のためには情報の循環が必要になる。学校の実践を可視化して、P D C Aサイクルによって評価していく必要がある。

▼「今、なぜキャリア教育なのか？」

「キャリア教育とは？」

キャリア=わだち。人が成長していく過程の中で身につけた知識や実践した体験など、累積してきたもの全てが「キャリア」と定義されている。「キャリア教育とは」その「キャリア」概念に基づき児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリア形成をしていくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育をいう。決して職業や仕事に直結、特化したものではない。

▼中央教育審議会（答申）平成23年1月31日

「望ましい職業観・勤労観を育む教育」からキャリア教育の内容を修正、新たに定義した。

「キャリア教育とは、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」

それは学習指導要領の小中学校道徳の目標や

総学の目標にも反映された。

総学は時間数が明示され、領域として重視されている。体験、探求、課題解決等の数値化できない能力でありそこを強化していく。

▼キャリア教育の意義

○キャリア教育は、一人一人のキャリア発達や個としての自立を促す視点から、教育の在り方を幅広く見直し、改革していくための理念と方向性を示す。

→全人的教育をキャリア教育をもって具現化していくこと。従来から様々な場面で行ってきたことを意図的にやっていくこと。

○キャリア教育は、キャリアが子どもたちの発達段階やその発達課題の達成と深く関わりながら段階を追って発達することを踏まえ、子どもたちの全人的な成長・発達を支援する視点に立った取り組みを推進する。

→孤立化し、多様な人間関係が不足し、現実との接点が足りない子どもたちやギャップを乗り越えられない子どもたちに、学校教育の枠組みの中で支援をしていく必要がある。それぞれの段階において、発達の視点を持って支援していく工夫をしなければならない。小中高での連携など、自由で柔軟な発想が求められている。

○キャリア教育は、子どもたちのキャリア発達を支援する観点に立って各領域の関連する諸活動を体系化し計画的、組織的に実施することができるよう、各学校の教育課程編成の在り方が見直される。

→大きな一つのテーマに対して各教科が様々なアプローチをすることができる。学年で、学校全体で取り組むことも可能。

→人と人とのコミュニケーションなど、可視化できない、数値化できない能力こそ今求められている力である。共有する空間から何を読み取るのか、それが言語とは別のコミュニケーション能力であり、人間関係形成に結びつく。「もう一度教育の原点に返る」こと、社会生

活を営む上で人として身につけておかなければならぬ力を育てていくことこそがキャリア教育だ。

▼「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の構成

中教審では、かつて出された4領域8能力（文科省）を踏まえて、新たな構成図を提出した。キャリア教育では特に基礎的・汎用的能力を育てることを重視して欲しい。

○基礎的・汎用的能力

- ①人間関係形成・社会形成能力
- ②自己理解・自己管理能力
- ③課題対応能力
- ④キャリアプランニング能力

→発達段階にともなって「現実」を知り、「自己」を知ることを丁寧に行わせなければならない。自己理解を深化させ「夢」と「現実」の折り合いのつけ方を学ばせることが必要。中学校では「暫定的」進路選択を行うが、高等学校は「現実に即した」進路選択を行う準備期間。しっかりと社会に移行し自立していく子どもたちに育て上げなければならない

○勤労観・職業観等の価値観

→能力育成を支えるのは価値観。なぜそれをするのかという「原理」を問う姿勢を大事にすべきだ。これまで日本の教育は価値観の教育をないがしろにし、原理を追究してこなかった。もう一度立ち返る必要がある

▼小学校の発達課題

○低学年のキャリア発達課題

- ①小学校生活に適応する
- ②身の回りの事象への関心を高める
- ③自分の好きなことを見つけてのびのびと活動する。

○中学年のキャリア発達課題

- ①友だちと協力して活動する中でかかわりを深める。
- ②自分の持ち味を發揮し、役割を自覚する。

○高学年のキャリア発達課題

- ①自分の役割や責任を果たし役立つ喜びを得する。
 - ②集団の中で自己を生かす
 - ③社会と自己のかかわりから、自らの夢や希望をふくらませる。
- それを受け中学校では暫定的将来選択をする。それを受け取るのが高等学校であり、さらにそれを深化させ具体的なものにしていく役割がある。

▼キャリア教育がめざすもの

- 教育改革の理念と方向性を示す
 - 子どもたちの「発達」を支援する
 - 教育課程の改善を促す
- ## ▼キャリア教育の方向性
- 一人一人のキャリア発達の支援
 - 「働くこと」への関心・意欲の高揚と学習意欲の向上
 - 職業人としての資質・能力を高める指導の充実
 - 自立意識の涵養と豊かな人間性の育成
- カリキュラムも総合的に見直しを。全ての教員が鳥瞰的な視点で学校教育を見直し、さまざまな発想、アイディアを生かして企画して欲しい。

▼キャリア教育推進のための方策

- 「能力・態度」の育成を軸とした学習プログラムの開発
 - 教育課程の位置付けとその工夫
 - 体験学習等の活用
 - 社会や経済の仕組みについての現実的理解の促進等
 - 多様で幅広い他者との人間関係の構築
- ## ▼効果的な授業づくりのために
- キャリア教育についての理解
 - 意図的、系統的な計画（全体計画・年間指導計画）
 - 課題発見・解決への意欲 指導の工夫
 - プログラム開発運営能力（他領域との関連重視）

○カウンセリングプロセスの理解と援助

→進路相談（キャリアカウンセリング）の充実が求められる。入学時から系統的、計画的に進路相談の時間を設けるべき。

▼キャリア教育推進のための条件整備

- 教員の資質の向上と専門的能力を要する教員の養成

○保護者との連携の推進

→保護者にも役割を担ってもらう。

○学校外の教育資源活用にかかるシステム作り

○関係機関等の連携と社会全体の理解の促進

→行政・商工会議所・ロータリークラブ・ライオンズクラブ・N P O・ボランティア組織などの他団体を巻き込んで、社会全体と積極的に連携する意思表示をする。

▼これからの教育の視点

○個の将来への対応

○超高度情報社会への対応

○高齢社会への対応

○環境問題への対応

○国際社会への対応

○伝統文化遺産の継承

→教育基本法の改正に始まる今回の大々的な教育改革は、国力が脆弱化してきている我が国の将来に向けた教育改革である。教育は「社会形成の最前線」であり、社会を形成していく上で最もダイレクトに影響するもの。もう一度私たち自身が教職というものの「職業観」を問い合わせ直し、原点に返ってグローバル社会の中の日本の存在、立ち位置を真剣に問わなければならない。長い年月をかけて培ってきた日本文化の中には、語り継がなければならぬ精神文化、思想がある。その価値観を真剣に問い合わせ直さなければならない。日本が世界に発信してそれを強みにし、誇りにできるものが必ず残っている。長い歴史の中に根付いてきたものを世界に発信していくことが日本の立ち位置につながる。そういう意味でキャリア教育の指針、意義を理解して日々の実践につなげていって欲しい。秋商はキャリア教

育をしっかりと受け止め大事にしてきている。伝統的に受け継いできたものをさらに新しいものに作り替え、新しいキャリア教育の視点で実践しようとしているその姿勢を大切にして欲しいと願っている。

質疑応答

那須先生：卒業後の生徒をフォローしていく必要はあるのか、そのような実践をしている学校があるのか、よい実践例があれば教えて欲しい。

回答：自分がなぜ就活の面接で落ちたのか理解できない学生がいる。プライドが高く、現実を知つて落ち込んだりしている。まさに小学校段階からしっかりと育てていかなければならぬ。厳しさも必要。何のために進路を選択するのか、その先の進路はどうするのか、先の現実までしっかりと考え方させなければならない。生徒を客観的に見られるのが教師という立場。卒業後のフォローに関しては、高校生の進路追跡調査の事例はまだあがつてきていません。前述の大分県立日田三隈高校で行われている「30歳のレポート」(卒業生全員に30歳でレポートを提出するように課している)は、卒業生と学校、在校生がつながりを持つ数少ない取り組みと言える。

木村先生：資料(生きづらいと感じる若者たち)の中で、「体験の不足」とあるが、どの年代と比較してそのようなことが言えるのか。

回答：体験の不足はどの年代からと明確には言えない。高度成長期から社会が豊かになって徐々に目に見えない形で進行してきたと理解していただきたい。ただ「知識」に関しては、高度成長期には知識の詰め込みを行つてきている。そして知識と体験のバランスが現代はうまくいっていないと感じる。知識が全てという価値観を持った若者が増えてきている。

参加者の感想

◎「キャリア教育とは、教育の原点に戻ること」という言葉に、日頃の指導の在り方について、改めて意義づけをしなければならないと思いま

した。授業において実践するには、教科間の連携も必要であるとのことで、キャリア教育を行う上で、全体をコーディネイトする部署が活動しなければならないことを感じました。卒業後のことを見据えた指導という点から見ると、学校全体として、入試の在り方や進路指導の在り方について改善していかなければならない点があると思います。

◎「必要な力」を身につけさせること。一人一人をよく観察して、適性を見抜き、生徒の興味関心を大切にしながら指導することが重要だと感じた。

◎最後の方に話された、日本の精神文化についてのお話が興味深いと思いました。

◎「キャリア教育」の定義から意義、方法論まで、全体像を学ぶことができた。

◎自己のあり方、生き方を考えることのできる生徒育成のためのメソッドを改めて考え直すいい機会となった。商業高校という本校の特性と、教科連携、地域連携をより深化させていくことができるようなシステム作りが大切と考える。

◎日々の現実の指導の中で忘れてしまっていた「教育」の根本的なものに気付かせていただきました。社会形成の最前線として未来の社会を作っていく子ども達を育てていきたいと思いました。

◎基本的に、教職の方の為だったと思うが、家庭教育にもまた重要な内容だったと思いました。



平成24年度第3回校内職員研修会（概要）

「緊急時の救急対応について」

講師：秋田市消防本部秋田消防署
救急担当 佐藤喜広氏

日時：平成24年12月10日（月）
場所：秋田商業高校講堂

東日本大震災の経験から

大規模火災の前では人間は無力である。救助の際には、最も大切なものは自分の命であることを肝に命じて行動を起こして欲しい、自分の命があつてこそ他の人の救助である。
救急事故はいつでも、どこでも、誰にでも起こり得る。以下のケースから救急対応を考える

ケース1

登校途中、生徒が乗用車と接触し、出血した。どうするか？

対応：傷口をハンカチやタオルで直接圧迫して止血すること。その際は感染症に気をつける。特に、体液、嘔吐物、血液には絶対に触らないこと。

ケース2

柔道の練習中、誤って右腕が変形した場合

対応：固定する。固定とは、傷病者にとって一番楽な姿勢（位置）をとることである。素人判断で変形した箇所を整復してはいけない。

ケース3

朝礼中、突然倒れて痙攣した。

対応：痙攣の性状を観察する。無理に押さえ



つけたりせず、痙攣時間や意識の有無などを冷静に観察する。もしも反応が無ければ気道の確保をする。

ケース 過換気症候群

対応：本来は、紙袋やビニール袋はあまり必要ない。声かけや呼吸法の指導を行う。

ケース ガラスが身体に刺さった時

対応：刺さった状態のままにして救急要請する。決して素人が抜かないこと。

◎救急車到着までに確認してほしいことは以下の通りである

- ・患者情報（氏名・生年月日・住所）
- ・病院既往歴
- ・事故発生時の起序や容体変化等

◎担架が無い場合の運搬法

通常は竹竿2本と毛布で担架を作るが、竹竿は無い場合がほとんどである。毛布があれば、四隅を中央部に向かって丸めて固定することで、簡単に運搬が可能である。



勝平中学校との学校間連携の実施について

研修部

1 ねらい

勝平小学校・勝平中学校・秋田商業高校・秋田きらり支援学校が互いに連携し、多様な教育活動や課題解決に取り組むことで、長期間を見通した計画的・継続的な支援のあり方を模索し、児童・生徒の学習方法の確立や学習内容の定着、生活習慣の形成に努める。（「平成24年度 小・中・高・特別支援学校連携協議会」資料より）

2 中高連携の取り組み

- ①本校教員による中学校での交流授業（3年生対象、普通教科の授業）
- ②中学生の高校授業体験（2年生対象、商業科の授業）

3 今年度、勝平中学校から出された要望

- ①3年生に対して普通教科・高校入門編の授業を実施してもらいたい。なお、全クラス（4クラス）で行って欲しい。
- ②2年生に対して、商業科目の授業体験をさせてもらいたい。（例年通り）

4 今年度の計画

- ①11月30日（金）14：30～15：20 勝平中学校にて3年生を対象に、英語・数学・社会（地歴公民）・国語の4教科実施
- ②2月14日（木）本校にて、勝平中学校2年生を対象に、商業科の体験授業を実施

5 実践

①中高連携授業 その1

勝平中学校3年生に対する出張授業

- 1) 日時平成24年11月30日（金） 14：30～15：20
- 2) 内容

No.	教科 コース名	内 容	用意するもの	希望人数 (定員)	使用教室	担当
1	国 語	伝えること（国語表現）	ノート・筆記用具	男子13名 女子19名 32名	3年1組	太田 直
2	数 学	いろいろ分割しながら面積を求めよう（区分求積法）	ノート・筆記用具 電卓	男子25名 女子 8名 33名	3年2組	福田 直人
3	英 語	英語の歌を聴く	ノート・筆記用具 辞書	男子15名 女子15名 30名	3年3組	舟木 志保 他1名
4	社 会 (世界史)	産業革命	ノート・筆記用具	男子16名 女子13名 29名	3年4組	泉 広宣

◎連携授業関係職員

数 学 科	福田 直人・船山 毅・木村実樹夫
英 語 科	舟木 志保 他1名
地歴公民科	泉 広宣
国 語 科	太田 直・奥山 桃子・大関 由理

資料①

数学科 学習指導案

指導者 福田直人

- 1. 授業クラス** 勝平中学校3年生
2. 指導内容 区分求積法の導入について
3. 指導目標
 - ①高校の授業内容を中学生にも理解させ、興味・関心を持たせる
 - ②分割する事の意味を考えさせる
 - ③近似値について考えさせる
 - ④感覚的な理解を養う**4. 指導の計画** 一斉指導とT・Tを活用し、生徒が活動的に授業に参加させる。
5. 学習展開

過程	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 10 分	1. 近似値について 2. 面積を求める 3. 面積の区分求積法について	おおよその値から正確な値の関係についての説明 公式を用いて求めることが出来る面積について 変形した形の面積を求める方法を考える	公式の確認をする 分割することのイメージを掴ませる	分割することが理解できているか。
展開 30 分	1. $y = x$, x軸の区間 $[1, 0]$ との囲まれた面積を求める 2. $y = x^2$, x軸の区間 $[1, 0]$ との囲まれた面積を求めてみる 3. $y = x^2$, x軸の区間 $[1, 0]$ において、分割を考え、分割した長方形の面積の和を求める 4. 面積を発表させる 5. 細分化した例を紹介する 6. 面積がいくらに収束するか予想させる。	グラフから直角三角形の面積である事に気がつかせ、面積を求めさせる 面積をどのように求めるか考えさせる。 2分割、5分割については板書し、10分割については、各自で計算させる。 20分割についても計算させる。 10・20分割分の結果について発表してもらう。 更に細分化した例を挙げて、面積の変化を考えさせる。 最終的に値がいくらになるのか予想させ、発表させる。	$S = 1/2 = 0.5$ であることを意識させる。 $y = x$ と $y = x^2$ 比較させ、 $y = x$ よりも面積が小さくなる事を認識させる。 xの値、yの値を認識させ長方形の面積を求めさせる。 計算が細かくなるので、いくつかのグループ単位で求めさせる。	面積を求めることが出来るか 分割する事をイメージできるか ひとつひとつの長方形の面積を求める事ができるか イメージをする事ができるか $1/3(0.333\cdots)$ と予想できるか
終末 10 分	1. 面積 $S = 1/3$ であることを示し、積分記号を紹介する 2. まとめ	高校で学習する事をする。 日常的に使われている、数学の話をする。		

国語(国語表現)科 学習指導案

指導者 太田 直

テーマ 「伝えること」

目標 「伝える」という行為を、様々な角度からとらえる。

〈目標設定の詳細〉

高校ではこれまで学習してきた内容を活かし、論理的に文を組み立て、効果的に表現していくことが求められる。学習指導要領・高・国表にあるように、(新たに加えられた)「想像力」を伸ばすためにも、一度「考える」という態度を持って授業に臨んで欲しいという点から設定した目標である。「伝え合う力」を一層高めていくために、生徒それぞれの感性が目に見える学習にする。

1 グループ分け (アイスブレイクー緊張を解く)

※班長の1分間スピーチ

2 説明 伝えることの意義

3 「サイレントパズル」(グループワーク)

目的 相手をよく見る。

立ち止まって考える。

自分の考え（固定観念）を一度壊してみる。

4 「いいとこ探し」(グループワーク)

目的 「いいとこ」を表現する。

→自分なりの視点で自分なりの表現力で、あるテーマに基づいて表る。

5 1分間スピーチ (グループワーク)

目的 「話すこと」にはある程度の準備が必要。

4で行った他者の観点を活用してスピーチの材料とする

→発想力・想像力

資料③

社会（地歴公民）科 学習指導案

指導者：泉 広宣

1 学習内容：産業革命（世界史）

2 学習目標：

- ①高校の地歴公民科の内容を紹介する。
- ②産業革命がイギリスで始まった原因を考える。
- ③産業革命が「現代社会」の出発点となったことを理解する。
- ④プリント・板書カード・グラフ写真資料に慣れる。

3 学習展開

（1）産業革命～農業中心の社会から工業社会への転換～によって、どんな変化があるか考えてみよう。

- ・便利になった。生活が豊かになった
 - ・公害が増えた。景気がよくなったり悪くなったりするようになつた
- 【人口の急増など「現代社会」がつくられたきっかけであることを指摘する】

（2）産業革命がイギリスで始まった理由を5つのMから始まる単語で考える。

- ① Money ② Market ③ Man ④ Manufacture ⑤ Material

（資本） （市場） （労働者） （工場制手工業） （原料）

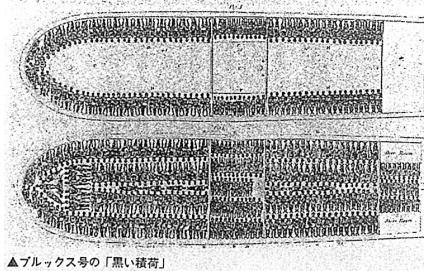
（3）なぜ、イギリスに①Moneyが蓄積されたのだろうか。

- ・（植民地）をめぐる戦いに勝利して海上貿易を支配した。
- ・大西洋三角貿易について板書カードを利用して説明する。
- ・白い積荷と黒い積荷について写真やグラフで興味を引き、説明する。

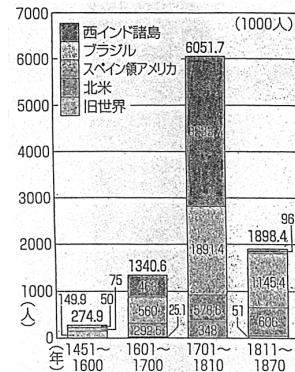
この人はどこの国？



何を描いた絵かな？



どのくらいの人が？



（4）綿花と石炭という⑤Materialの存在

- ・産業革命は、綿織物からは始まった。
- ・どこでも工場が建てられ、どこからでも輸入輸出できる蒸気機関の発明

（5）産業革命の影響

- ・都市の新しい階級の出現（労働者）
- ・国際的な格差の出現
 - （イギリス＝世界の工場、欧米各国＝後発資本主義国、）
 - （ラテンアメリカ、アフリカ＋東欧）そして、アジアへの侵略開始！

（6）おわりに

- ・高校の社会科（地歴公民科）に必要なこと。・原因と結果を考える。

●中学生の感想

〈国語〉

- ・話さずに何かを協力してやるというのはとても難しいことなんだなと思いました。相手のことを考えるというのは簡単だけれども大切だとわかりました。授業をやっていてだんだん楽しくなれたし、わかりやすかったのでよかったです。高校の授業も楽しくやれればいいなと思いました。
- ・班になって話し合い、楽しい授業でした。「思」「想」の違いを習いました。どちらも「おもう」なのですが、意味が違うようです。僕は秋田商業高校に行きたいなと考えています。今日のように楽しい学習ができるように入学に向けて頑張りたいです。
- ・自分の気持ちを相手に伝える難しさやこつなどを学びました。そのこつというのは国語だけじゃなく、これから的生活にも生かせることがだったので今日の授業はとてもいい経験になりました。また、高校の授業の雰囲気やイメージもつかめましたし、入試への意欲を高めることもできたので良かったです。



〈数学〉

- ・授業内容は高校3年生で習う「区分求積法」でした。 $y = x^2$ の関数と x 軸の間にできる図形の面積を求めましたが、細かい計算に頭の中が混乱しました。しかし、すごくためになる授業でした。「分割する」という発想を今後の数学で生かせると思いました。
- ・高校3年生で学ぶと言っていたけれど、今の知識でも十分やることができ、中学校の勉強

がとても大事だと思いました。数学において、見通しを立てることが大切だと先生は言っていて、普段の生活でも大切だと思いました。

・高校3年生の問題を中学生の知識で解けるということがわかりました。中学生の知識が高校で役に立つことが証明されたので中学校の勉強を大切にしていきたいと思います。



〈英語〉

- ・中学校にいるだけではわからない高校の雰囲気を味わうことができました。より一層、高校に行きたいという気持ちが高まりました。これからこの気持ちを忘れずに勉強に取り組みたいと思います。
- ・僕はとても英語が好きなので今回の授業が楽しみでした。外国（英語）の曲も聞きましたが、リスニングの練習になったので良かったです。脚韻や頭韻を用いていたのでおもしろいなと思いました。いつも通りの授業時間でしたが、とても短く感じました。また機会があれば授業を受けたいです。



〈社会（世界史）〉

- ・今日は本当に貴重な体験でした。少し前から高校の授業というのはどのようなものなのか知りたいなと思っていました。実際授業してみると、「どんどん進むな」と感じました。先生も息を吸う暇もなくしゃべっていて「よくしゃべるな」と思いました。中学校だとある程度間があるのですが、高校は2秒も間がない感じでした。今日を生かして高校でもがんばります。
- ・中学校の授業よりも内容を詳しくやっていて面白かったし、とてもためになりました。授業は中学校よりもスピードが速く、なぜそうなったのかなどの理由や原因をしっかりと理解することが大切だと先生が言っていたので、そのことを高校では生かせるようにしたいと思いました。
- ・少しレベルが高く、いまいちついていけませんでした。でも産業革命について少し詳しくわかったので良かったです。歴史は暗記ではないと先生は言っていて、より深く理解するのはとてもたいへんだなあとと思いました。



②中高連携授業 その2

勝平中学校2年生に対する商業科目体験授業

1) 日 時 平成25年2月14日(木) 午前10時~11時40分

2) 参 加 勝平中学校2年生 117名、引率教員 6名

3) 日 程

時 間	内 容		備 考	
~ 9:50	秋田商業高校到着、生徒昇降口で内履きに履き替えて 84名は、総合情報処理室へ 40名は、プログラミング室へ		各自が準備した 下足用ビニール 袋に入れて持参 補助員生徒誘導	1校時
10:00~10:15	総合情報処理室	プログラミング室	補助員 3年C D組	2校時
	開会行事(進行:藤中) 1 あいさつ 石上教頭 2 日程説明	開会行事(進行:大堤) 1 あいさつ 小玉教頭 2 日程説明		
10:15~11:30	授業体験(企業会計を学ぶ) 担当 櫻庭、佐藤俊		授業体験(企業会計を学ぶ) 担当 石田、佐藤大	3校時
11:30~11:40	閉会行事(進行:藤中) 1 あいさつ 石上教頭 2 勝平中生徒挨拶 ※閉会行事終了後アンケート	閉会行事(進行:大堤) 1 あいさつ 小玉教頭 2 勝平中生徒挨拶 ※閉会行事終了後アンケート		
11:40~	勝平中学校へ移動			

4) 内 容

「企業会計を学ぶ」と題し、ハンバーガーチェーン店2社の経営情報(貸借対照表と損益計算書)を分析し、収益性(売上に占める利益の割合等)や安全性(資産に対する借金の割合等)の状況を判断する。 **資料④**

営業力がどう調なまつち？

◆日本マクドナルドホールディングス株式会社

【会社概要】設立 1971年（昭和46年）従業員数 3,128人

店舗数 3,200店舗（2011年12月現在）

【メニュー】レギュラーメニュー16種類

てりやきマックバーガー

マックフライドポテト

ビッグマック

チキンマックナゲット

マックフライドポテト

チキンマックナゲット

◆株式会社モスフードサービス

直感で良いと思うのは？



【会社概要】設立 1972年（昭和47年）従業員数 1,170人

店舗数 1,422店舗（2012年1月現在）

【メニュー】レギュラーメニュー31種類

モスチーズバーガー

モスライスバーガー

モスチーズチルソバ

モスチキン

モスチーズチリソバ

【財務情報】		【財務情報】	
連続損益計算書(要旨)	連続資借対照表(要旨)	連続損益計算書(要旨)	連続資借対照表(要旨)
2011年 売上高	2012年 売上高	2011年 売上高	2012年 売上高
323,238	301,732	341,938	295,535
固定資産	流動資産	固定資産	流動資産
63,863	60,204	51,244	55,020
販売費及び一般管理費	販売費及び一般管理費	販売費及び一般管理費	販売費及び一般管理費
37,100	33,231	85,382	84,555
営業外収益	営業外収益	営業外収益	営業外収益
1,233	1,220	69,297	61,292
特別利益	特別利益	特別利益	特別利益
8,657	12,563	4,936	7,712
当期純利益	当期純利益	当期純利益	当期純利益
8,651	12,563	74,233	69,004
純資産合計	純資産合計	純資産合計	純資産合計
85,282	84,555	110,49	104,9
負債純資産合計	負債純資産合計	負債純資産合計	負債純資産合計
85,282	84,555	85,282	84,555

【財務諸表分析】

①収益性の分析…企業の目的は顧客（利益）を得ることであるため、どの立場でいるかを調べる。

売上高売上純利益率…1個の商品からいくらの儲けが出ているかを調べる。

売上高販売費及び一般管理費…販売員の人工費やマーシャルなどの広告宣伝費の割合を調べる。

総収益当期純利益率…企業の全体的・総合的な収益性を調べる。

売上高売上純利益率	売上高販売費及び一般管理費率	総収益当期純利益率	総収益当期純利益率
%	%	%	%

収益性が良いのは、（ ）である。



②安全性の分析…企業をこれから先、安全に続けていくことができるかどうかを調べる。

流動比率…1年内に返済しなければならない負債（借金等）の返済能力を調べる。（短期的な安全性）

総資産負債比率…将来、返済しなければならない負債（借金等）の返済能力を調べる。（長期的な安全性）

純資産負債比率…将来、返済しなければならない負債と返済する必要がない純資産のバランスを調べる。

流動比率	純資産負債比率	総資産負債比率	純資產負債比率
%	%	%	%

安全性が良いのは、（ ）である。



総合的にみると（ ）の方が、経営が好調である。



中学生の感想

- 計算がすごく苦手だったので、はじめは心配でしたが、先生の丁寧な指導と生徒の皆さんのおかげで、とてもよくわかりました。進学や進路に役立てていきます。
- 専門的な用語がたくさん出てきて、戸惑いもありましたが、とても新鮮な時間でした。高校というもののイメージや雰囲気など、具体的なところを見ることができて、とても中身の濃い時間になりました。
- 会社は利益があればいいと思っていたけど、将来の安全性も大事だということがわかった。
- 身近な会社がどれくらい儲けているかや、これからどうなるのかを学ぶことができて良かったです。就職するときなどに役立てていきたいと思います。
- 今日は楽しく企業会計を学ぶことができました。売上高など、種類別に分けましたが、その種類を計算して、さらにわかりやすくするとなると知りました。



6 中高連携における課題

- ・現在の中高連携の在り方が、ねらいに合っているのかを検証しなければならない。「中高連携」ありきになってはいないか。
- ・授業を実施する前に、中高の教員同士が交流し、十分な意思疎通を図り、生徒に関する情報交換を行うとともに、課題を共有する必要があるのではないか。
- ・高校での授業をより効率的に行うために、中学校ではどこまでの学習をしているのか、本校にはどのような生徒が入学することになるのかなど、中学校側からの情報提供が欲しい。

授業公開週間の実施について

研修部

お互いに授業を参観し合うことにより、指導力の向上と授業改善を図ることをねらいとした。期間は9月10日（月）～14日（金）。

実施方法としては、①期間中の授業は、原則公開とすること ②期間中、必ず1時間以上は授業参観すること ③参観後、感想等を『参観カード』（資料①）に記入し、授業者に渡すこととした。

教科の枠を越えて、自由に授業を参観し合い、いいところを評価し、アドバイスし合った。普段通りの授業だからこそ、参考になる部分も多くあったのではないか。

他校ではかなりポピュラーな取り組みとなっているが、本校では今年度初めての実施となる。研究授業週間の前段階という位置づけで計画したことであったが、アンケート（資料②）の記述からもわかるように、先生方の負担感も比較的少なく、継続性もあるように思えた。

【資料②】

平成24年度 校内研修 「授業公開週間」アンケート結果 (回答者数32/50)

1 授業参観をした時間数を記入してください。

時間数	人 数	分母を32とした場合の%	分母を50とし、アンケート未提出者18人を参観〇と仮定した場合の%
1	15	46.9	30.1
2	2	6.3	4.0
3	0	0	0
4	4	12.5	8.0
5	2	6.3	4.0
6	0	0	0
7	1	3.1	2.0
0	7(25)	21.9	50.0
無回答	1	3.1	2.0

【資料①】

平成24年 授業公開週間 参観カード

参観カードに記入したら授業者へ渡して下さい

授業参観日	平成24年9月 日() 校時		
クラス		教科	
授業者氏名			
参観者氏名			
参考になった点・気づいた点			

2 実施の仕方について、ご意見がありましたらお願いします。

○初めの段階としては、フリーな感じで互いの授業を見合い、圧迫感なく実施でき、良かった。

○一人しかいない教科の場合は参観しづらい。公開週間+研究授業もあると行きやすい。

○特に問題はなかった。

○公開週間という形から更に拡大しても良いかと考える。例えば、「毎月、1コマ以上、各自授業参観する」という形もありではないだろうか。常に授業は公開でも構わないと思った。

- 自由な形式の公開週間であって欲しい。
- 他教科を見る機会は貴重なことだと思う。
- 他教科の場合、やはり、「テーマ」「見るポイント」がなかったら行きにくい面がある。
- 自由に参観だと、逆に見せてもらうお願いがしづらい面もあるのかも知れない。
- 今回のやり方でいいと思う。アドバイスをもらい、授業について情報交換をするきっかけにもなった。
- 今回的方法で良いと思う。(気軽に参観できて良い。)
- 全職員が実施したか疑問がある。職員の意識を変える必要があるのではないか。強制的にするとか。

3 実施時期及び期間について、ご意見がありましたらお願いします。

- 良い時期だった。
- 時期としては良かった。年に2回くらいあれば、機会は増えると思う。(負担感があれば×ですが……)
- 3年生の就職・進学指導と重なる時期で、人によっては多忙な時期であったかも知れない。
- 1週間でなく2週間程度でも良いかも知れない。
- 1週間はプレッシャーだった。とてもきつかった。来年も実施するならせめて3日に。とても緊張した。
- 金曜日、公欠(出停)が多い時は……でも、いつかやるならこの時期でもいいか。



- 業務に余裕がなく、参観できずに終わってしまった。
- 個人的には他のことで余裕がなく、1時間しか参観できなかつたが、時期などもこれで問題ないと思う。
- 来年度は1学期中間後がよいのでは。授業改善を考えると早い時期がよいと思う。期間は2週くらいでもよいと思う。

4 自分の授業に取り入れてみたいと思った授業内容を紹介してください。

- 綿密な教材研究による授業で、板書の内容が非常に指導に有効で、教材のすばらしさを再認識させられる授業があった。
- ペアワーク→ペアのシートにコメントを書かせる。(リーディング)
- ていねいで、見やすい板書。
- 生徒とのやりとり。生徒への声のかけ方。
- 基本的なことだが、授業の内容をプリントなどで行わせ、生徒の反応を見る。
- ワークブックの例文を教師の範読をリピートして練習した後で、ペアワークで音読練習させる。基本の定着に有効だと思った。
- リーディングのまとめの段階で、段落毎に要約する。
- 週末課題の単語の読み合わせ。
- いろいろなチョークを使い、板書がわかりやすいところを参考にしたい。
- クラスによって教え方が違ってもよいということがよく分かった。
- 生徒の学力を高めようとする小テストや音読の仕方が参考になった。
- モデルや図の効果的な活用。今よりも更に視覚的に訴える授業ができればと考える。
- スピーチは自己表現の訓練として、良い活動だと思った。準備は大変そうだが、取り入れてみたい。
- 生徒と一体となって、とても素晴らしい授業だった。
- 生徒が何をすれば良いのかをわかりやすく黒

- 板に書き、指示することの徹底。
- 会話をしながら、授業の狙いに迫っていく授業構成。
 - グループ学習。
 - 音読、発表の仕方、聞く態度等、たくさんあつた。
 - 小単元の最後で考えさせる質問（教科書に答えが載っていない）をしていたこと。
 - 全員立たせて読ませていたこと。（全員が1時間のうち、最低1回は立つ。）
 - 板書の見やすさ、使い方。
 - ペアワークのやり方等参考になった。
 - スライド黒板が本校では少ないため、板書の工夫に興味があった。仕訳に工夫が見られ、板書の仕方は今後取り入れてみたい。

5 今後、自分の授業で改善したいと思っていることがありますたら記入してください。

- 発表させる時は、はっきり返事をして起立して答えさせ、単語ではなく、最低でも「です」をつけさせる。社会に出ると当然のことを身につけさせたい。
- 改めて、教材研究（→指導法）の仕方を工夫したい。
- 一問一答のような発問が多いので、生徒の考えを深めさせることができるように発問を心がけたい。それを実践する上でも、現代文の授業は大変参考になった。
- 生徒が笑顔で授業を受けられるようにしたい。（つまらなそうに見えるから。）



- 板書を今以上に的確にわかりやすく、説明したい。
- 常に自己表現・発信をさせる機会を多く持たせようと考えている。inputが多くなりがちであるので、outputをさせる方法を模索している。
- 効果的な教材（プリント）を継続的に利用できるようにしていきたい。
- 本当に学力がつくようなきめ細かい指導法、自分にとっては新しい指導法を模索するきっかけとなった。
- 新カリに向けて、体験的活動を組み込むことが急務であり、本校でできることを、更に模索したいと考えている。
- 生徒を動かす授業にしたい。
- サイトトランスレーション（同時通訳）を取り入れたい。
- 「生徒主導」の授業にしたい。
- 授業で取り上げる教材の精選や、新聞記事などの教材化。
- 1時間1時間の授業での、生徒のわかった感（こんな言葉はないかもしれません）の向上。
- 毎時間のポイントを明確にする。
- しっかり押さえるべきところと、それほどでもないところの緩急をつけて印象に残る授業にする。
- 板書の工夫—色チョークをうまく活用する。発問の精査—指示（ヒント）を出し過ぎない。生徒に考えさせる ポイントを絞る。



-
-
- 生徒に喋らせる場面をどう作るか……いまだに悩んでいる。
 - もっと板書を簡潔にして見やすくする。
 - 初心に戻って、教材研究に時間をとって、少しでも具体的な数字（資料）、エピソードなどを増やして、生徒の興味・関心を引きつけたい。
 - 知識を教える授業ではなく、生徒に考えさせ、生徒に導かせるように工夫したい。
 - 授業中の発問の仕方は工夫したい。

その他

- 確かに時間のない教員にとっておっくうになるが、いざ授業参観してみると気付く点が多い。
- 今回の授業公開週間では実施することはできなかったが、実物投影機を活用してみたい。同様の声が、何人かの先生方からも寄せられている。（家庭・理科・国語…）

秋商キャリア教育の計画と実践

商業科 保 坂 徹

はじめに

平成23年度から取り組んでいる「秋商キャリア教育」について、その計画の過程と実践の報告をします。

秋田商業高校は、専門商業に立脚した職業教育をしており、ビジネス実践（A K I S H O P やキッズビジネスタウン、ユネスコスクール）の体験的な学習をしていることから『秋商ではキャリア教育をしてきている』という感覚があります。

しかし、一般に言われているキャリア教育は狭義の職業教育ではなく、人の一生の長きにわたるキャリアを意味していますし、本校の教育活動が生徒一人ひとりのキャリアに対してどのように作用しているかはそれぞれの感覚によるところが大きくありました。

そのため分かりやすく視覚化・フレーズ化・構造化することにより、教職員の共通理解が進み、生徒の実感の伴ったキャリア教育につながるのではないかと考え計画に取りかかりました。

① 「秋商123」と「秋商スタンダード」

秋田商業高校の生徒たちが学校生活を送る上で基本となることをわかりやすい言葉で表現したもののが「秋商123」と「秋商スタンダード」です。

平成23年度に進藤校長は、すべての生徒に対して三年間の学校生活を「秋商1（ワン）2（ツー）3（スリー）」の合言葉で、その願いを表現しました。

1人の生徒が、学習と部活動の2つを3年間充実させてほしい

「秋商スタンダード」は、各分掌の主任などから構成された将来構想委員会で原案を考えま

した。その委員会で基本に考えたことは、秋商生として全員が必ず身に付けることはどのようなことなのかということでした。

話し合えば話し合うほど、多くの事柄が出され、商業高校の特性を生かし変化の激しい時代を生きていくためには様々なことを身に付けなければいけないのだなと痛感しました。約十ヶ月の時間を費やし、次の二つのことに焦点化して生徒たちに伝えることにしました。

その中の一つは「生活習慣」です。生徒手帳、生徒心得、秋商生に望むもの、社会人としての心得など多くの先生たちがたくさんの言葉で生徒たちを駆けてきたものがありました。どの言葉も時代や世情を反映した的を得ているものばかりでしたが、簡潔に次のフレーズにまとめました。

- ・秋商生としての誇りを忘れず、心身ともに健全で品位のある生活をする
- ・あいさつを大切にし、明朗闊達に生活をする

もう一つは「資格取得」です。商業科、国語科、英語科、数学科が中心となり現在受験させている資格の中から、全員が必ず取得することを目標に取り組んでいるものを学年とコースごとに精選して作りました。

② 秋商キャリア教育構造図

秋商キャリア教育構造図は「秋商で行うキャリア教育は、15歳で入学したそれぞれの生徒の7年後の自己実現を見すえて、その成長を支援する教育」と定義して作成しました。

学年ごと、コースの特徴を生かした学び、ビジネス実践、部活動という教育活動が、保護者や地域の人たちから理解され、支えられて生徒

の自己実現につながっていくことを表したもの

です。



③ 秋商キャリア教育の実践

①キャリアノートの作成と活用

生徒たちが秋商キャリア教育の全体を理解し、自己評価や記録をつけられるよう12ページの冊子（キャリアノート）を作成しました。

- ①秋商キャリア教育構造図
- ②秋商スタンダード
- ◆全員が身に付ける「生活習慣」
- ◆全員が取得する「資格」
- ③秋商キャリア教育（年間計画）
 - ・検定試験年間受験予定
 - ・学年の進路指導とキャリア教育
 - ・各教科指導を通して行うキャリア教育
 - ・総合的な学習の時間とキャリア教育
 - ・部活動とキャリア教育
- ④キャリアの記録

全校生徒への説明会

7月10日に全校生徒にキャリアノートを渡し、秋商キャリア教育の目指すものを説明しました。

生徒の記録例（学年の進路指導）

学年の進路指導とキャリア教育では、上段にねらいを観点別にしてA～Dで示してしまします。学期ごとに進路指導関係の行事一つひとつが、どの観点のねらいであるかをとその自己評価を○と△で記録できるようにしました。また、学期末には、文章で振り返りをします。

例の3年生の生徒は○の評価が多く、学期末には「自分の目標をもっと明確にする必要がある」と記述しています。

ii 学年の進路指導とキャリア教育(3学年)					
君たちに望むこと	社会人・職業人として自立するための資質を身につける				
A：接続 B：知識や人との話を聴き理解する力 C：自分の力で問題を解決する力 D：自分に対する課題を覺えさせし、それを解決する力 D：将来の自分をイメージし、その実現に向けて取り組む力					
学年	進路指導関係行事				
1学年	行事名 ベネッセ実力判定テスト (5/10) 中間考査(5/17～22) 小論文・作文模試 期末考査(7/2～5) 夏休み中～応募前職場見学、就職支援講座	ねらい 現時点での自分の弱点を知り、目標と、それに向けた今後の計画を考えよう。 自分自身を見つめ直し、また、社会対象に同心を持ち、意見を的確に文章表現できるようにならう。 鮮くことに対する意欲をさらに高めよう。	第1回目 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	第2回目 ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	第3回目 ⑯ ⑰ ⑱ ⑲
2学年	模擬面接 小論文・作文模試 就職試験・推薦入試開始 中間考査(10/11～16) 期末考査(12/6～11)	自己を見つめ、志望理由を明確にし、自己アピールができるようになろう。 課題に応じた適切な文章を書けるようにならう。 未来後の自分の姿をイメージし、達成実現に向けて実力を發揮しよう。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲

②職員研修

7月11日にキャリア教育の専門家として講演活動を行っている上越教育大学大学院准教授白木みどり先生を講師に迎え、「キャリア教育を推進する理由」をテーマに職員研修を行いました。

キャリア教育とは何か、今なぜキャリア教育が必要とされているのか、学校として何をすればいいのかなど、綿密なデータ分析に基づきつつ、グローバルな視点からキャリア教育の必要性が語られました。



ビジネス実践「AKI SHOP」

商業科 櫻 庭 咲 子

1 はじめに

本校では平成14年度から総合的な学習の時間を活用し、全校生徒が「ビジネス実践学習」を行っている。「ビジネス実践」は学校全体を模擬会社に見立て商品開発や販売、地域貢献活動など行いながらビジネスを体験的に学ぶ活動である。この活動の目的は、社会人基礎力を身に付けることであり、社会人基礎力は一步踏み出して失敗しても粘り強く取り組むことのできる(前に踏み出す力)、疑問を持ち、考えることのできる(考え方)、多様な考えを持つ人とともに、目標に向かって協力することのできる(チームで働く力)の三つの力と定義している。

2 AKI SHOPの課題

今年で11回目を迎えるAKI SHOPであるが、解決しなければならない課題がある。

- ①商品開発をする班の企業交渉は各班に委ねているため、企業の考えを反映させることができていない。
- ②AKI SHOPは本校主催であるため、他のイベントや催しへの広がりが欠けている。
- ③平成23年度の取り組みとして県内の農水産高校から商品開発に使用する食材を提供してもらい、他校とのつながりを得ることができた。しかし、他校と連携して活動したというレベルではない。
- ④商品開発した商品を売るという所に注目が集まるため、「AKI SHOP=物売りイベント」という印象を払拭できない。

3 今年度の取り組み

昨年度までの課題を解決するため、次のような取り組みを行うことにした。

◆学校内の班の活動と企業の接点を密にするために…

- (1)第6次産業化に取り組む
- (2)マネージャー制度の導入
- (3)外部企業を招いて企画検討会を開催する
- ◆AKI SHOPが学習発表の場であることを理解してもらうために…
- (4)AKI SHOPの活動を広報し、外部イベントにも参加する

(1)第6次産業化プロジェクト

AKI SHOPは秋商生を中心となり活動していたため、『地元の人たちと連携して秋田を活性化する』



という本来の目的が果たせていなかった。そこで、今年から秋田市で企画した第6次産業化プロジェクトに参加することにした。第6次産業プロジェクトとは、今までの第1次産業・2次産業・3次産業を一つの産業とみなして取り組むことである。



$$\begin{aligned} & \text{〔第1次産業〕} \times \text{〔第2次産業〕} \\ & \times \text{〔第3次産業〕} = \text{〔第6次産業〕} \end{aligned}$$

農産物の選定を金足農業高校、パッケージデザインを秋田工業高校、商品の企画販売を本校が担当して4種類の商品を開発し、AKI SHOP当日はトマトババロア『とまろあ』を販売した。

(2)マネージャー制度の導入

前年度までは毎週水曜日に行われる連絡調整委員会を通じて、本部の生徒が各班の班長に一方的に連絡事項を伝えていたが、本部が各班の活動や内情を性格に把握できておらず、上手く連絡調整ができずにいた。そのため、今年からマネージャー制度を導入し、各班に一人ずつ本部の生徒を配属することで、活動時間に本部の生徒が直接各班の進行状況を確認でき、以前より本部に情報が伝わりやすくなるとともに、アドバイスや手助けをしやすくなった。

(3)外部を招いて企画検討委員会の開催

前年度までは班ごとに企業交渉を行っていたが、今年度からは事前に各班に「どのような企業と連携して商品開発したいか」というアンケートを取り、それらの希望に沿った企業を学校に招いて本部の立ち会いのもとにプレゼンを行い、企業の方から審査してもらうシステムとした。このことにより各班が行う企業との電話交渉、商品試作を引き受けていただく企業の選定などの負担が少なくなった。

この取り組みにより、プレゼンや企画がしっかりとされているため円滑に商品化に向けた活動ができた班と、企業側が興味を示さず商品化に至らなかった班や改善を余儀なくされた班があったが、生徒は実社会に近い体験ができ、商品化の難しさを実感したようである。



(4)AKI SHOPの活動を広報し、外部イベントに参加

AKI SHOPの組織の中に広報班を新設

し、「AKI SHOP=物売りイベント」という外部からの印象を払拭するとともに、一年を通した授業の集大成であることをアピールした。

広報班の主な活動は年間を通じて各班の活動風景を写真に収めるとともに、撮影する際に班の活動内容を取材し、AKI SHOP当日は商品のフォトギャラリーをセリオン会場のスクリーンに映し出すとともに、年間の活動をまとめた表を作成して会場内に掲示し、来場者にビジネス実践の活動を広報した。

また、地域の企業が行っている「サンワ市」や地元農業協同組合が主催する「ふれあいフェア」、土崎元町商店街で行われた「縁結び祭り」にも参加し、AKI SHOPの活動をPRするとともに開発商品の販売を行い、様々な地域の方に商品を購入してもらうことができた。

4 今年度の振り返って

今年度のAKI SHOPは11月3日(土)にポートタワーセリオンを主会場に開催した。



大雨の天気にも関わらず、ステージイベントや販売ブースに多くのお客様に来場いただき、大盛況のうちに終えることができた。

前年度までの反省・課題を踏まえて今年度は新たな活動を行い、改善を図ったが終えてみるとまだまだ改善の余地があることが分かった。ビジネス実践「AKI SHOP」は来年度も総合的な学習の時間を活用して継続していくことになっているため、生徒が将来就職した際にそれぞれの会社で活躍できるように社会人基礎力を養うことができる活動にしていきたいと考えている。

5 新聞掲載記事の紹介

AKI SHOP 終了後、本校の取り組みを紹介する新聞記事が秋田魁新聞に掲載された。

◆秋田魁新聞北斗星より

▼プレゼンでは、複数の企業が「よし、作ろう」と評価する商品がある一方で、「もう工夫ほしい」と注文されたものもあつたそうだ。イベント会場で商品を勧める彼らの表情が輝いて見えたのは、ビジネスの厳しさを学び、販売にこぎ着けた充実感に満ちていたからだろう。生徒の一人が話していた。「古里を活気づけるために、秋田で起業したい」。アキショップの取り組みを通じて商売への関心が高まつたといふ。秋田商に限らず、最近は高校生や大学生らが地元の素材を活用して商品開発を目指す取り組みが増えている。コンビニやスーパーなどによる支援の輪も広がりつつある。若者の心意気と新鮮なアイデアを生かす運営がさらに高まれば、秋田の経済は変わっていくに違いない。

（2012・11・5）

北斗星

高校生が企画立案した商品30種余りが並ぶ。「お一ついかがですか」と売り込む生徒たちの笑顔に、ついプリンやエクレアなどを手に取る▼もうおしまい、と思ったところに「甘さ控えめです」と気の利いたせりふ。なかなかの商売上手だ。このイベントは秋田商業高校が年に一度開いているAKI-SHOP（アキショップ）。一昨日、会場となつた秋田市のポートタワー・セリオンをのぞいた▼アキショップはビジネス実践学習の一環で、生徒が商品開発から販売までを手掛ける。11年目の今回は、生徒のプレゼンテーションを企業に聞いてもらつた上で、商品の製造委託先を決めたというから本格的だ。

◆秋田魁新聞地域面より

ビジネス実践「キッズビジネスタウン」

商業科 石 田 雄 哉

平成24年11月2・3日に、今年で5回目となるキッズビジネスタウンを開催した。当日はあいにくの雨であったが、2日は勝平小と出戸小の児童194名が参加し、3日は県内小学校等から一般参加として218名の子ども達が参加した。

今年度のキッズビジネスタウンの活動について、まとめておきたい。

① キッズビジネスタウンの目的

キッズビジネスタウンとは、小学生以下の子ども達が市民となり、「みなで働き、学び、遊ぶことで、ともに協力しながら街を運営し、社会の仕組みを学ぶ」教育プログラムである。小学生が模擬的に設定された街で、市民としてハローワークに行って仕事を探し、実際に働いて給料を得て、その給料で買い物を体験する教育的行事である。

本校生徒はキッズビジネスタウンの企画・運営を行う。当日は社長として子ども達の先頭に立って模擬店舗での販売などを一緒に行い、商業高校で学習した「社会の仕組み」や「ビジネスの仕組み」を子ども達に教えることにより、学びを深めることができる。企画や運営を通して教えることの難しさや、ビジネスに必要な知識を客観的な視点から知ることができるものである。

このような活動を経験し、ビジネス実践全体で目指している「前に踏み出す力」「考え方」「チームで働く力」を体得して、社会人基礎力を育てることを目的としている。

② 秋商生の活動

今年度は、2年生30名、3年生10名が参加を希望した。本番当日の公欠生徒を除き、一人1

店舗を担当して、準備を行った。

①6月【基礎学習】

キッズビジネスタウンの班に分かれ、キッズビジネスタウンの基礎学習を行った。キッズビジネスタウンの仕組みを把握し、本場「キッザニア」を特集した番組を鑑賞したり、社会・経済の仕組みとは何かを学習した。

②7月【店舗の模索・決定】

実際に自分達が開く店舗を、KJ法を使って整理し、現実的に実施できそうな店舗から希望を出してもらい、教員側で店舗のバランスや実施した場合に仕事として成立するかを考えて決定した。

③夏休み～9月【連携店舗の決定】

生徒それぞれが担当となった店舗について調査したり、過去のキッズビジネスタウンを参考にしたりして販売する商品やサービスを検討した。同時に、実際の店舗へインタビューに向かつたり、商品の作成方法を学びに行ったり、当日協力してくれる店舗を探したりした。

④10月【求人票の確定・店舗の準備】

仕事内容を詳細にし、求人票を作成した。当日の仕事をイメージしながら、子ども達にさせる仕事を具体化し、物品の準備等を行った。

また、店舗の手伝いとして1年生全員が協力することになっており、1店舗に6名程度配属された。上級生が1年生に対しても当日の手順や小学生への接し方の指導を行い、それを通して自分達の準備不足などに気づかせるようにしている。

⑤今年度の店舗一覧

今年度設定された店舗は次のとおりである。
1店舗に二名が割り当てられている所は、片方が当日公欠の生徒である。

公共機関	2 A	磯部 流緒	⑤清掃局	倉光先生
	3 C	吉川 航平	⑤清掃局	
	2 C	保坂 俊	⑥消防	船山先生
	2 D	高橋 団	⑥消防	
	2 F	石川 彩音	病院	須藤先生
	2 F	藤田 紗花	銀行	宇佐美先生
	3 C	杉田 将弥	ハローワーク	倉光先生
	3 D	藤原 一誠	市役所	石田先生
	3 C	鈴木 拓海	警察	山本先生
飲食店	3 C	畠 瑞希	税務署	宇佐美先生
	3 B	奥田 峻史	職業訓練所	船山先生
	2 B	佐藤 奏愛	ババヘラ	大関先生
	2 B	谷藤 穂香	アイス	伊藤彰先生
	2 F	石井 歩美	カフェ	戸田先生
	3 C	土門 杏香	グレーブ	大関先生
	2 C	金澤 直大	①たこやき	船山先生
	2 D	米谷 哲平	①たこやき	
	2 D	坂本 曜理	うどん屋	横山先生
小売店	2 D	鈴木 愛美	②ラーメン屋	山本先生
	2 F	佐藤 泰良	②ラーメン屋	
	2 D	半田 莉菜	③ドーナツ・パン屋	伊藤彰先生
	2 F	石井 恭介	③ドーナツ・パン屋	
	2 D	矢久保 稔子	豚丼	戸田先生
	2 F	安田 莉乃	レストラン	船山先生
	2 C	小野寺 貴也	車屋	伊藤彰先生
	2 D	甘野 開流	文房具・おもちゃ屋	宇佐美先生
	2 F	杉本 唯香	セレクトショップ	横山先生
サービス業	3 E	山内 満未	花屋	須藤先生
	2 A	村上 彩香	ネイルサロン	倉光先生
	2 B	羽場 友作	新聞社	伊藤彰先生
	2 D	佐藤 佑飛	スポーツクラブ	山本先生
	2 E	菊地 裕	④シアター	横山先生
	2 E	翔山 知輝	④シアター	
	2 F	中川 有彩	テレビ局	石田先生
	3 D	仲村 耕輔	写真館	戸田先生
	3 F	小島 夏子	ラジオ局	倉光先生
製造業	2 A	伊藤 里美	手芸工房	須藤先生
	2 A	佐藤 ちほ	アクセサリーエフ	須藤先生
	2 A	永澤 菜奈	アロマ工房	戸田先生
	2 B	中村 華菜	手作りお菓子工房	大関先生
	3 D	佐藤 泰斗	ハンコ工房	石田先生

また、今年度の活動にあたって協力してくれた企業などの方々は次のとおりである。

店舗	担当教員	連携先
消防署	船山先生	秋田市消防
病院	須藤先生	秋田市保健所、秋田県赤十字血液センター
ババヘラ	大関先生	児玉冷菓
アイス	伊藤彰先生	雄和振興公社
うどん屋	山本先生	ヤマヨ
ラーメン屋	山本先生	ヤマヨ
ドーナツ・パン屋	伊藤彰先生	たけや製パン
車屋	伊藤彰先生	BMW
花屋	須藤先生	フラワーショップかおる
写真館	戸田先生	乳井写真館
アロマ工房	戸田先生	バレアンヌ
手作りお菓子工房	大関先生	生徒保護者

⑥当日の様子および生徒の感想

初日は生徒達も不慣れで、仕事の手順が確立されていなかったり、客の呼び込みなどにも積極性が欠けていたりといった点が見られたが、回数を重ねるにつれて徐々に自信を持って取り組んでいた。各店舗の大まかな様子は次のとおりである。

- 飲食店…昼頃をピークとして、目が回るような忙しさであった。時間前に売り切れになる店舗も多かった。

・工房…コンスタントに就業希望者が来ていたようだが、セレクトショップでは売れ残りも多かった。

・サービス業…写真館やスポーツクラブなどのサービス業はお客様が来ないことに悩んでいた。お客様が来なくなるサービスを考えることが必要である。

・消防署…晴れていれば外で放水作業などを体験できたが、今年度は雨だったため、防護服着用と消防車での記念撮影になってしまった。

小学生達からは大変好評で、「高校生が優しかった」「仕事が楽しかった」といった感想が聞かれた。一方、保護者からは「サービスの不十分さ」を指摘する感想も聞かれ、事後アンケートを見て、生徒達も厳しさを知ったようであった。



③ 今年度の取り組み

①勝平小・出戸小との連携

今年度も勝平小・出戸小との連携にあたり、事前・事後の打合せを行った。事前の打ち合わせで要望を聞くことで、後述の新しい取り組みが考案され、当日の混乱を軽減することができた。実施後にも反省会や感想を伺い、記憶があるうちに次年度への課題を発見することができ

た。課題としては、買い物客が足りないということや価格が高すぎるのではないかということが挙げられた。

②買い物班と就業班に分けての活動

勝平小との打合せの中で「出だしの混雑の解消」と「6年生だけの参加」、「最初に買い物する人がいない」という課題があったため、それを解決するために、スタート時のみ買い物をする班と働く班に小学生を分け、事前に最初の職業を決めて参加してもらった。また、スタート時から全員に300メルク（貨幣の単位）を渡し、最初から買い物ができるような形態にした。

強制的に買い物客を作ることになったので、ある程度の購買はあったが、所持金の少なさや食事の時間には早かつたことなどから、買い物量は少なかった。最初の混雑に関しては、半分の人数で済んだことで軽減された。

③勤務評価

市民証に簡単な勤務評価を付けた。これにより、生徒と児童とのコミュニケーションのもとになればと考えていた。小学生からも「嬉しい」や「仕事のやる気が出た」などの評価をもらうことができ、良かった。その反面、全員が実質高評価を得ていることや、子どもが頑張ったのに悪い評価を受けられないなどにより不要であるという意見も生徒から寄せられた。

④その他

- ・今年度は防災センターの駐車場が使えなかつたため、県立プールの駐車場を借り、無料のシャトルバス運行を行い、車での来場を受け入れた。
- ・初日と同様に、2日目の一般参加者にも最初の所持金として300メルクを渡した。
- ・求人票に連携した企業を明記した。これによって会社のPRになって、協力した企業へ少しでも返礼できればと思った。しかし、事前の周知が不十分であったため、掲載されては困るという企業もあり、確認が必要であった。

4 課題

毎年のことであるが、やはり最初の部分での買い物客の少なさが最大の課題である。最初の頃、子ども達のほとんどは働きたいため、買い物客が少なく、始まったばかりだと食事などをしたいという欲求もないため、ほとんど準備作業だけになってしまう。工房に関しても、買っていくのは自分で作成した物が多いため、最初に買うという欲求は少ない。いかに買ってもらうか、いかにお客さんがいない状態での仕事を考えるかが課題である。お客様をいかに増やすかの仕組み作りと共に、生徒達もお客様を増やす工夫やお客様がいないときの仕事を工夫するなどが必要だと感じた。

また、指導の上では、もっと早めに運営する店舗を決定することと、早くから現実に即して詳細を煮詰める作業が必要であった。特に、当日協力する店舗を探すには、時間や試行錯誤が必要になるため、早めに決定して行動できるようにする必要がある。早めに決定すれば、研修等も密に行うことができると思われる。求人票の作成後に時間の余裕があれば、飲食店の衛生指導を密に行うことができる。また、1年生と合流してからの期間も短かったため、十分な打合せや指導を行うことができていなかった。これらの問題解決のため、早期に取り組むことが必要だと感じた。

今年度の活動を振り替えると、生徒、参加者双方での認知度も高まり、おおむね好評であった。来年度以降も、改善を重ねながら、参加者に喜ばれ、生徒の成長を促すような取り組みにしていければと思う。

秋田市学校保健大会に参加して

保健・教育相談部 須 藤 あさ子

1 日 時 … 平成24年9月8日（土）14：00～16：30

2 場 所 … 秋田市文化会館 大会議室

3 次 第 … (1) 開 会

- (2) 秋田市学校保健功労者 表彰式
- (3) 調査・発表（学校薬剤師部）
- (4) ディスカッション
- (5) 閉会

4 調査・発表について

秋田市学校保健会は学校医部、学校歯科医部、学校薬剤師部、保健主事部、養護教諭部の五つの部からなり、毎年、1つの部が発表を行っている。今年は学校薬剤師部の担当で、「学校環境について考えよう～一斉調査から見る学校環境～」というテーマのもと、次の4つの調査・発表があった。

- (1) 給食設備等の調査から（秋田市立土崎小学校 学校薬剤師 鈴木 豊）
- (2) ダニ調査からの対策（秋田市立土崎中学校 学校薬剤師 伊藤 恵）
- (3) 校内の医薬品・薬品調査と対応（秋田県立中央高校 学校薬剤師 京野 誠）
- (4) 校内のホルムアルデヒド調査と対策（秋田市立八橋小学校 学校薬剤師 石原栄一）

このうち、本校にも関係の深いと思われる(2)(3)について報告する。

5 調査・発表の内容について

(2) ダニ調査からの対策

秋田の子ども（小、中、高）はアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎の有病率が、全国平均を上回っている。（全国平均がそれぞれ9.2%、3.5%であるのに対して、秋田県は11.9%、4.6%である。）

秋田中央学校薬剤師会が平成20年度に秋田市立の小・中・高校74校で行ったダニアレルゲンの測定の結果、学校内でダニが生息しやすいのは、保健室のベッド、体育館マット、コンピュータ室のカーペット、柔道場の畳等であった。保健室ベッドで基準を超えたのは34校、体育館マットでは1校、カーペットで7校である。

基準超えの多かった保健室では布団の丸洗い、掃除機による掃除を徹底したところ、基準内になった。体育館マットでは天日干し、掃除機による清掃、コンピュータ室でも頻繁な清掃が有効であった。

まとめとして日常の清掃の重要性が確認された。

(3) 校内の医薬品・薬品調査と対応

学校には多くの薬品が置かれており、薬品が紛失したり扱い方を誤れば重大な健康被害が発生するおそれのあるものが少なくない。しかしながら学校における薬品管理方法には取り決めがないのが現状である。学校で使用する薬品には

- ・保健室の医薬品
- ・理科室の薬品
- ・水泳プール用薬品
- ・漂白剤や殺虫剤、除草剤、防臭剤

などがある。

秋田中央学校薬剤師会では平成23年度に秋田中央地区の小・中・高校、特別支援学校の127校を対象に学校内の医薬品・薬品等の管理に関してアンケート調査を行い、全体の98%に当たる125校から回答を得ることができた。

保健室の一般医薬品はほとんど全ての学校に常備されている。しかし全国と同様に半数以上の学校で薬品管理簿が整備されていなかった。使用期限切れとなった医薬品は一般の家庭ゴミとして処分可能である。

理科等の薬品は施錠保管し薬品管理簿を整備している学校が90%以上であった。使用期限切れの薬品は業者に依頼して処分する27%、学校内で処分する18%という回答の他、そのまま保管している学校が31%あった。不要になった薬品の廃棄方法について不明な場合は、担当学校薬剤師に相談し助言を求めてほしい。

農薬、殺菌・消毒剤に関しては施錠保管されているが、薬品管理簿の整備率は約20%と非常に低かった。購入に当たって少量にとどめて使い切ることが原則であり、廃棄処分する際は業者に委託するか、学校で処分できるか学校薬剤師に確認してほしい。

6 まとめ

今回の秋田市学校保健大会は秋田中央学校薬剤師会の調査・研究の発表により、学校環境衛生について参考になる事項が多かった。

日常の清掃については、単に校舎の見た目をきれいにするというだけでなく、健康で衛生的な学校生活のために清掃の仕方が重要であるという意識を、教職員はもちろん生徒にも持ってもらい、積極的に日々の清掃活動が行われるようにしていきたい。

校内の医薬品・薬品については、学校薬剤師のアドバイスも得ながら、有効かつ安全な使用、管理、保管の方法を実現しなければならない。

これらの実践を通じて、健康的で、安全な学校環境の維持管理につなげていきたい。

図書館活性化のための試み

図書・視聴覚部 那須 淳子

1. はじめに

今年度本校に赴任して図書館運営を担当することになり、まず、蔵書がパソコンで管理されていること、貴重な古い書籍がたくさんあることに驚いた。また、保育園での読み聞かせ等、前任校にはなかった図書委員会の活発な活動にも感心した。一方、利用者が少なく、せっかくの蔵書や資料が有効活用されていない（他校も同様の傾向にあるが）のは大変残念であると感じた。

生徒たちに興味を持ってもらい、足を運んでもらい、今まで以上に利用される図書館にするため、図書視聴覚部では、図書館の模様替えを今年度の課題の一つにした。本校図書館の問題点を明らかにし、専門家のアドバイスを受けながら、少しずつでも改善していきたいと考えている。図書館活性化に向けての今年度の取り組みを紹介していきたい。

2. 研修会への参加

①県立図書館職員による学校訪問

（県立学校等図書館支援メニューの活用）

期日：平成24年7月23日（月）

来校者：秋田県立図書館企画・広報班

副主幹（兼）班長 成田 亮子氏

同 主査 中山恵理子氏

参加者：那須 淳子・小玉美保子

奥山 桃子・鈴木 佳子

（生徒）山本 彩花・石川 夏樹

②学校図書館職員等研修会

期日：平成24年8月7日（火）

場所：秋田県立図書館

参加者：那須 淳子・（生徒）山本 彩花

石川 夏樹・藤原 由実

③高教研学校図書館部会・学校図書館研究大会
期日：平成24年11月17日（土）
場所：由利本荘市民交流学習センター
参加者：那須 淳子

3. 研修会で学んだこと（レイアウトに関して）

①図書館は工夫が大事

- ・本の見せ方を工夫する。面出し（表紙を見せる）すると貸し出しが増える。
- ・ぎっしり詰めるより、隙間を空ける。明るいイメージを演出。
- ・資料は、つながりがある。十進分類法にこだわる必要はない。

②図書館レイアウトの工夫

- ・入り口近くに、新刊本を置く。
- ・古い本は面展示。（背表紙は日に焼けているので。）
- ・時節や相手を考えたミニ展示。資料は分類、メディアを横断して集める。
- ・タイトル（キャッチコピー）がとても大切。
- ・図書館を店と考える。1年に一度はレイアウトを変えてみる。
- ・図書館前の廊下の有効利用。壁だけでなく、テーブルを出して、思い切って本そのものを展示するのもよい。

4. 本校図書館の問題点

- ・入り口近くの書棚が有効活用されていない。寄贈本（単行本、文庫、全集と様々）、進路資料（古いものが多い）、ファンタジー、漫画、歴史書等、脈絡がなく配架されている。
- ・生徒に比較的よく利用される文庫本が、あちこちに散在している。せっかくパソコンで本の存在を確認しても、探しにくい状態である。

- ・後方の書架に対して直角に置かれている書棚が、視線を遮ってしまっており、奥が暗い。
- ・カウンター近くの一等地に古新聞の束があるのは場所がもったいない。新聞利用者は確たる目的があって来館するのだから、他の場所でもよい。
- ・古い本が多く、書架が全体的に茶色のイメージで、暗い。
- ・統計資料などは、何年も前の、利用価値のほとんどないものが多数配架されている。

5. 秋商図書館ビフォー・アフター

図書館を改造するのは一朝一夕にはできない。とりあえず、出来るところから少しづつ替えていこうと思い、この冬、入り口近くの書棚と後方書架の手前の棚のリフォームに取りかかった。

①入り口左の書棚

入り口近くには、生徒の利用が比較的多いものはもちろん、生徒に利用してほしいものを配架するべきだと考え、この書棚には、新刊本、文庫本、商業科目の学習に役立ちそうな書籍を置くことにした。文庫本は、数カ所に分かれて置かれていたものをまとめ、探しやすいよう、作家のアイウエオ順に並べた。

新刊本コーナーには、その作家の他の本も並べてみた。新刊本が入荷されるたびに入れ替えるのは少々手間がかかるが、生徒の読書体験の幅を広げる手助けになればと思う。

②新聞コーナー

カウンター近くにあった新聞ラックを後方に移動させ、古新聞の束は窓際の棚の中に納めた。古新聞を載せていた書棚を撤去し、空いたスペースに、テーブルを配置した。

③後方の書棚

閲覧室後方、出版社別に並べられていた新書を、分野別に並べ直した。現在、利用者はあまり多くはないが、今後増加すると思われる進学希望者の小論文対策に、利用しやすくなるであろうと考える。むしろ、もっと利用してもらおう

よう、こちらからも働きかけていきたい。

また、視線を遮っていた背の高い書架と、直角に置かれていた書棚を窓側に移した。少しは明るく見通しのよい図書館になったのではないかと思う。

6. 終わりに

今年度は入り口付近に手をつけただけであるが、いずれ、奥の書架や書庫の中も整理していくたい。しかし、利用しやすく模様替えしても、図書館に足を運んでもらわないと意味がない。今後は、図書館内の整備とともに、生徒を図書館に誘導する工夫を考えていきたい。

学校図書館は、「読書センター」のみならず、学校の「学習・情報センター」であり、「学校教育の中核」たる役割を担う。生徒に読書・学習・情報収集の場として活用してもらうのは勿論、教職員の利用にも供していきたい。こんな本があったら…、こんな図書館だったら使いやすい…など、先生方からも御意見を頂戴したい。今後とも、図書館活性化のための提言をお願いしたい。



文庫やら全集やら…



文庫本が、探しやすくなりました



ファンタジーやら古い資料やら…



新刊本コーナーもリニューアル



背の高い書棚が視線を遮っていた



見通しが良くなりました

高等学校教職10年経験者研修報告

秋田市立秋田商業高等学校
理科 藤中由美

1. 校外研修

4月13日（金）	秋田県立博物館 県立高等学校10年経験者研修校長等連絡協議会
6月28日（木）	総合教育センター ・本県学校教育の現状（講話）　・学校の危機管理（講義・演習・協議） ・公開講演「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」（公開講演）
7月5日（木）	総合教育センター 専門研修講座C 「校務に生かす表計算」
7月26日（木）、27日（金）	秋田市立中央図書館明徳館 選択研修
8月2日（木）	総合教育センター ・キャリア教育の在り方（講義・演習）　・学校全体で取り組む情報教育（講義演習） ・授業づくりと授業研究の実際（講義・協議） ・これからの中等教育に求められる教科指導の在り方（講義・協議・演習） ・イブニングセミナー【野球の名付け親「中馬庚」と「正岡子規】
8月3日（金）	総合教育センター ・授業づくりと授業研究の実際（講義・協議） ・これからの中等教育に求められる教科指導の在り方（講義・協議・演習）
9月5日（水）	総合教育センター ・生徒理解と人間関係づくり（講義・協議） ・教師が使えるカウンセリングの技法（講義・協議・演習） ・事例を通して見た不登校・いじめ・問題行動への具体的な対応（協議・演習）
9月10日（月）	秋田県立新屋高等学校 教科別授業研修（理科班） 実施単元 生物Ⅰ「体液とその働き」 ※指導案別紙
1月11日（金）	総合教育センター ・教育公務員の服務　・教職10年経験者研修のまとめⅠ（演習・協議） ・教職10年経験者研修のまとめⅡ（演習・協議）　・本県の教育課題とこれからの学校教育（講話）

生物 I 学習指導案

秋田市立秋田商業高等学校
理科 藤中由美

1. 日 時 平成24年9月10日（月）2校時 9：50～10：35

2. 対象クラス 2年B・D組生物選択クラス

3. 場 所 秋田県立新屋高等学校

4. 使用教室 生物実験室

5. 教科書 高等学校改訂 生物I（第一学習社）

副教材 レッツトライノート生物I（東京書籍）／サイエンスビュー生物総合資料（実教出版）

6. 生徒の実態 文系生物選択者クラス

7. 単元 第II編 環境と生物の反応

第4章 環境と動物の反応…13時間

4 体液とその恒常性

4-1 体液とその働き（本時）…（1時間／13時間）

8. 単元（本時）の指導目標

- ・体液の種類と働きから、恒常性について理解する。
- ・血液成分の働きと特徴を理解する。
- ・ヒトの血球プレパラートの観察から赤血球と白血球の形状、含有量、核の有無を確認し、血液についての理解を深める。

9. 評価規準

[ア] 関心・意欲・態度	[イ] 思考・判断・表現	[ウ] 観察・実験の技能	[エ] 知識・理解
<ul style="list-style-type: none">・体液について関心を持ち意欲的に学習しようとしている。・実習に対する意欲や観察態度。	<ul style="list-style-type: none">・細胞にとっての環境は体液であることを理解している。・恒常性について説明できる。・血球プレパラートの赤血球と白血球を判別できる。	<ul style="list-style-type: none">・正しい方法で顕微鏡操作をしている。・周囲に配慮し、安全に実験を進めている。・血球を判別できる。	<ul style="list-style-type: none">・体液の種類と働きを理解している。・恒常性とは何かを説明できる。・血液成分の形状、特徴、働きについて理解している。

10. 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> 外部環境と内部環境の意味を理解する。 身近な例から、「恒常性」について理解する。 体液にはどのようなものがあるかを考え、体液の種類を理解する。 本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な例から、外部環境を理解させる。 細胞レベルで環境を考えさせ、内部環境とは体液であることを示す。〔内部環境＝体液〕 外部環境の変化と内部環境について考えさせ、「恒常性」を理解させる。 体液にはどのようなものがあるか、ヒントを与えながら、答えさせる。 本時は特に血液について学習することを明示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部環境と内部環境の違いを理解し、細胞にとっての環境が体液であることを理解している。〔エ〕 恒常性とはどういうことか説明できるか。〔イ〕・〔エ〕 体液の種類を理解しているか〔エ〕
展開 (36分)	<ul style="list-style-type: none"> 中学校で習った内容を思い出しながら、血球成分について名称と働きを確認する。 (1分) 血液成分を理解する。 (15分) [実習～血球の観察～] (20分) <ul style="list-style-type: none"> 顕微鏡の扱い方を確認する。 血球の形状、大きさ（大小）、数（多い・少ない）、核の有無を観察する。 実習しながらプリントに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 血球の図を示し、名称と働きについて確認する。現時点の生徒の知識を把握する。 血液について学習内容をプリントにまとめさせる。名称、働きなど中学校の既習内容は積極的に発言させるようする。 顕微鏡の扱い方を確認させる。 血球の形状、大きさ、数、核の有無に着目して観察するよう指示する。 机間巡回で生徒の状況を把握する。検鏡できない生徒を補助する。 テレビにヒトの血球を示し、赤血球と白血球の形状をクラス全体に確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 中学校の既習内容を思いだし、意欲的に答えようとしているか。〔ア〕 正しい順序で顕微鏡操作しているか〔ウ〕 ヒトの血球を観察できたか〔ウ〕 実習に対する意欲や態度〔ア〕
まとめ (4分)	<ul style="list-style-type: none"> 観察できた項目を確認する 後片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 観察した項目を確認させる。 後片付けの指示をする。 	血液成分について理解できたか〔エ〕

〔ア〕関心・意欲・態度 〔イ〕思考・判断・表現 〔ウ〕観察・実験の技能 〔エ〕知識・理解

理科総合B 学習指導案

秋田市立秋田商業高等学校
理科 藤中由美

1. 日 時 平成25年1月25日（金）4校時

2. 対象クラス 3年C組（会計コース）

3. 使用教室 化学実験室

4. 生徒の実態

男子17名、女子21名、計38名の会計コースの生徒たちである。授業に集中して取り組んでおり、理解力が高い。卒業後は医療系や栄養学系の進学が決まっている生徒たちがいるため、生命科学分野の知識が特に必要なクラスである。

5. 単元と指導計画

形質の遺伝と染色体（1時間）

体細胞分裂（2時間）

有性生殖と染色体（2時間）

遺伝の法則（8時間）

性と遺伝（2時間）

遺伝子の本体（4時間）……本時：「遺伝子の本体～DNAの抽出～」（4時間／4時間）

6. 指導観

2012年は、山中伸弥教授が遺伝子分野の研究でノーベル医学生理学賞を受賞するという、科学史に残る年となった。DNAが染色体に存在していることや、生命の設計図であることを授業で学習し、その構造については分子レベルで学んだが、「DNAを実際に見ることができる」ここまででは生徒は想像できていない。

遺伝子の学習の総まとめの時間にDNAを観察することでDNAについての学習内容を復習し、現在世界中で行われている遺伝子治療やiPS細胞による新しい技術開発の話題を身近な問題として捉えることができるようになることを目指す。

7. 本時の目標

- DNAを取り出し観察する（本時ではブロッコリーを使用）。
- DNAは動植物にかかわらず全ての生物に存在していることを確認する。

評価規準

【ア】関心・意欲・態度	【イ】思考・判断・表現	【ウ】観察・実験の技能	【エ】知識・理解
<ul style="list-style-type: none">・DNAに関心を持ち、意欲的に学習しているか。・班員と協力して意欲的に取り組んでいるか。	<ul style="list-style-type: none">・DNAを見つけ出し、観察することができたか。・DNAの形状を文章で表現することができるか。	<ul style="list-style-type: none">・正しい方法で実験をしているか。・DNAを抽出することができたか。	<ul style="list-style-type: none">・DNAの働きや性質を理解しているか。・実際のDNAの形状を理解することができたか。

8. 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> ・使用器具があるか確認する。 ・DNAの働きを確認する。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の人員を確認する。 ・使用器具を確認させる。 ・DNAの特徴を確認する。 ・本時の目標を明示する。 	<input type="radio"/> 話を聞く態度 【ア】 <input type="radio"/> 本実験の目標を理解しているか 【ア】
展開 35分	<p>・DNAの収量を多く見込める材料とはどのような材料かを考える。</p> <p>・ブロッコリーを凍結させたことの意味を理解する。</p> <p>【手順の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験手順を理解する。 <p>【実験作業】 25分 花芽採取（8分） すりつぶし（10分） 抽出（7分）</p> <p>【観察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エタノールを加えてDNAを観察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・DNAの抽出に適した材料の条件を考えさせる。 ・凍結ブロッコリーの意味を説明する。 <p>【手順の説明】 以下を実物投影機で示す 1 花芽の採取方法 2 すりつぶし方 3 すりつぶし後の状態の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験中のルールを確認する。 ・凍結ブロッコリーを渡す ・班員と協力して行うよう指示する。 ・抽出時間に後半の作業の指示と諸注意をする。 	<input type="radio"/> 話を聞く態度 【ア】 <input type="radio"/> 班員と協力しているか 【ア】 <input type="radio"/> 正しい順序で時間内に作業しているか 【ウ】 <input type="radio"/> DNAを抽出できることできたか 【ウ】
まとめ 5分	<p>【振り返りと記録】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験で理解したことや実験の感想を記録する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験の感想をプリントに記入させる。 観察したDNAの状態や理解したことについて、文章で表現させる。 	<input type="radio"/> 観察したDNAの状態を表現できる。 【イ】 【エ】 <input type="radio"/> 抽出できなかった場合、その原因を考えて表現できる。 【イ】 【ウ】
	・後片付け	・後片付けの指示	<input type="radio"/> 班員と協力しているか 【ア】

実験 DNAの観察

年月日 校時	天気	組	番	氏名
--------	----	---	---	----

- 【目的】 1. DNAを抽出し、DNAの形状を観察する
2. 生物はDNAを持つことを確かめる

【使用器具】

100ml ビーカー（洗剤入り）1個 食塩 水
 乳鉢、乳棒 ハサミ 葉さじ こまごめピペット ピンセット
 200ml ビーカー1個 エタノール ろ過用ネット

【手順】

- ① 洗剤に食塩を加え、全体を100mlに調製する → DNA抽出液
- ② 冷凍ブロッコリーの花芽部分をハサミで切り落とす。ペースト状になるまでりつぶす。
- ③ 乳鉢に抽出液を50ml加える。抽出液が材料全体に浸透するよう、穩やかに混ぜる
→ 5分以上静置
- ④ 200ml ビーカーにろ過用ネットを取り付け、乳鉢中の試料を全ていれてろ過する。
- ⑤ こまごめピペットでエタノールを入れる。その際、ピペットの先端をビーカーにつけ、エタノールがビーカーを伝うように静かに入れる。ビーカー内を観察する → DNAが出てくる

実験のまとめ

◎DNAはどこに存在するか。

◎DNAの抽出に適している材料の条件とは何か。

◎材料を冷凍した理由はなぜか。

◎食品洗浄用洗剤は、実験においてどのような役割があるか。

実験の感想、DNAについて理解したこと

（ここに感想を記入してください）

特定課題研究レポート

所 属 校	秋田市立秋田商業高等学校	職・氏名	教諭 藤中 由美
研究分野	(A) 教科指導 B 学級・学年・学校経営 C 生徒指導 D 進路指導 E 特別活動に係る指導 F 総合的な学習の時間に係る指導 G 特別支援教育に係る指導 H その他		
研究テーマ	理科に対する意識調査から見えた本校生徒の実態と授業実践報告		

1 研究の概要

4月当初3年生の生徒236人に、理科について以下のアンケートを実施した。

- 問1 理科は好きか、嫌いか（得意か、苦手か）
- 問2 問1についてその理由
- 問3 今までの生活経験について
- 問4 中学校までの理科の理解度と印象に残っている学習分野
- 問5 授業に対する要望 ※以上全て記述式

問1について、「理科が大好きである・好きである・得意である」と答えた生徒は99人（約42%）、「理科が嫌いである・苦手である」と答えた生徒は102人（約43%）でほぼ同数だった。「普通である・分野によって好き、嫌い」と答えた生徒は35人（約15%）だった。

本レポートでは問1、問2、問5的回答に着目し、特に苦手意識を持つ生徒に対する指導の工夫と、主体的な学習を促すために行った授業実践について報告する。

理科が好き・得意 と答えた主な理由	理科が嫌い・苦手 と答えた主な理由
<ul style="list-style-type: none"> ・実験が好きだから。 ・授業で習ったことを実験で確認すると感動するから。 ・考えることが楽しいから ・考察することが好きだから ・生活の中の不思議な現象の理由が理解できるから ・身のまわりのことと関連づけて考えることが楽しい。 ・計算問題が無いから。 ・難しいからやりがいがある。 ・理解したときに面白いと感じるから。 ・小学校から（中学校から）好きな科目だから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・計算が難しいから（計算が多いからを含む） ・実験が少ないから。 ・暗記が多いから。 ・複雑で覚えるものがたくさんあるから。 ・公式がたくさんあるから。 ・難しくて頭に入ってこないから。 ・点数がとれないから。 ・勉強のしかたがわからないから。 ・苦手意識があるから。 ・内容に興味を持てないから。

2 アンケート結果から見えてきたこと

43%の生徒が「理科は計算が多くて難しく、複雑で覚えることが多い。どのように勉強したらよいのかわからないのでテストでは点数が取れない。苦手意識を持っている。」という現状が見えてきた。一方、「好き・得意」と答えた生徒は、「理科=感動する経験ができる」というプラスのイメージや、実験を通して主体的に学習するイメージを持っていることがわかる。授業に対する要望で、「実生活や近い将来に役立つ学習をしたい」という意見が多かった。アンケート結果を受けて、①理科への興味関心を引き出す ②基礎学力の定着 ③生徒による主体的な学習 を目標に授業を進めてきた。その授業実践について報告する。

3 授業実践

1. 授業に臨む姿勢の習慣化と学習方法の確立

限られた時間で効果的な学習を進めるためには、「聞く、見る、書く」という生徒の学習姿勢の習慣化が不可欠である。授業の進め方については授業1時間の内容をプリントにまとめた教材で進めていくことも考えたが、プリントが無ければ学習できない状態を避けるため、ノートの取り方、理科用語のまとめ方などを指導し、敢えてノートの使用にこだわった。書く作業時間には個人差がある。そのため、書く作業と演習には必ず時間を設定するようにし、時間を意識して集中して取り組む姿勢を目指した。例)「〇分間で～しよう」「〇分間で〇〇について書きなさい」

2. 理科への興味関心を持たせる工夫

実生活と関わりを持たせる授業を心がけ、なるべく身のまわりにある教材を提示することで理科への興味、関心に繋げるようにした。DNAの観察を行った生徒からは「本当にDNAが見られるとは思わなかった、感動した！」等の感想が聞かれ、iPS細胞や最新医学にも興味関心を持ったようである。授業中はたくさんの質問や独創的な面白い発想が飛び出すようになった。しかし、全員に提示したくても試料が少なく全体での共有が難しいこともある。その際は実物投影機を活用した。今年度初めて使用したが、教育機器の効果的な使用については更に研究していきたいと思う。

3. 観察眼がもたらす「覚える」効果

理科が苦手だと答えた生徒の中に「覚えることが多いから」という理由があった。そこで、板書で一方的に説明して覚えさせることに限界があると感じた場合には観察学習や調べ学習を取り入れた。普段使用している教科書、資料集を徹底的に活用し、理科用語や部位の名称などは基本知識を覚える前に、写真や図をスケッチさせる。進め方は「〇〇の部位を探しなさい」など、生徒の目で探させ、考えさせるようにした。また点描写によるスケッチを取り入れ、表現力を求めた。その結果、生徒に「気づく力」が養われたよう思う。板書をノートに写すという学習だけでは気づかれないような質問が出てきたり、生徒同士で「この部位はどうなっている？」などと話し合う姿が見られ、主体的に学習する雰囲気づくりにも繋がった。

観察眼を養うことの効果として、「苦痛なく覚える」ことも挙げられる。スケッチを行った内容と行わなかつた内容を小テストで比べても、スケッチした知識の定着効果は大きかった。

4. クラス全体の学力定着とグループ学習の活用

クラス全体で学力を定着させたいときは、観察学習の他にグループ学習を行った。特に「遺伝の法則」の学習は、計算も多く数学的思考力が求められるため理解力の差が大きく表れる分野である。ここでは助教法を取り入れ、スマールステップで一斉授業をした後、学力の高い生徒を各グループに1~2名配置し、生徒が生徒へ教える方法を取った。人に教える経験をさせることで、学習内容を確認できる他、自分が理解していると思っていたことも実は理解が足りないことに、教えている本人が気付く。この方法によって教える方も教わる方も双方に理解力の向上が見られた。

4 今後の課題

教師から生徒へ一方通行の授業ではなく、生徒が主体的に学ぼうとする授業にしたいと思い1年間試行錯誤を重ねてきた。理科に興味を持たせ、主体的な学習を促す工夫は引き続き来年度の課題である。これからはキャリア教育の観点から、商業科生徒であることを活かした授業についても研究し取り組んでいきたい。

編 集 後 記

～研修部員から一言ずつ～

研修部員としては何もできませんでしたが、個人的には「授業公開週間」で他の先生方の授業を参観させていただき、目からウロコ、ほどに勉強になりました。いくつ職務年数を重ねても、研修は、決して欠かせないものだと実感しました。

戸澤

「書く」作業は心身ともに疲弊する。「話す」ことに工夫を重ねる教師という立場から考えると、いかに「書く」ことに慣れていないかが、実感として我が身にのしかかる。書くことで生計を立てる文筆家と言われる方々の凄みを感じてしまう。しかしながら「(文字として)残す」ことで責任を果たす「書く」行為は、多少の疲労は覚悟の上、机に向かうこともまた意義深い。

太田

数年ぶりに研修部に所属し、再び研修集録の発行にかかるようになりました。デジタルデータよりも、やはり製本されたものの方が形として残り、多くの人の目に触れることになると改めて思いました。

大堤

今回、研修集録を発行するにあたり、過去の集録を手にする機会がありました。その年その年の研修記録には、先生方の授業や生徒への熱い思いが込められていると感じました。今年もたくさんの先生方の貴重な原稿を、研修集録にまとめることができました。ゆっくりご覧いただければ幸いです。

須藤

校内研修について。授業と同じで、誰にとっても興味深く役に立つ研修を企画するのは難しい。しかし、掘り起こせば意外にネタはあるものだと認識を新たにさせられた。また、研修は生徒の立場にたって生徒の気持ちを理解するよい機会かも……。

戸田

今年度は10年研の年で、多くの研修に参加させていただきました。研修を通して今の自分を振り返っては反省し、試行錯誤する毎日。おかげで、この1年間はいろいろな面で鍛えられました。私の研修に関わって下さいました先生方、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました！

藤中

『研修集録』第27号、お届けします。

今年度の締めに、ユネスコスクール班の今までの取り組みが評価され、「環境大臣表彰」受賞という嬉しいニュースが飛び込んできました。と言うわけで、ユネスコスクール班の取り組みを特集してみました。

編集作業するにあたり、過去の集録や他校の研究紀要を参考にしようとしたのですが、デジタルデータ隆盛の昨今、手軽にひもとくことができず、結局参考にしたのは冊子として手元にある集録でした。せっかくの研究成果を多くの人に読んでもらいたい、気軽にページをめくってもらいたい、今年度の研修部員7人の共通した思いでした。

最後になりましたが、年度末のお忙しい中、本誌のために原稿を執筆してくださった先生方に心よりお礼申し上げます。

大関

平成24年度 研修集録

発行日 平成25年3月31日

発行者 秋田市立秋田商業高等学校

〒010-1603 秋田市新屋勝平台1-1

T E L 018-823-4308~9

F A X 018-823-4310

印刷所 株式会社フロム・エー



校訓

感謝
勤勉
鍛鍊